

茨城県教育財団文化財調査報告第185集

大山 I 遺跡 2

取手都市計画事業下高井特定土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

平成14年3月

都市基盤整備公団 茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第185集

おお やま いち
大山 I 遺跡 2

取手都市計画事業下高井特定土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

平成14年3月

都市基盤整備公団 茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団



第37号住居跡出土銅鏡（重圈文鏡）



大山Ⅰ遺跡全景

序

茨城県は、21世紀の社会を展望し、福祉・医療・健康増進・生きがいづくり等の機能を備えた、県民の誰もが安心でき、充実した生活をおくることのできる「人にやさしいまちづくり」を計画しております。このような状況の中で、取手市と都市基盤整備公団茨城地域支社は、市の北西部に拠点都市機能を備えた、良好な居住環境の供給を行うための特定土地区画整理事業を推進しております。その予定地内の下高井地区には大山Ⅰ遺跡をはじめとして、数多くの遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、都市基盤整備公団茨城地域支社と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を交わし、平成12年7月から同年9月にかけて大山Ⅰ遺跡の発掘調査を実施してまいりました。この調査によって県下でも誠に貴重な古墳時代の銅鏡が発見されるなど、取手市ならびに本県の古代史を解明する上で多大な成果をあげることができました。

本書は、平成9年6月に刊行された『大山Ⅰ遺跡』の報告書に続き、大山Ⅰ遺跡の第2次調査の成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である都市基盤整備公団茨城地域支社から賜りました多大なる御協力に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

また茨城県教育委員会、取手市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成14年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、都市基盤整備公団茨城地域支社の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成12年度に発掘調査を実施した、茨城県取手市大字寺田字大山おおあざてら た あざおおやまに所在する大山Ⅰ遺跡おおやまいちの発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間および整理期間は、以下の通りである。
調 査 平成12年7月3日～平成12年9月30日
整 理 平成13年6月1日～平成13年9月30日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久の指揮のもと、調査第1班長海老澤稔、主任調査員平石尚和、調査員駒澤悦郎が担当した。
- 4 当遺跡の整理および本書の執筆・編集は、整理第一課長川井正一の指揮のもと、調査員駒澤悦郎が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、銅鏡の時期・性格などについて、明治大学教授小林三郎氏に御指導いただいた。
- 6 発掘調査及び整理に際し、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、X軸 = -8,200m、Y軸 = +18,320mの交点を基準点とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、その組み合わせで「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに、小調査区も同様に北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」「B2b2区」のように呼称した。

2 遺構番号は平成8年度調査からの継続である。

3 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

4 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

【遺構】 住居跡 - S I 土坑 - SK 溝 - SD 柱穴・貯蔵穴 - P

【遺物】 土器 - P 土製品 - DP 石器・石製品 - Q 金属製品 - M 拓本土器 - TP

【土層】 攪乱 - K

5 遺構及び遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

焼土・炉 =  粘土 =  赤彩 =  繊維土器 = 
土器 = ● 土製品 = ○ 石器・石製品 = □ 金属製品 = △ 硬化面 = ----

6 遺構・遺物実測図の掲載方法については、以下のとおりである。

(1) 遺跡全体図は縮尺750分の1とし、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

7 「主軸方向」は、炉を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例：N - 10° - E)

なお推定値は [] を付して示した。

8 遺物観察表における土器の計測値の単位はcmである。現存値は () で、推定値は [] を付して示した。備考の欄は、遺物の残存率、実測番号等、その他必要と思われる事項を記した。

抄 録

ふりがな	おおやまいちいせき に							
書名	大山 I 遺跡 2							
副書名	取手都市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第185集							
編著者名	駒澤悦郎							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029 (225) 6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029 (225) 6587							
発行年月日	2002 (平成14年) 3月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
おおやまいちいせき 大山 I 遺跡	いばらきけんとりでし 茨城県取手市大字 寺田字大山 4441 番地の1ほか	08217 -28	35度 55分 7秒	140度 2分 51秒	16m ~ 22m	20000703 ~ 20000930	2,252 m ²	下高井特定土地 区画整理事業に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大山 I 遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡 炉穴	2軒 2基	縄文土器 (深鉢・浅鉢・ 台付土器), 石器 (石鏃・ 剥片)		縄文時代から近世にかけて の複合遺跡である。特に古 墳時代前期に大きな集落が 形成され, 当地域の中心的 な存在であったと考えられ る。特筆されることは, 第 37号竪穴住居跡から銅鏡が 出土していることである。	
		古墳	竪穴住居跡 竪穴跡	26軒 1基	土師器 (壺・甕・台付甕・ 椀・高杯・器台・埴・甑・ 鉢・手捏土器・ミニチュ ア土器), 石製品 (双孔 円板・砥石), 土製品 (球状土錘・管状土錘), 金属製品 (銅鏡・鉄鏃)			
		平安	竪穴住居跡	1軒	土師器 (坏) 須恵器 (坏)			
	その他	縄文	遺物包含層 陥し穴	1か所 1基	縄文土器 (深鉢・浅鉢), 石器 (凹石・石斧・尖頭 器・剥片)			
		近世以降	溝 土坑	3条 19基	陶磁器, 土師質土器 (内 耳鍋), 銭貨 (寛永通宝・ 半銭・一銭)			

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	9
第1節 調査方法と遺跡の概要	9
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 縄文時代の遺構と遺物	12
(1) 竪穴住居跡	12
(2) 炉穴	15
(3) 陥し穴	17
2 古墳時代の遺構と遺物	17
(1) 竪穴住居跡	18
(2) 竪穴跡	68
3 平安時代の遺構と遺物	69
(1) 竪穴住居跡	69
4 時期不明の遺構と遺物	70
(1) 土坑	70
(2) 溝	78
5 その他の遺構と遺物	80
6 遺構外出土遺物	83
第4節 まとめ	89
1 旧石器時代～縄文時代	89
2 古墳時代	89
3 平安時代以降	92
4 小結	93
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

取手市は、整備された交通網や首都圏40km以内という恵まれた立地条件のもと、工業団地の進出や住宅地の開発が著しく、めざましい発展を遂げている。また、つくばエクスプレスや首都圏中央連絡自動車道の開発計画に伴い、ますます茨城県南部の拠点都市としての役割を期待されている。そうした中、住宅・都市整備公団首都圏都市開発部（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に、平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に改称）を事業主体として、取手市の西部地区に「取手都市計画事業下高井特定土地区画整理事業」を進めている。

平成4年8月26日、住宅・都市整備公団首都圏都市開発部の照会を受けて、茨城県教育委員会は、取手市教育委員会と埋蔵文化財の有無の確認とその取り扱いについて協議の上、表面観察及び試掘調査を実施し、開発区域内に甚五郎崎遺跡ほか大山Ⅰ遺跡など数遺跡の所在を確認した。茨城県教育委員会は住宅・都市整備公団首都圏都市開発部と、遺跡の取り扱いについて協議を重ね、現状保存が困難であることから、記録保存の措置を講ずることとし、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

紹介された財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団首都圏都市開発部と業務の委託契約を結んだ。これを受けて、財団法人茨城県教育財団は、平成5年度に下高井向原Ⅱ遺跡、平成6年度に甚五郎遺跡と下高井向原Ⅰ遺跡及び下高井向原Ⅱ遺跡、平成7年度に柏原遺跡と前畑遺跡及び東原遺跡、平成8年度に大山Ⅰ遺跡の発掘調査を実施した。さらに平成12年度、土地区画整理事業にかかる大山Ⅰ遺跡の未調査部分について、都市基盤整備公団茨城地域支社と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、同年7月から9月まで大山Ⅰ遺跡の第2次調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

大山Ⅰ遺跡の第2次調査は、平成12年7月3日から同年9月30日までの3か月間にわたって実施した。以下、調査の経過について、概要を工程表で記載する。

月 工程	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
発掘諸準備				—								
試掘				—								
表土除去				—	—							
遺構確認				—	—							
遺構調査					—	—	—					
遺物洗浄				—	—	—	—					
注記作業				—	—	—	—					
写真整理					—	—	—					
補足調査						—	—					
撤収準備						—	—					

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大山I遺跡は取手市大字寺田字大山4441-1ほかに所在し、取手市役所の北西約2kmのところ¹⁾に位置している。取手市は、茨城県最南部の利根川沿いにあり、面積は36.84km²である。市の南側は利根川に沿った低地、北側は小貝川に沿った低地が広がる。また、それらの低地に挟まれて東西に細長く北相馬台地が続いている。

市の地形形成に深く関与した常陸川や鬼怒川は、江戸時代の「利根川東遷」と呼ばれる大規模な河川改修工事により、群馬県水上町大水上山を水源とする関東平野を貫流する利根川と名をかえて、市の南部を西から東へ流れ、本県と千葉県との県境を形成している。小貝川は栃木県南那須町八ヶ代付近を水源とし、蛇行しながら市の東部で利根川と合流している。

標高21~25mの北相馬台地は、利根川や小貝川の支流が樹枝状に入り込み、複雑な地形を形成している。市街地より東部では、小文間の小台地や利根町の小台地が独立した台地として連なっている。その地質は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤層となり、下部から成田層下部、成田層上部、竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層の順に堆積している。堆積状況は水平かつ単調で、褶曲や断層は見られない。

当遺跡は取手市の北西部、小貝川と利根川に挟まれた標高20~22mの北相馬台地北縁部に位置している。当遺跡の立地する台地は、北東方向へ細長く張り出し、北と西には小支谷が入り込んでいる。また台地は南側に最高点を有し、北側へゆるやかに傾斜しており、遺跡は緩斜面に位置している。なお当遺跡と周辺の土地利用の現状は、台地上は主として山林及び畑として、台地下の低地は水田として利用されている。

第2節 歴史的環境

大山I遺跡は旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。当遺跡周辺は変化に富んだ地形で、鬼怒川や小貝川、そして利根川などの水運にも恵まれていたため、古代から人々が生活を営む場所としては絶好の舞台となってきた。それを裏付けるように当遺跡周辺には、旧石器時代から江戸時代にかけての遺跡が数多く確認されている。ここでは当遺跡に関連する主な遺跡について、時代別に述べることにする。

旧石器時代の遺跡としては、当遺跡の西方1kmに位置する柏原遺跡<66>からは、細石刃核や細石刃、彫器及び削器などがまとまって出土し、取手市内はもとより、本県南部における代表的な細石器文化層の確認された遺跡として広く知られている¹⁾。また西方貝塚<3>や大渡遺跡<53>、台宿二本松遺跡<13>などからも、旧石器時代に属する石器や剥片が出土している²⁾。他の時代に比べて遺跡数は極めて少ない。しかし、柏原遺跡における関東ローム層の堆積状況は良好で、黒色帯も明瞭に観察されていることから、今後、関東ローム層が比較的厚く堆積する取手市周辺における発掘調査によって、遺跡数はさらに増加すると考えられる。

縄文時代の草創期及び早期の遺跡は、台地縁部や小高い尾根上に立地する傾向がある。椿山・大日原遺跡<31>からは撚糸文系土器などが出土し、北中原遺跡<18>や甚五郎崎遺跡<28>、下高井向原I遺跡<27>などでは、早期後半の条痕文系土器を出土する竪穴住居跡や炉穴がまとまって発見されているため、縄文時代早期後半には小規模集落が点々と営まれていたと考えられる。また大渡遺跡や下高井向原I遺跡の土坑内貝塚出土の貝類は、ハマグリ・アサリ・マテガイ・ハイガイなどの鹹水産が主体であることから、当遺跡周辺は当時海

が広がっていたと考えられる³⁾。古環境を考える上で参考となろう。前期になると遺跡数も増え、早期よりも遺跡の規模がやや大きくなり、遺跡は小貝川に面した台地縁辺部に立地する傾向がある。代表的な貝塚は向山貝塚<32>や西方貝塚などが知られ、下高井向原 I 遺跡では関山式期の竪穴住居跡 2 軒、浮島式期の竪穴住居跡 1 軒が発見されるなど、小規模集落や貝塚などが形成されている⁴⁾。中期になると環状を呈するような大規模集落が営まれるようになる。代表的な西方貝塚は、断続的な発掘調査によって貝塚を伴う中期中葉から後葉にかけての環状集落であることが判明している⁵⁾。後期になると遺跡数がかかなり増加する傾向にある。著名な中妻貝塚はいわゆる馬蹄形貝塚であり、層厚 1 m 以上、直径 200m という規模である⁶⁾。晩期になると著しく遺跡数が減り、集落の立地や居住形態などが大きく変化したことが予想される。遺跡としては後期から継続する中妻貝塚や上高井神明貝塚<35>などが知られている。なお上高井神明貝塚からは豊富な遺物を伴う包含層が確認されている⁷⁾。

弥生時代の遺跡は、柏原遺跡、東原遺跡<24>などで遺跡数は多くない。柏原遺跡と東原遺跡では後期後半の竪穴住居跡がわずかながら発見されている⁸⁾。集落構成などは不明で、台地縁辺部を中心に帯状ないし環状に竪穴住居跡が分布する傾向がある。また取手市域から出土する弥生時代後期の土器は、栃木県を中心に分布する弥生土器や江戸川流域で発達した弥生土器をはじめ、本県を代表する十王台式土器などが見られ、南関東と北関東の弥生文化の交錯を予想させる⁹⁾。

古墳時代になると遺跡数が急増する。集落跡としては前期の大渡遺跡や北中原遺跡、中期の稲向原 2 遺跡<43>、後期の貝塚新田遺跡<33>などがあり、代表的な古墳としては市之代古墳群<39>や宗四郎坂古墳<10>、上高井糠塚古墳群<36>などがある。6 世紀代の市之代古墳群は小貝川の沖積低地に独立した台地上にあり、小貝川を望む台地縁辺部に集中して構築されている。現在、前方後円墳 3 基、円墳 12 基が確認されている。なお市之代古墳群の第 3 号墳や上高井糠塚古墳群の第 1・2 号墳の発掘調査では、埴輪や埴輪列、円筒埴輪棺などが発見されている¹⁰⁾。

奈良・平安時代の遺跡は、甚五郎崎遺跡、北中原遺跡、台宿二本松遺跡、新屋敷遺跡<59>などで、小規模集落跡が比較的多い。甚五郎崎遺跡の第 3 号竪穴住居跡からは「袋」、「庄」、「山本」、「三」、同遺跡の第 8 号竪穴住居跡からは「得」、北中原遺跡の第 6 号竪穴住居跡からは「深田」、「井」と書かれた墨書土器が出土している¹¹⁾。また、台宿二本松遺跡の第 5 号土坑からは、145 点以上の土師器坏と 2 点の須恵器坏が一括出土している。極めて稀な出土状況から、古代における祭祀や饗宴に伴う廃棄行為と考えられている¹²⁾。

中世以降の遺跡は主に城跡である。戦国時代、取手市域を含む北相馬地域は下総国北部に位置しており、小貝川を挟んで常陸国と接していた。代表的な中世の城館跡は、下高井城跡<29>、大山城跡<2>、野々井城跡<52>、古戸城跡<46>、小文間城跡<12>、大鹿城跡<20>などである。その城跡の分布からは、それらが常陸の佐竹方に対する北条方の防衛拠点であったことが推定される¹³⁾。現在、多くの城跡が開発により破壊されていく中、下高井城跡は主郭及び曲輪などが比較的良好な状態で保存されている。城主は相馬氏、別称は高井氏である。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表 1、第 1 図の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 茨城県教育財団「取手都市計画事業下高井特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大山 I 遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 123 集 1997 年

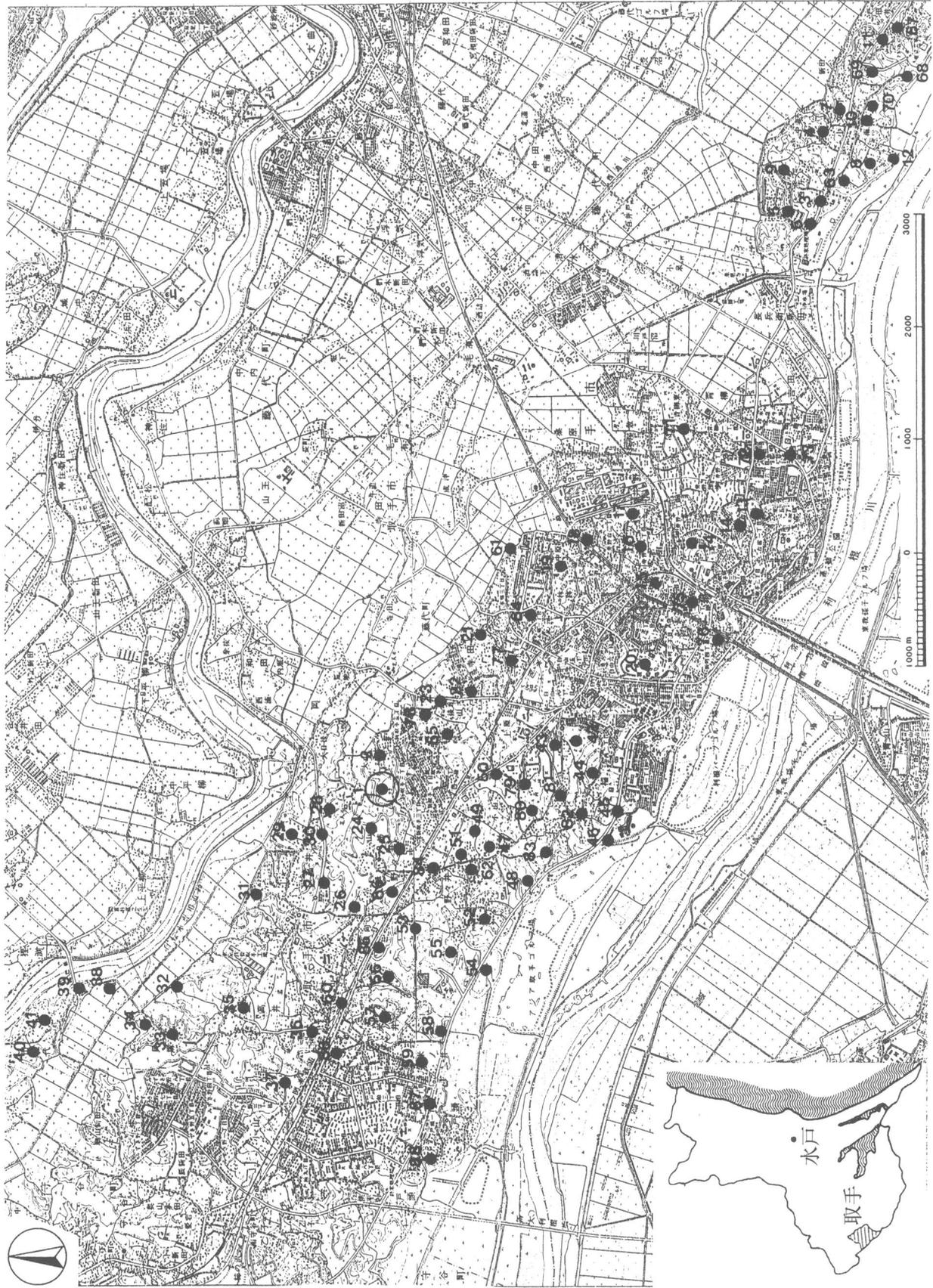
茨城県教育財団「取手都市計画事業下高井特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 東原遺跡 前畑

遺跡 柏原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第143集 1999年

- 2) 泉水正和ほか 『台宿二本松遺跡発掘調査報告書』 取手市教育委員会 1998年
- 3) 取手市教育委員会文化振興課 『茨城県取手市大渡Ⅰ遺跡－平成5年度発掘調査報告書－』 取手市教育委員会
1994年
大渡遺跡調査会 『大渡遺跡発掘調査報告書』 取手市教育委員会 1998年
茨城県教育財団 「取手都市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 甚五郎崎遺跡 下
高井向原Ⅰ遺跡 下高井向原Ⅱ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第107集 1996年
- 4) 註3), 茨城県教育財団・1996年に同じ
- 5) 野田良直 「西方貝塚の動態について」『研究ノート』 第7号 1998年
- 6) 鈴木正博ほか 『取手と先史文化－中妻貝塚の研究－上巻』 取手市教育委員会 1979年
鈴木正博ほか 『取手と先史文化－中妻貝塚の研究－下巻』 取手市教育委員会 1981年
諸星政得ほか 『取手市内における重要遺跡発掘調査報告 中妻貝塚 西方貝塚 高井城址』 取手市教育委員会
1989年
宮内良隆ほか 『中妻貝塚』 取手市教育委員会 1995年
なお、同貝塚は市道5139号線拡幅工事に伴う発掘調査で、縄文人骨104体が出土したことは記憶に新しい。詳細に
ついては、宮内良隆ほか・1995年を参照されたい。
- 7) 鈴木正博ほか 『取手と先史文化 別巻1』 取手市教育委員会 1984年
- 8) 註1)に同じ
- 9) 取手市史編さん委員会 『取手市史原始古代(考古)資料編』 取手市教育委員会 1989年
- 10) 諸星政得ほか 『市之台古墳群第3号墳発掘調査報告』 取手市教育委員会 1978年
- 11) 註3), 茨城県教育財団・1996年に同じ
北中原遺跡調査会 『茨城県取手市北中原遺跡発掘調査報告書』 取手市教育委員会 1990年
- 12) 池田晃一 「古代末の土器溜土坑予察－常北町青木遺跡例を中心に－」『研究ノート』 第8号 1999年
- 13) 註6), 諸星政得ほか・1989年に同じ
取手市史編さん委員会 『取手市史 通史編Ⅰ』 取手市教育委員会 1992年
宮内良隆ほか 『茨城県取手市大鹿城跡発掘調査報告書』 取手市教育委員会 1996年

参考文献

- ・蜂須紀夫ほか 『茨城県 地学ガイド』 コロナ社 1977年
- ・取手市史編さん委員会 『取手市史原始古代(考古)資料編』 取手市教育委員会 1989年
- ・茨城県教育庁文化課 『茨城県遺跡地図(地名表編)』 茨城県教育委員会 2001年
- ・茨城県教育庁文化課 『茨城県遺跡地図(地図編)』 茨城県教育委員会 2001年



第1図 周辺遺跡分布図

表1 大山I遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺跡名	市遺跡 番号	時 代					番 号	遺跡名	市遺跡 番号	時 代						
			旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平				中 近	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 近
1	大山遺跡	22	○	○		○	○	○	45	稲向原4遺跡	44		○			○	
2	大山城跡	22						○	46	古戸城跡	45						○
3	西方貝塚	1	○	○					47	惣代八幡遺跡	46		○				
4	中妻貝塚	2		○					48	宿畑遺跡	47		○		○		
5	谷耕地下貝塚	3		○					49	佃遺跡	48		○			○	
6	西方遺跡	4		○					50	遠道遺跡	49		○				
7	春日神社遺跡	5		○					51	堀尻遺跡	50		○				
8	台道南遺跡	6		○					52	野々井城跡	51						○
9	谷耕地遺跡	7		○					53	大渡遺跡	52	○	○		○		
10	宗四郎坂古墳	8				○			54	別当遺跡	53		○				
11	戸田井遺跡	9					○		55	竹ノ代遺跡	54				○		
12	小文間城跡	10						○	56	東山遺跡	55		○				
13	台宿二本松遺跡	11	○	○			○		57	堂ノ脇遺跡	56					○	
14	台宿貝塚	12		○			○		58	白簾遺跡	57		○				
15	中原遺跡	13					○		59	新屋敷遺跡	58		○			○	
16	南中原遺跡	14					○		60	出土遺跡	59					○	
17	花輪台遺跡	15						○	61	寺田耕地遺跡	60					○	
18	北中原遺跡	16		○			○		62	西光寺前遺跡	61		○				
19	除戸遺跡	17		○		○			63	谷耕地遺跡	62		○				
20	大鹿城跡	18		○				○	64	寺田大塚遺跡	63					○	
21	西浦遺跡	19		○			○		65	後山遺跡	64		○				
22	駒場1遺跡	20		○					66	柏原遺跡	65	○	○	○		○	
23	駒場2遺跡	21					○		67	中谷津1遺跡	66					○	
24	東原遺跡	23		○	○				68	中谷津2遺跡	67					○	
25	前畑遺跡	24		○					69	台道南2遺跡	68					○	
26	陣屋原遺跡	25		○					70	台道南3遺跡	69				○		
27	下高井向原遺跡	26		○			○		71	観音免遺跡	70					○	
28	甚五郎崎遺跡	27		○			○	○	72	長町遺跡	71				○	○	
29	下高井城跡	28						○	73	高畑遺跡	72					○	
30	如何崎遺跡	29					○		74	寺前遺跡	73		○				
31	椿山・大日原遺跡	30		○			○		75	取手一里塚	74						○
32	向山遺跡(貝塚)	31		○			○		76	山王台遺跡	75				○		
33	貝塚新田遺跡	32					○		77	西浦2遺跡	76					○	
34	台坪遺跡	33		○					78	後山2遺跡	77					○	
35	神明遺跡(貝塚)	34		○					79	遠道前遺跡	78					○	
36	糠塚古墳群	35				○			80	後田遺跡	79				○	○	
37	大境遺跡	36		○					81	稲向原5遺跡	80				○		
38	上川辺遺跡	37		○					82	稲向原6遺跡	81		○		○		
39	市之台古墳群	38				○			83	宿畑2遺跡	82				○	○	
40	南割遺跡	39				○			84	五十塚遺跡	83				○		
41	姫宮神社遺跡	40		○					85	中峠遺跡	84				○	○	
42	稲向原1遺跡	41		○					86	戸頭神明遺跡	85		○		○	○	
43	稲向原2遺跡	42				○			87	谷ノ上遺跡	86		○				
44	稲向原3遺跡	43		○					88	水深台遺跡	87				○		



第2図 大山I遺跡遺構全体図

第3章 調査の成果

第1節 調査方法と遺跡の概要

調査区は、X軸（南北）-8,200m、Y軸+18,320mを基準点とし、下高井特定土地区画整理事業地内に所在する当遺跡、甚五郎崎遺跡、下高井向原遺跡Ⅰ・Ⅱ遺跡、柏原遺跡、前畑遺跡、東原遺跡を包括して設定した。

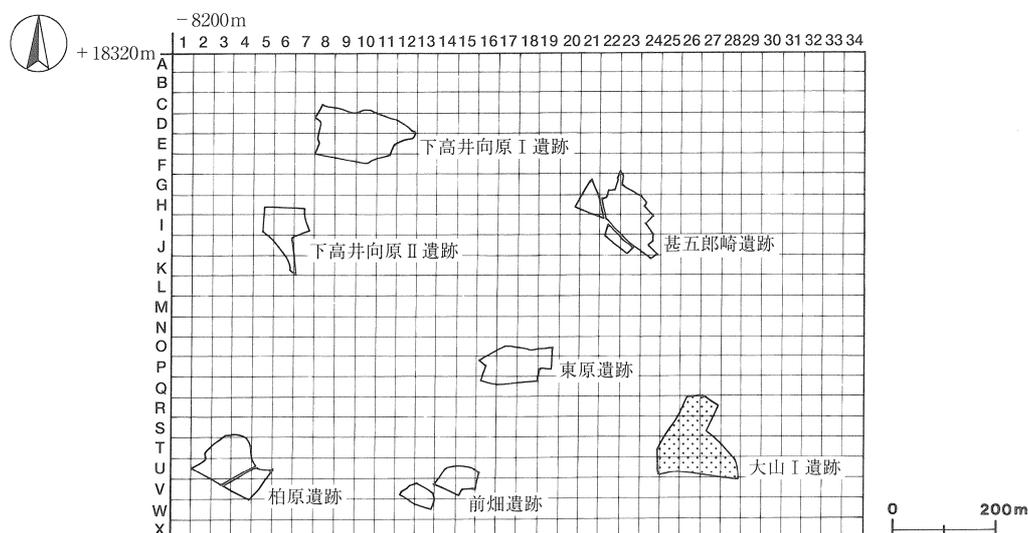
遺跡名はかつての分布調査により、大山Ⅰ遺跡、大山Ⅱ遺跡、大山城跡と地点別に取り扱われているため、これを継承した。ただし、平成13年3月に刊行された『茨城県遺跡地図』では、それらの遺跡を包括する形で「大山遺跡」として掲載されている。

調査は人力による伐開及び試掘調査のデータをもとに、重機による表土除去を行い、ソフトロームへの漸移層上面で遺構確認を行った。また確認した遺構については遺物や重複関係などに留意しながら、その覆土を慎重に取り除き、随時、適切な記録を取る方法で進めた。

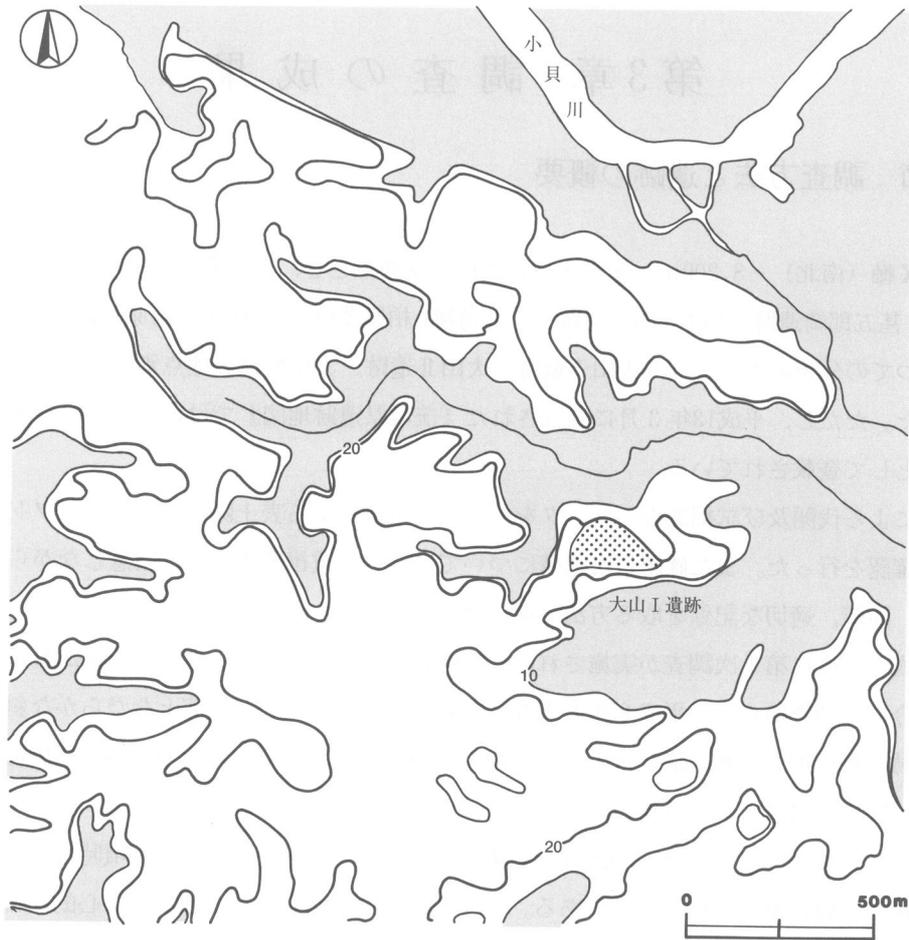
当遺跡は平成8年度に第1次調査が実施され、古墳時代前期を中心とする竪穴住居跡25軒、竪穴遺構3基が発見された。今回の調査地点は、平成8年度調査区の北側部分、平坦な台地部となだらかな斜面部で、縄文時代の竪穴住居跡2軒、炉穴2基、陥し穴1基、遺物包含層1か所、古墳時代前期の竪穴住居跡26軒、竪穴跡1基、平安時代の竪穴住居跡1軒、近世以降の溝3条、土坑19基が発見された。

以上のとおり、平成8年度及び今回の調査の結果、当遺跡の中心となる時期は古墳時代前期で、古墳時代前期の竪穴住居跡は47軒、竪穴遺構が4基である。遺跡の規模などから、この地域の中心的な古墳時代前期の集落跡と考えられる。また当遺跡は旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡であることが判明した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に40箱出土している。縄文時代の主な遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢・台付土器）、石器（凹石・石斧・石鏃・尖頭器・剥片）である。古墳時代の主な遺物は、土師器（壺・甕・台付甕・椀・高坏・器台・埴・甌・鉢・手捏土器・ミニチュア土器）、土製品（球状土錘・管状土錘）、金属製品（銅鏡・鉄鏃）、石製品（双孔円板・砥石）である。奈良・平安時代の主な遺物は、土師器（坏）、須恵器（坏）である。近世以降の主な遺物は、陶磁器、土師質土器、銭貨である。



第3図 調査区設定図



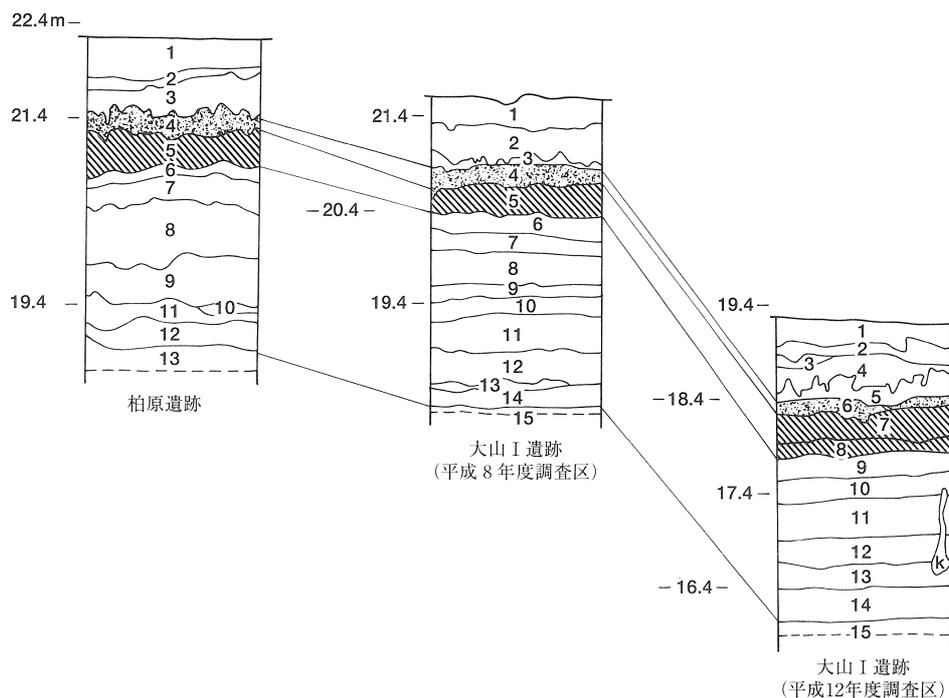
第4図 大山I遺跡周辺地形図



第5図 大山I遺跡調査区設定図

第2節 基本層序

調査区域南側の台地平坦部（S27f3区）に深さ3.3mのテストピットを設定して、基本土層の観察を行った。ローム層の層序区分については、平成8年度の調査における層序区分に準じている。また第6図では当遺跡の西方1kmに位置し、ローム層の火山ガラス比分析及び重鉍物分析が行われた柏原遺跡の基本土層と、平成8年度調査の基本土層を参考に、その対応関係を模式図的に示した。



第6図 基本土層及び対応関係模式図

第1層は、層厚15～30cm，ローム粒子及びローム小ブロックを微量含む黒褐色土である。

第2層は、層厚10～28cm，ローム粒子及びローム小ブロックを少量含む暗褐色土である。

第3層は、層厚8～17cm，ローム粒子及びローム小ブロックを中量含む暗褐色土（ローム漸移層）である。

第4層は、層厚10～43cm，褐色のソフトローム層である。

第5層は、層厚10～30cm，褐色のローム層である。スコリア粒子を微量含んでいる。

第6層は、層厚5～20cm，明褐色のローム層である。ガラス質粒子及びスコリア粒子を微量含み、締まりが強い。始良Tn火山灰（AT）を含む層に対比される。柏原遺跡の第5層上部に対応する。

第7層は、層厚18～36cm，暗褐色のローム層である。第2黒色帯上部（BBⅡ）に対比される。柏原遺跡の第5層に対応する。

第8層は、層厚8～30cm，暗褐色のローム層である。第2黒色帯下部（BBⅡ）に対比される。柏原遺跡の第5層に対応する。

第9層は、層厚20～27cm，黄褐色のローム層である。白色スコリア粒子を微量含み、締まりが強い。

第10層は、層厚20～26cm，明黄褐色のローム層である。白色スコリア粒子を微量含み、粘性及び締まりが強い。

第11層は、層厚40～42cm，オリーブ褐色のローム層である。白色粒子を微量含み、粘性及び締まりが強い。

第12層は、層厚20～34cm、オリーブ褐色のローム層である。白色粒子及び鉄分の黒色粒子を微量含み、粘性及び締まりが強い。

第13層は、層厚20～29cm、褐色のローム層である。白色粒子及び鉄分の黒色粒子を少量含み、粘性が極めて強い。

第14層は、層厚32～35cm、暗褐色のローム層である。白色粒子及び鉄分の黒色粒子を中量含み、粘性が極めて強い。

第15層以下は、いわゆる常総粘土層である。明緑灰色の粘土層で、鉄分の黒色粒子を多量含み、粘性が極めて強い。

なお遺構の多くは、第2層下面及び第4層上面で確認され、第3～5層にかけて掘り込まれている。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した縄文時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、炉穴2基、陥し穴1基である。これらの遺構は台地縁辺部から斜面部にかけて位置し、時期は早期から後期にわたっている。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について、記述していくことにする。

(1) 竪穴住居跡

第33号住居跡（第7図）

位置 調査区の中央部、R27g2区。標高17mの台地縁辺部に位置する。

重複関係 古墳時代前期の第36号竪穴住居跡に掘り込まれている。北側半分は斜面部で削平されている。

規模と形状 推定長軸3.1m、推定短軸2.4mの隅丸長方形である。主軸方向はN-18°-Wである。確認した壁は、高さ14cmで外傾して立ち上がる。

床 確認した範囲は、ほぼ平坦である。

ピット 3か所。いずれも性格は不明である。P1は北東コーナー際に、P2・3は東壁寄りに位置する。深さはP1が48cm、P2が14cm、P3が13cmである。

炉 中央部やや北寄りに設けられている。上面は削平されている。長径40cm、短径28cmの楕円形で、確認した深さは3cmである。床面を掘りくぼめた地床炉で、炉床は火熱を受け、赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土小ブロック少量、ローム粒子・炭化物微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化物微量

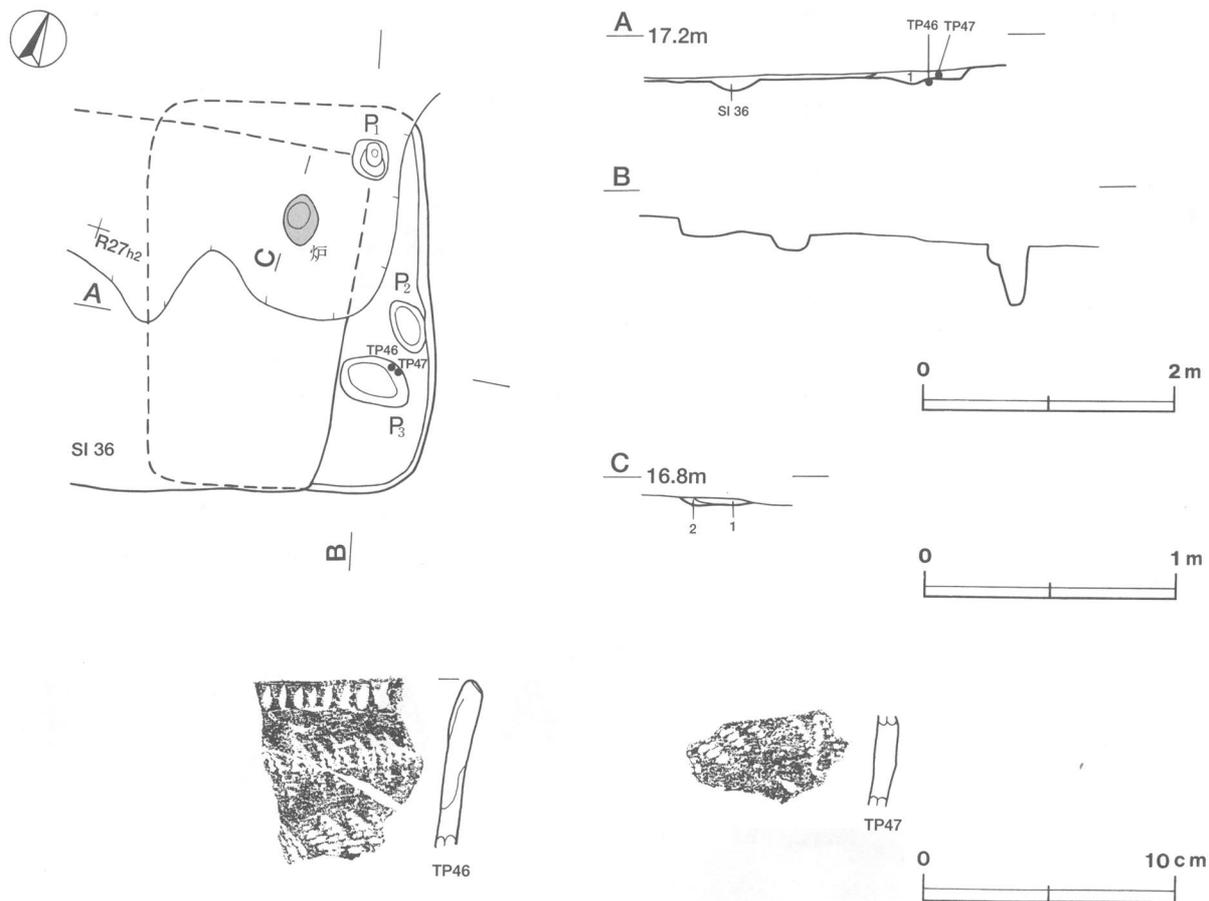
覆土 単一層である。重複や削平により覆土の詳細は不明である。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片5点、礫1点が、覆土下層からまばらに出土している。

所見 時期は、遺構の形態及び出土遺物から、縄文時代前期後半の浮島式期と判断される。



第7図 第33号住居跡・出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表 (第7図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP46	縄文土器	深鉢	-	(6.5)	-	石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部刻み, 貝殻波状文。	床面	5%
TP47	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	石英・雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	貝殻波状文。	床面	5%

第35号住居跡 (第8図)

位置 調査区の東部, R27f9区。標高15.5mの斜面部に位置する。

確認状況 東半分が調査区域外に位置する。北側は斜面部で削平されている。また, 立木の根により中央部が破壊されている。

規模と形状 規模は不明である。確認した長径3.5m, 短径1.95mで, 平面形は円形ないし楕円形と推定される。壁は高さ74cmで, 確認した範囲は外傾して立ち上がる。

床 確認した範囲はほぼ平坦で, 部分的に踏み固められている。

ピット 確認した範囲にはない。

炉 確認した範囲にはない。

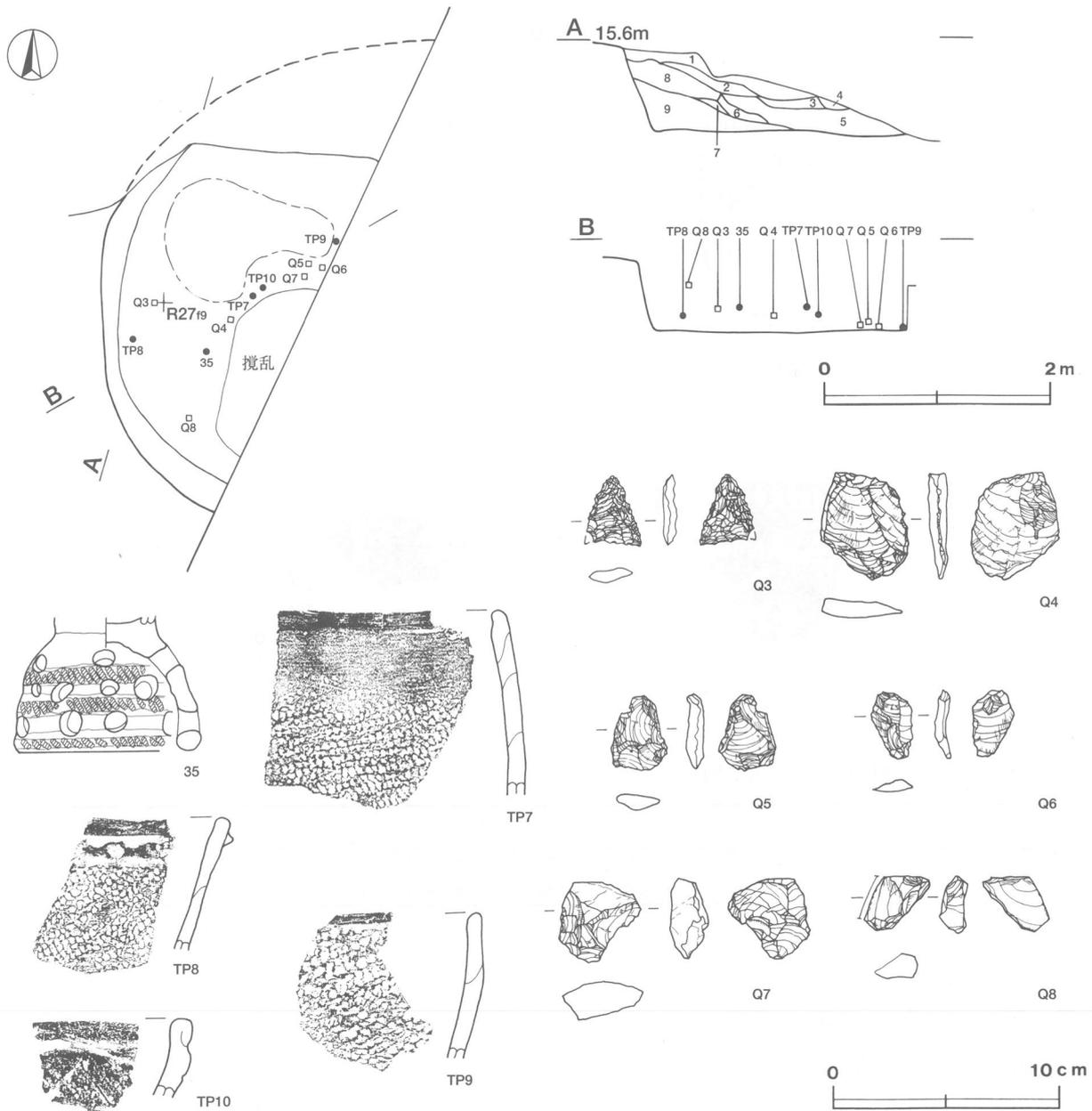
覆土 9層からなる。台地上部からの土砂の流入を示す堆積状況のため, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|-------|-----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量, 黒色土粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム小ブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | 8 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子中量 | 9 褐色 | ローム粒子多量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片5点、石鎌1点、剥片5点が、覆土下層から出土している。特に黒曜石製の剥片がまとめて出土している。

所見 時期は、遺構の形態及び出土遺物から、縄文時代後期中葉の加曾利B 1 式期と判断される。



第8図 第35号住居跡・出土遺物実測図

第35号住居跡出土遺物観察表 (第8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
35	縄文土器	台付土器	-	(6.0)	8.3	石英・長石	橙	普通	台部外面に3段のRL単節縄文を施し、段間に径0.8~1cmほどの孔を一定間隔で3列穿つ。	下層	30% P L22

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP7	縄文土器	深鉢	-	(8.3)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	地文はLR単節縄文、口縁部内面に1条の沈線を施す。	中層	5% P L26
TP8	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	長石	橙	普通	押捺を加えた紐線、地文はLR単節縄文を施す。	下層	5% P L26
TP9	縄文土器	深鉢	-	(6.3)	-	長石・雲母	黒褐	普通	LR単節縄文を縦横に施し、羽状縄文を作出する。	床面	5% P L26
TP10	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	長石・雲母	褐	普通	口縁部に沿って沈線を施す。地文はRL単節縄文か。	中層	5% P L26

番号	種別	計測値				石質	特徴	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q3	石 鏃	3.1	(2.4)	0.6	(4.5)	チャート	平基式、両面調整、側縁に丁寧な調整加工を施す。	中層	P L 32
Q4	剥 片	4.7	3.8	0.8	15.2	黒曜石	縦長剥片、背面に前段階の剥離面を残す。	下層	P L 32
Q5	剥 片	3.3	2.5	0.8	5	黒曜石	素材は縦長剥片、両側縁に2次加工を有する。	下層	P L 32
Q6	剥 片	2.9	1.8	0.5	2.7	黒曜石	縦長剥片、背面に前段階の剥離面を残す。	床面	P L 32
Q7	剥 片	3.6	3.5	1.7	16.5	チャート	素材は厚みのある剥片、背面に2次加工、自然面を残す。	下層	P L 32
Q8	剥 片	2.5	2.9	1	5.3	チャート	素材は厚みのある横長剥片、1側縁に微細剥離痕あり。	中層	P L 32

(2) 炉穴

第1号炉穴 (第9図)

位置 調査区の南西部, R26h5区。標高16.2mの台地縁辺部に位置する。

重複関係 南側を古墳時代前期の第23号竪穴住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 確認した長径1.34m, 短径0.98mの不整楕円形である。底面はほぼ平坦で皿状を呈し、特に踏み固められている部分は認められない。壁は外傾して立ち上がり、北側で直立する。長径方向はN-25°-Wである。炉は底面中央部やや南寄りに設けられている。炉の平面形は長径52cm, 短径44cmの楕円形で、確認面から炉床までの深さは31cmである。炉床は凹凸が見られ、火熱を受けて赤変硬化している。

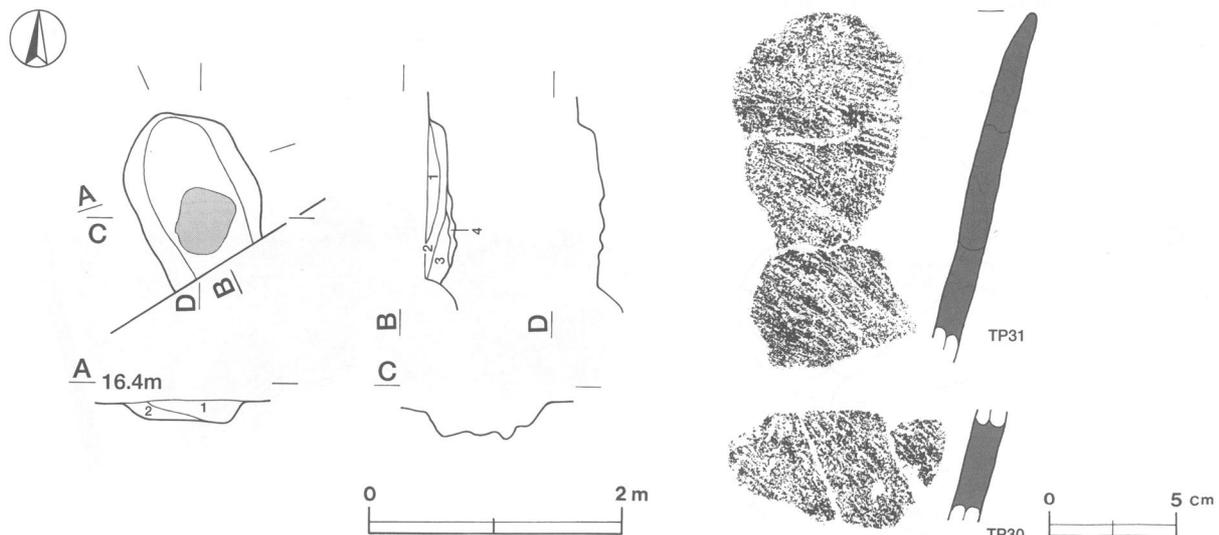
覆土 4層からなる。第1～3層は締まりが強く、乱れのないレンズ状堆積から自然堆積と考えられる。最下層の第4層は焼土及び炭化物を多量に含んでいる。

土層解説

- | | |
|-----------------------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 3 黒褐色 焼土小ブロック中量, ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 4 赤褐色 焼土中ブロック多量, 炭化物中量, ローム粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片14点が、主に覆土下層から出土している。

所見 時期は、遺構の形態及び出土遺物から、縄文時代早期後半の茅山上層式期と判断される。



第9図 第1号炉穴・出土遺物実測図

第1号炉穴出土遺物観察表 (第9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP30	縄文土器	深鉢	-	(13.8)	-	石英・雲母・繊維	暗赤褐	普通	表面斜め方向, 裏面多方向の条痕を施す。	底面	5% P L 26
TP31	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	石英・雲母・繊維	黒褐	普通	表面縦方向, 裏面多方向の条痕を施す。	底面	5% P L 26

第2号炉穴（第10図）

位置 調査区の中央部，R26g9区。標高16.3mの台地縁辺部に位置する。

重複関係 南側を時期不明の第15号土坑と古墳時代前期の第43号竪穴住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 確認した長軸1.58m，短軸1.02mの不定形である。底面はやや凹凸のある皿状を呈し，特に踏み固められている部分は認められない。北壁は部分的に直立し，他は外傾ないしなだらかに立ち上がる。長軸方向はN-79°-Wである。炉は底面東側に設けられている。炉の平面形は長径60cm，短径49cmの不整楕円形で，確認面から炉床までの深さは28cmである。炉床は凹凸が見られ，火熱を受けて赤変硬化している。

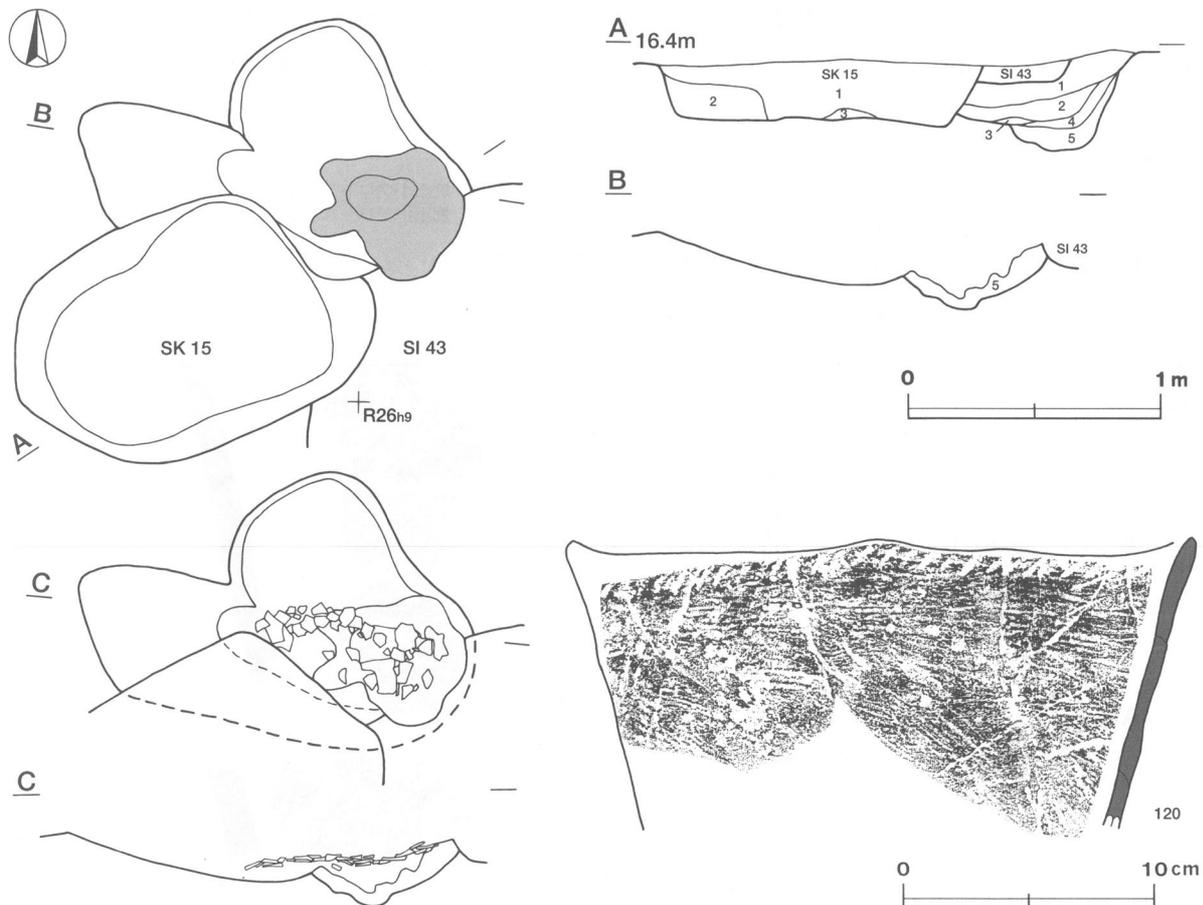
覆土 5層からなる。乱れのないレンズ状堆積から自然堆積と考えられる。第5層は焼土及び炭化物を多量に含んでいる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | 焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 5 赤褐色 | 焼土中ブロック多量，炭化粒子少量，ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック中量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片207点，礫1点が，主に覆土中から下層にかけて出土し，大形破片は炉床上面からまとまって出土している。

所見 時期は，遺構の形態及び出土遺物から，縄文時代早期後半の茅山上層式期と判断される。



第10図 第2号炉穴・出土遺物，第20号土坑実測図

第2号炉穴出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
120	縄文土器	深鉢	[24.4]	(11.5)	-	長石・雲母・繊維	にぶい黄橙	普通	表面縦方向，裏面多方向の条痕を施す。	下層	25% PL22

(3) 陥し穴

第1号陥し穴 (第11図)

位置 調査区の東部，R27f4区。標高16.1mの斜面部に位置する。

重複関係 上部を古墳時代前期の第41号竪穴住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 確認した長径2.96m，短径0.91mの長楕円形である。確認面から底面までの深さは1.49mである。壁は短径方向でV字状に外傾し，長径方向では内傾しながら立ち上がり，上位で直立する。底面は幅6～12cmと狭く，ほぼ平坦である。長径方向はN-58°-Eである。

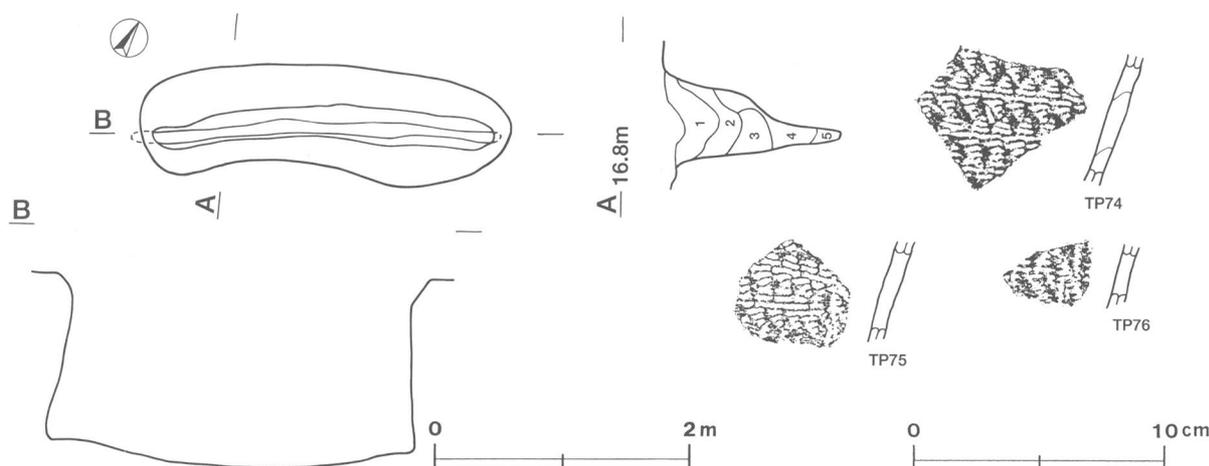
覆土 5層からなる。第3～5層はロームブロックを少量含む土層で，壁などの崩落土が主体と考えられるため，自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子中量 | 4 褐色 ローム中ブロック中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子多量 | 5 暗褐色 ローム小ブロック多量 |
| 3 褐色 ローム小ブロック中量 | |

遺物出土状況 縄文土器片2点，礫1点が，第3層から出土している。

所見 覆土中層から出土した縄文土器片は，縄文時代前期後半の浮島式土器のため，本跡は縄文時代前期後半以前に使用されたと推定される。



第11図 第33号土坑・出土遺物実測図

第1号陥し穴出土遺物観察表 (第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP74	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	石英・雲母・赤色粒子	灰褐	普通	貝殻波状文。	中層	5% P L 26
TP75	縄文土器	深鉢	-	(3.9)	-	石英・雲母・赤色粒子	黒褐	普通	貝殻波状文。	中層	5%
TP76	縄文土器	深鉢	-	(2.2)	-	石英・雲母・赤色粒子	黒褐	普通	貝殻波状文。	中層	5%

2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した古墳時代の遺構は，竪穴住居跡26軒，竪穴跡1基である。これらの遺構は主に台地縁辺部から斜面部にかけて位置し，時期はすべて前期と考えられる。以下，それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について，記述していくことにする。

なお平成8・12年度の調査区にまたがって位置している第23号住居跡については，平成12年度の調査成果を中心に記載した。平成8年度調査の詳細は，『茨城県教育財団文化財調査報告』第123集（以下，『第123集』と

略す)を参照されたい。また調査段階で第59号住居跡と呼称した遺構については、内部施設がなく傾斜のきつい底面には踏み固められた痕跡もないため、著しく居住性が乏しいと判断し、堅穴跡と改称した。『第123集』の第1～3号堅穴遺構と同類の遺構と理解されたい。

(1) 堅穴住居跡

第23号住居跡 (第12・13図)

位置 調査区の南西部, R26i6区。標高16.5mの台地縁辺部に位置し, 平成8年度と平成12年度の調査区域にまたがって位置している。大部分は平成8年度に調査され, 『第123集』で報告されているが, 調査区域外に位置していた北側のコーナー一部付近を今回調査した。

重複関係 縄文時代早期の第1号炉穴の南側を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.34m, 短軸4.3mで方形である。主軸方向はN-27°-W, 壁は高さ50~52cmで直立する。

床 平坦で, 炉を囲むように踏み固められている。

炉 中央部北西寄りに設けられている。平成8年度の調査で確認した炉の範囲よりも, さらに北西側に延びていることが確認された。長径134cm, 短径76cmの不整楕円形で, 床面を15cm程度掘りくぼめた地床炉である。

炉床は火熱を受け, 赤変硬化している。

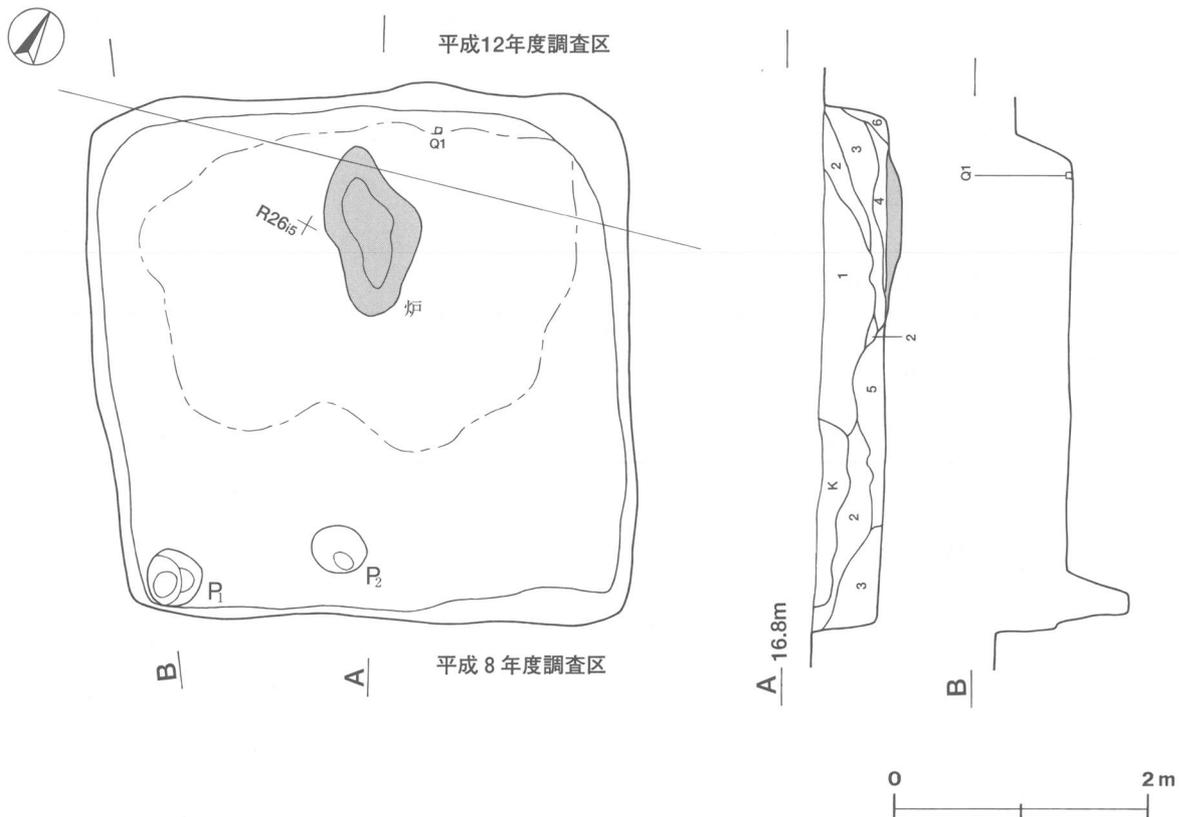
覆土 新たに1層を加えて6層からなる。

土層解説

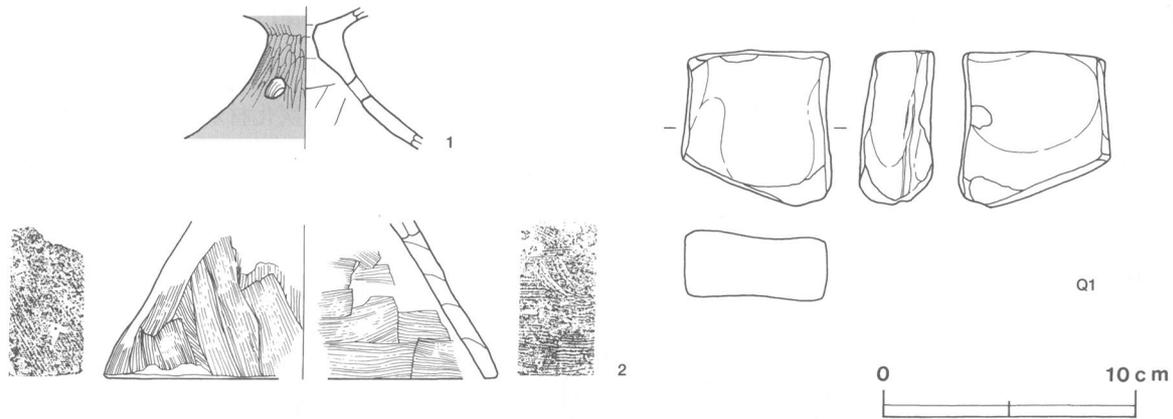
6 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片49点 (高坏2, 器台4, 埴5, 壺12, 甕26), 凝灰岩製砥石1点, 礫1点が, 主に覆土下層から出土している。これらの他に, 混入したとみられる縄文土器片7点が出土している。

所見 時期は, 平成8・12年度調査の出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第12図 第23号住居跡実測図



第13図 第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	器台	-	(5.6)	-	長石	赤褐	普通	脚部外面磨き, 赤彩, 内面ヘラ削り後ナデ。	下層	20% P L22
2	土師器	台付甕	-	-	[15.6]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	台部内・外面ハケ目。	下層	5%

番号	種別	計測値				石質	特徴	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q1	砥石	6	6.1	2.7	146.7	凝灰岩	4面使用, 線条痕あり, 両端折損後再生。	床面	P L31

第31号住居跡 (第14~16図)

位置 調査区の南東部, S27a5区。標高18mの台地平坦部に位置する。3m北側には, 住居跡形態が類似する第34号住居跡が位置し, 北西側で第32号住居跡と隣接している。

確認状況 台地平坦部に位置するため攪乱や削平はなく, 最も良好な遺存状況である。

規模と形状 長軸4.16m, 短軸4.04mの方形である。壁は高さ22~32cmで, 西壁は外傾して立ち上がり, 他は直立する。主軸方向はN-66°-Wである。

床 ほぼ平坦である。壁際20~40cmの範囲が軟弱で, 炉の周囲はよく踏み固められている。また部分的に焼土化している。壁に沿って壁溝がほぼ全周する。断面形はU字状を呈し, 上幅は8~20cm, 深さは床面から6~20cmである。

ピット 5か所。P1は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられ, 覆土は暗褐色土を主体とする。P2は炉に対する位置で確認されていることから, 出入口施設に伴うピットと考えられる。他の性格は不明である。深さはP1が56cm, P2が42cm, P3が14cm, P4が9cm, P5が8cmである。

炉 中央部北西寄りに設けられている。長径88cm, 短径54cmの楕円形で, 床面を10cm程度掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け, 赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土小ブロック少量, ローム粒子・炭化物微量

覆土 6層からなる。第3層は暗赤褐色を呈し, 焼土粒子や炭化材を多く含んでいるため, 人為堆積の可能性が高い。第1・2層は周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため, 自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック少量

2 黒褐色 炭化物少量, ローム粒子微量

3 暗褐色 焼土粒子多量, 炭化材中量, ローム粒子少量

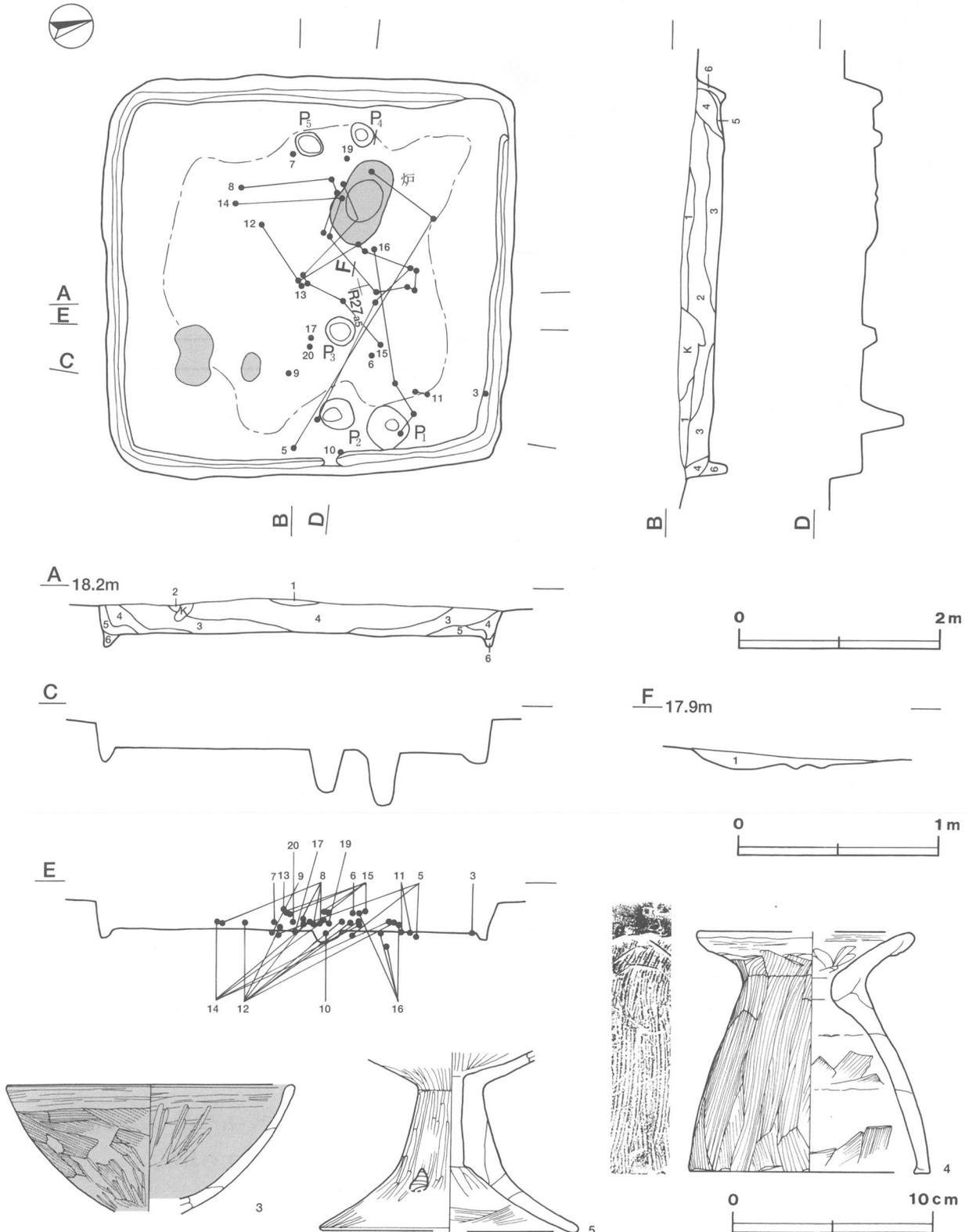
4 黒色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量

5 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量

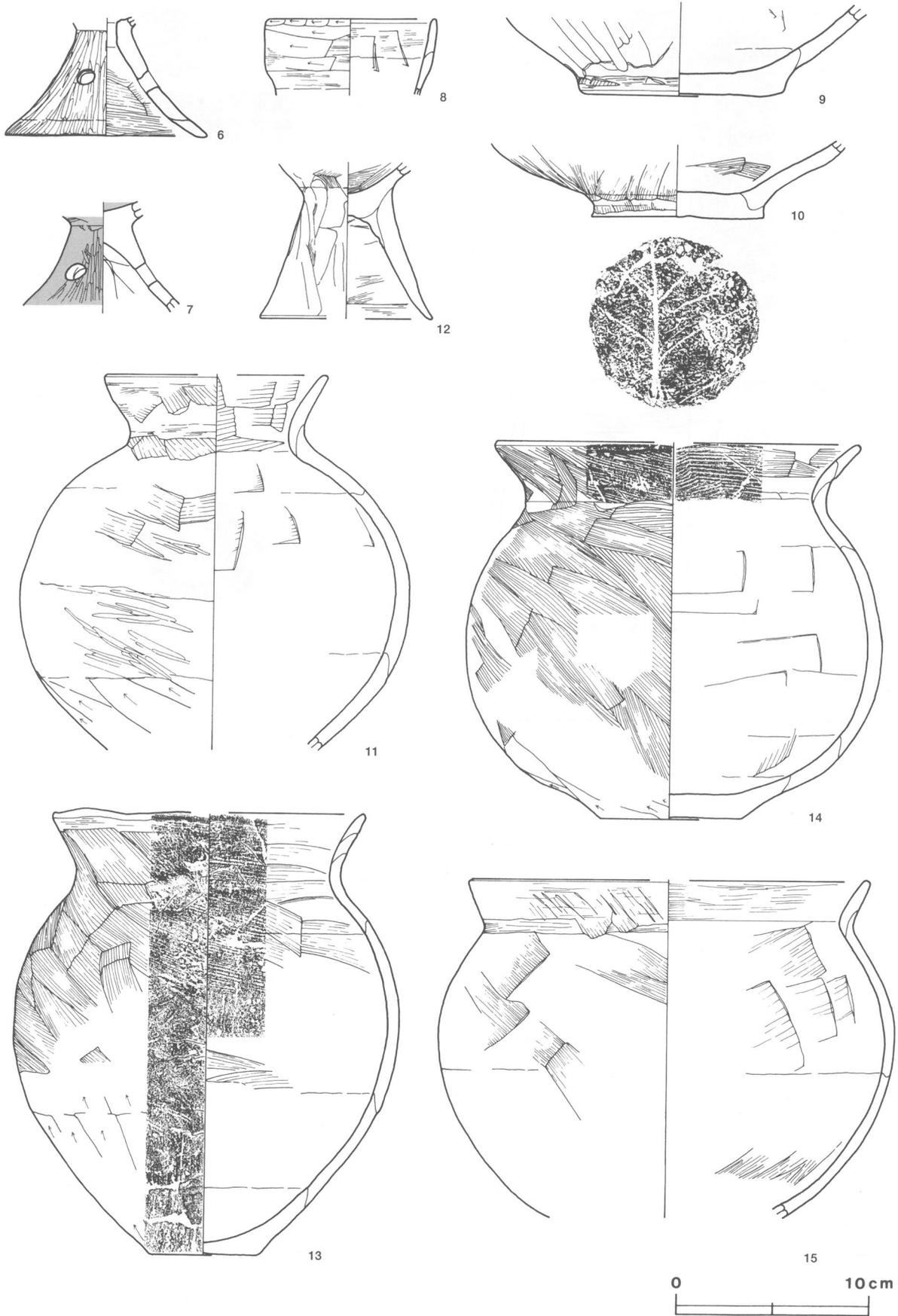
6 暗褐色 ローム中ブロック中量

遺物出土状況 土師器片317点（高坏24，器台6，埴5，壺12，甕269，甑1），礫13点が，主に覆土下層から中層にかけて廃棄されたような状態で出土している。平面的には，埋没過程の中央部付近の窪みに遺物が集中している。壁際の床面には，焼土や住居跡の内側に向かって倒れたような状態の炭化材が多く見られた。

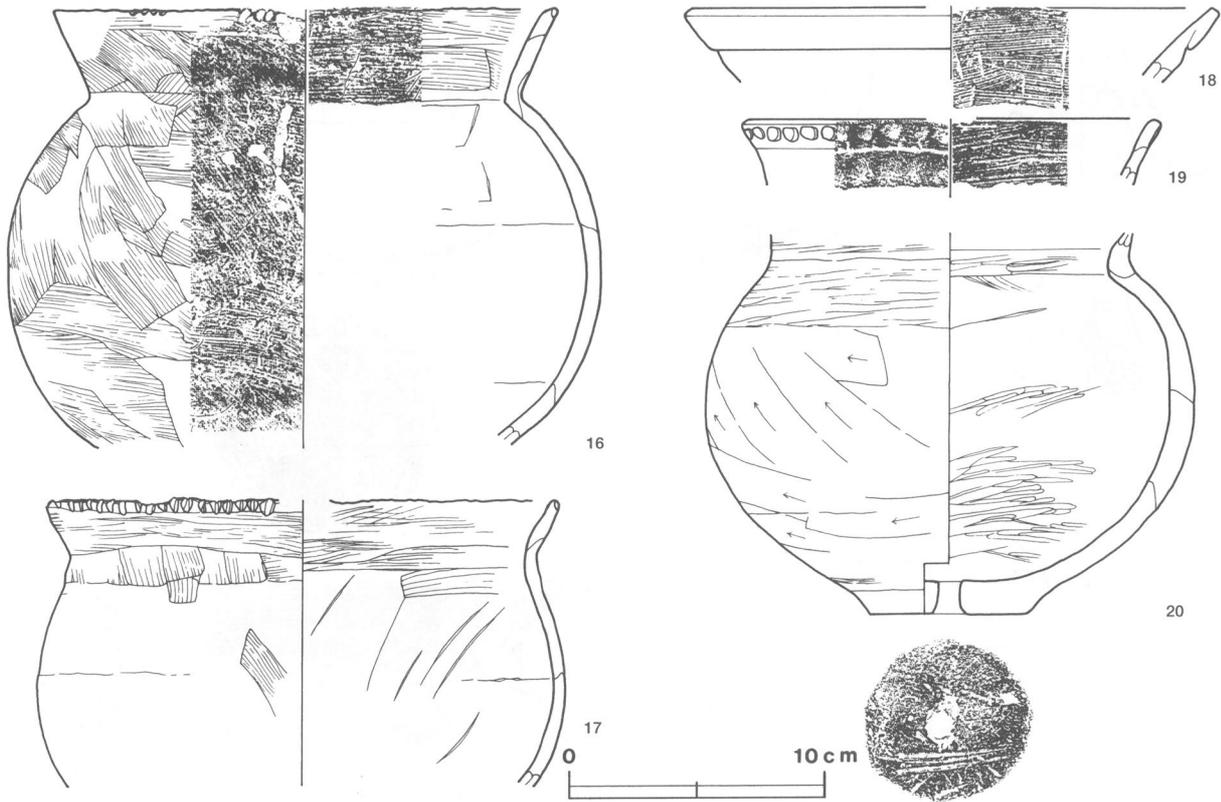
所見 覆土下層に焼土粒子や炭化材が多く含まれ，床面が部分的に焼土化しているため，焼失した可能性が考えられる。時期は，出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第14図 第31号住居跡・出土遺物実測図



第15图 第31号住居跡出土遺物実測図（1）



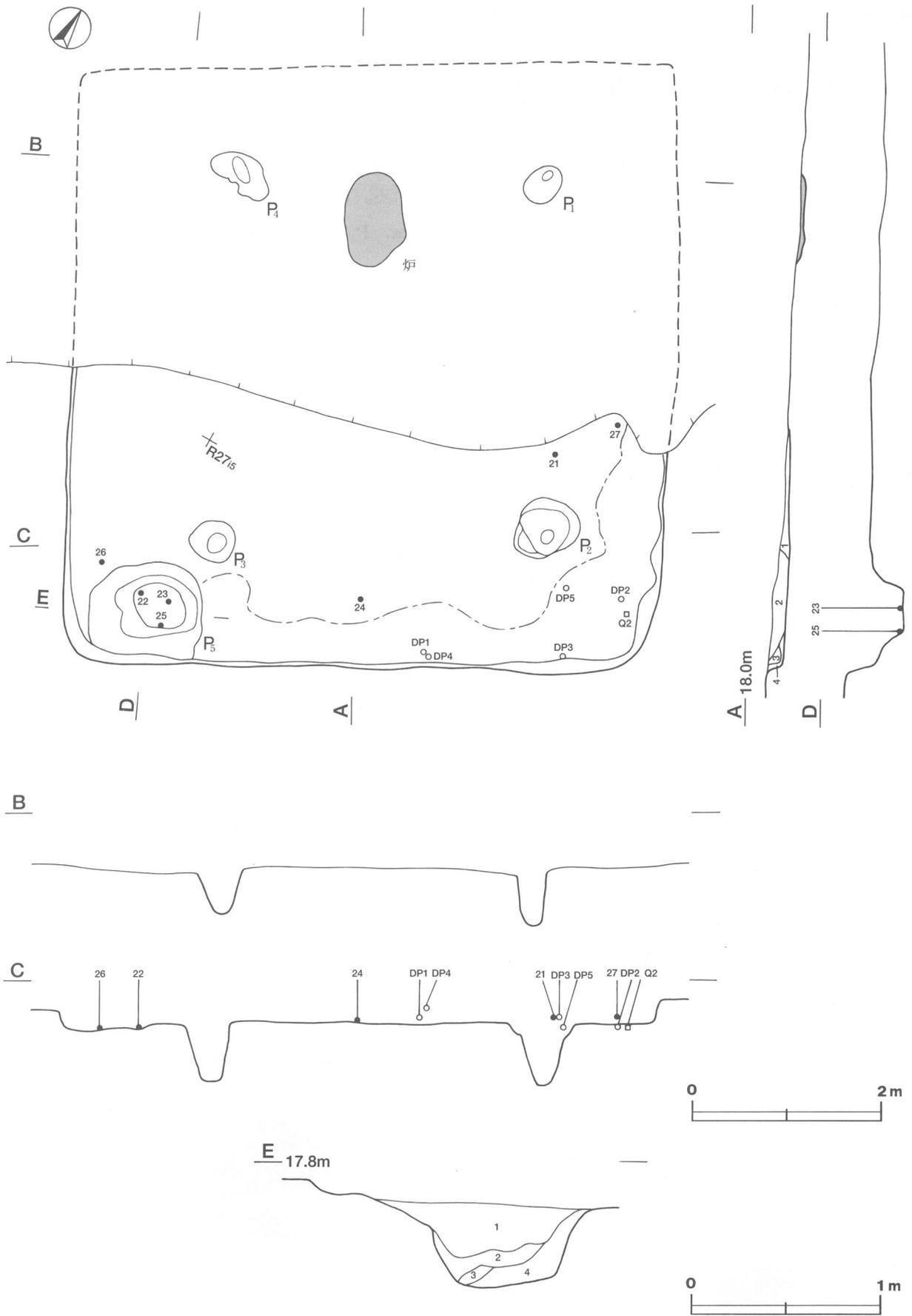
第16図 第31号住居跡出土遺物実測図（2）

第31号住居跡出土遺物観察表（第14～16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	土師器	高坏	14.4	(6.4)	-	長石	赤褐	普通	体部外面ハケ目、磨き、内面磨き、内外面赤彩。	床面	25%
4	土師器	粗製器台	10.9	12.2	12	石英・長石	橙	普通	器受部横ナデ、脚部内・外面ハケ目、横ナデ。	下層	80% P L22
5	土師器	器台	-	(9.1)	[13.4]	石英・長石	橙	普通	器受部、脚部外面磨き、内面ハケ目、ナデ。	床面	25% P L22
6	土師器	器台	-	(6.2)	10.6	石英・長石	にぶい橙	普通	脚部外面磨き、内面ハケ目。	下層	50% P L22
7	土師器	器台	-	(5.8)	-	石英・長石	赤橙	普通	脚部外面磨き、内面ヘラ削り、内・外面赤彩。	下層	25% P L22
8	土師器	罎	8.7	(4)	-	長石	浅黄橙	普通	体部ヘラ削り、横ナデ、口唇部ヘラ削り。	下層	10% P L22
9	土師器	壺	-	(4.9)	10.5	石英・長石	橙	普通	体部外面磨き、下端ハケ目、横ナデ。	床面	10%
10	土師器	壺	-	(4.1)	8.8	石英・長石	赤褐	普通	体部内・外面ハケ目、内面ナデ。	床面	10% P L27
11	土師器	壺	[10.8]	(19.7)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	口縁部ハケ目、横ナデ、体部外面ハケ目、磨き、ヘラ削り。	下層	70% P L24
12	土師器	台付甕	-	(8.2)	[9]	石英・長石	にぶい褐	普通	台部外面ハケ目、ヘラ削り、内面横ナデ。	床面	10% P L22
13	土師器	甕	[16.1]	23.1	5.5	石英・長石	浅黄橙	普通	体部内・外面ハケ目、ヘラ削り、口縁部横ナデ。	中層	30% P L25
14	土師器	甕	[18.8]	(19.7)	7.3	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部ハケ目、横ナデ、体部外面ハケ目、ヘラ削り、ナデ。	下層	75% P L25
15	土師器	甕	[20.4]	(17.7)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	口縁部ハケ目、横ナデ、体部ハケ目、ヘラ削り、ナデ。	中層	25%
16	土師器	甕	[19.8]	(17.2)	-	石英・長石	明赤褐	普通	口縁部ハケ目、端部横ナデ、刻み、体部ハケ目、ヘラ削り。	下層	25% P L25
17	土師器	甕	[19.7]	(11.3)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部ハケ目、横ナデ、端部刻み、体部ハケ目、ヘラナデ。	床面	25% P L24
18	土師器	甕	[20.4]	(2.9)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部外面ナデ、内面ハケ目、横ナデ。	下層	5%
19	土師器	甕	[15.8]	(2.6)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	口縁部外面ナデ、指頭圧痕、内面ハケ目、横ナデ。	下層	5%
20	土師器	甗	-	(15)	6.3	石英・長石	橙	普通	体部外面横ナデ、ヘラ削り、内面磨き。	下層	80% P L24

第32号住居跡（第17～19図）

位置 調査区の南東部、R27i5区。標高17.8mの台地縁辺部に位置する。3m北西側には、主軸方向が一致する第41号住居跡が位置し、南側で第31号住居跡、東側で第32号住居跡と隣接している。



第17图 第32号住居跡実測図

確認状況 掘り込みが浅いため、北側半分の床面及び壁はすでに削平されているが、支柱穴と思われるピット2か所と炉の一部を確認した。

規模と形状 推定長軸6.54m、短軸6.4mで方形である。壁は高さ16～20cmで、確認した範囲ではほぼ直立する。主軸方向はN-25°-Wで、第41号住居跡の主軸方向と一致している。

床 ほぼ平坦である。壁際35～50cmの範囲が軟弱で、他は踏み固められている。

ピット 5か所。P1～4は配置や規模から支柱穴と考えられる。P5は南西コーナー部という位置や規模から貯蔵穴と考えられ、覆土は4層からなる。深さはP1が56cm、P2が68cm、P3が65cm、P4が44cm、P5が46cmである。

P5土層解説

- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ローム中ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム中ブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム中ブロック少量、炭化物微量 |

炉 中央部北寄りに設けられている。上面は削平されている。確認した長径99cm、短径66cmの楕円形で、床面を掘りくぼめた地床炉と考えられる。

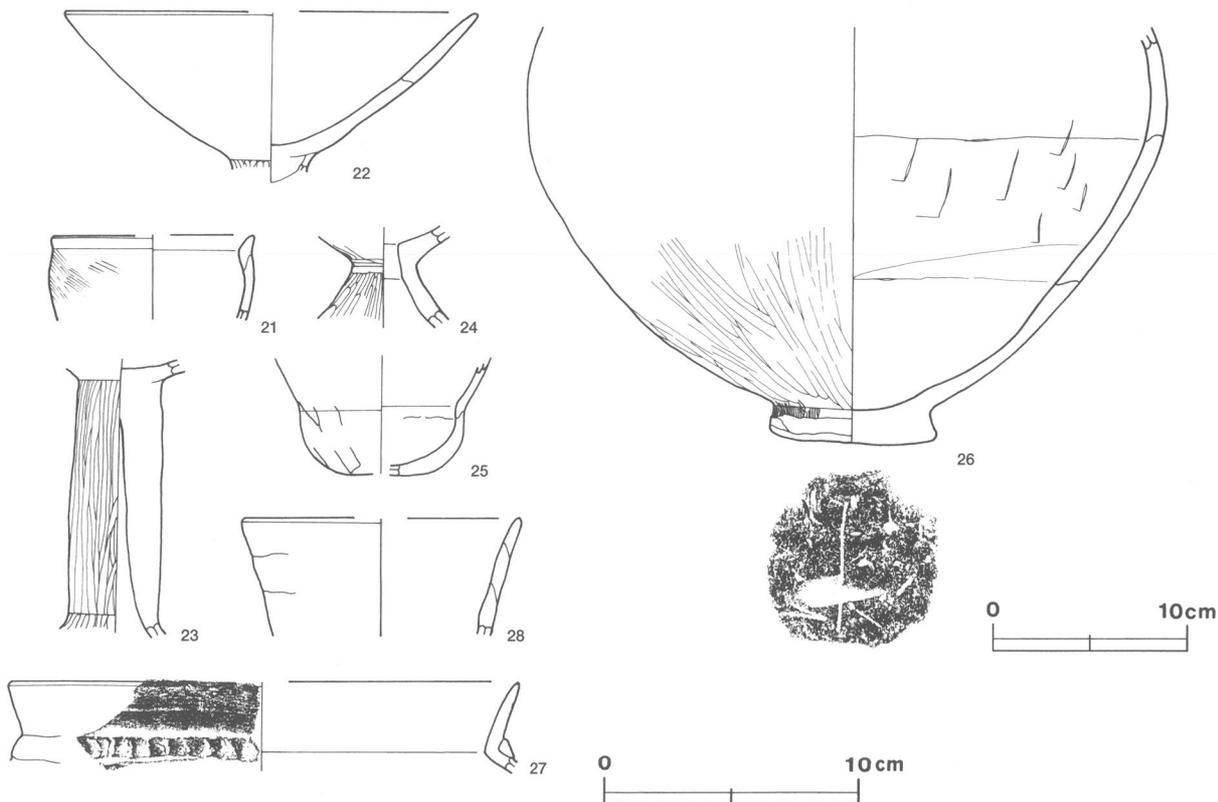
覆土 4層からなる。層厚が20cmと薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

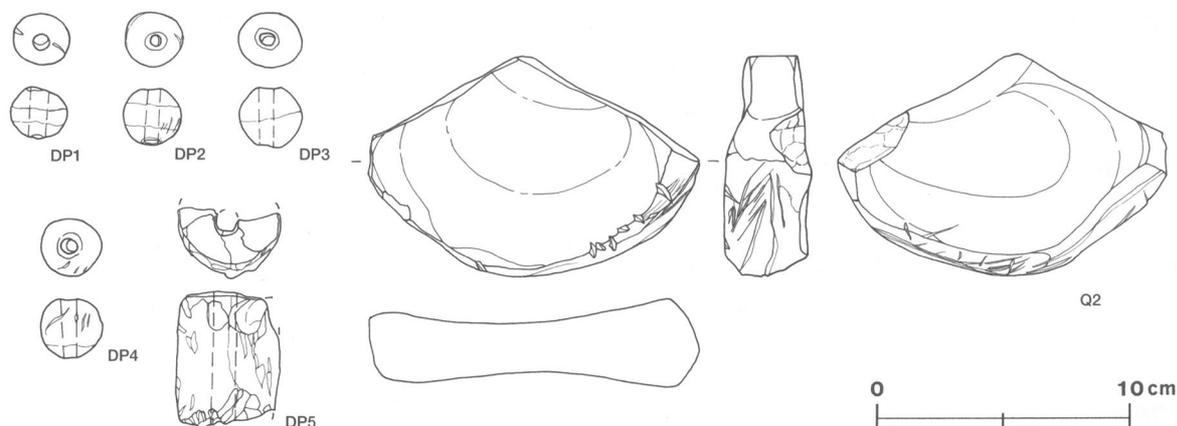
- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量 | 3 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師器片232点（碗1，高坏39，器台1，埴5，壺4，甕181，手捏土器1），球状土錘4点，管状土錘1点，凝灰岩製砥石1点，礫4点が、主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。これらの他に、混入したとみられる縄文土器片3点が出土している。平面的には、貯蔵穴と考えられるP5の周囲に遺物の集中が見られ、球状・管状土錘や砥石は、南東壁際東寄りの床面から覆土下層にかけて出土している。

所見 時期は、出土遺物などから4世紀後半と考えられる。また第41号住居跡と主軸方向及び形態が類似している。



第18図 第32号住居跡出土遺物実測図（1）



第19図 第32号住居跡出土遺物実測図(2)

第32号住居跡出土遺物観察表(第18・19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
21	土師器	椀	[7.8]	(3.3)	-	長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ハケ目, ナデ。	下層	5%
22	土師器	高坏	[16.2]	(6.6)	-	石英・白色粒子	明赤褐	普通	坏部内・外面磨き, 赤彩。	P5上層	30% P L22
23	土師器	高坏	-	(11)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	脚部外面磨き。	P5底面	30% P L27
24	土師器	器台	-	(3.9)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	器受部, 脚部外面磨き。	床面	10%
25	土師器	埴	-	(4.6)	(3.3)	石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り, ナデ。	P5底面	30%
26	土師器	壺	-	(22)	8.9	石英・長石	にぶい橙	普通	体部内・外面ヘラナデ, ヘラ削り, 底部粗痕。	床面	50% P L24
27	土師器	甕	[20]	(3.6)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部ハケ目, ナデ, 頸部刻みをもつ粘土紐貼付。	下層	5%
28	土師器	手捏土器	[10]	(4.6)	-	石英・長石	明褐	普通	輪積み痕, ナデ。	下層	5%

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
DP1	球状土錘	2.2	2	0.7	7.6	球体, 外面ナデ。	下層	P L30
DP2	球状土錘	2.3	2.2	0.5	10.3	球体, 外面ナデ。	床面	P L30
DP3	球状土錘	2.5	2.3	0.6	12.4	球体, 外面ナデ。	下層	P L30
DP4	球状土錘	2.4	2.3	0.6	11.9	球体, 外面ナデ。	下層	P L30
DP5	管状土錘	4.1	5.3	0.9	48	円柱状, 外面ナデ, 指頭痕。	床面	P L30

番号	種別	計測値				石質	特徴	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q2	砥石	12.9	8.8	3.4	381	凝灰岩	4面使用, 線条痕, 断面V字状の切込多数あり。	床面	P L31

第34号住居跡(第20・21図)

位置 調査区の南東部, R27i6区。標高17.8mの台地縁辺部に位置する。3m南側には, 住居跡形態が類似する第31号住居跡が位置し, 南西側で第32号住居跡と隣接している。

確認状況 攪乱や削平もなく, 良好な遺存状況である。

規模と形状 長軸4.82m, 短軸3.68mの長方形である。壁は高さ22~46cmで外傾して立ち上がる。主軸方向はN-60°-Wである。

床 ほぼ平坦である。壁際6~70cmの範囲が軟弱で, 炉の周囲はよく踏み固められている。

ピット 7か所。P1は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられ, 覆土は暗褐色土を主体とする。P2は炉に対する位置で確認されていることから, 出入口施設に伴うピットと考えられる。他の性格は不明である。深

さはP 1 が40cm, P 2 が106cm, P 3 が7 cm, P 4 が30cm, P 5 が8 cm, P 6 は10cm, P 7 は6 cmである。

炉 中央部北西寄りに設けられている。東側でP 7 と接している。長径57cm, 短径36cmの楕円形で、床面を8 cm程度掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け、赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック中量, ローム粒子・炭化物微量

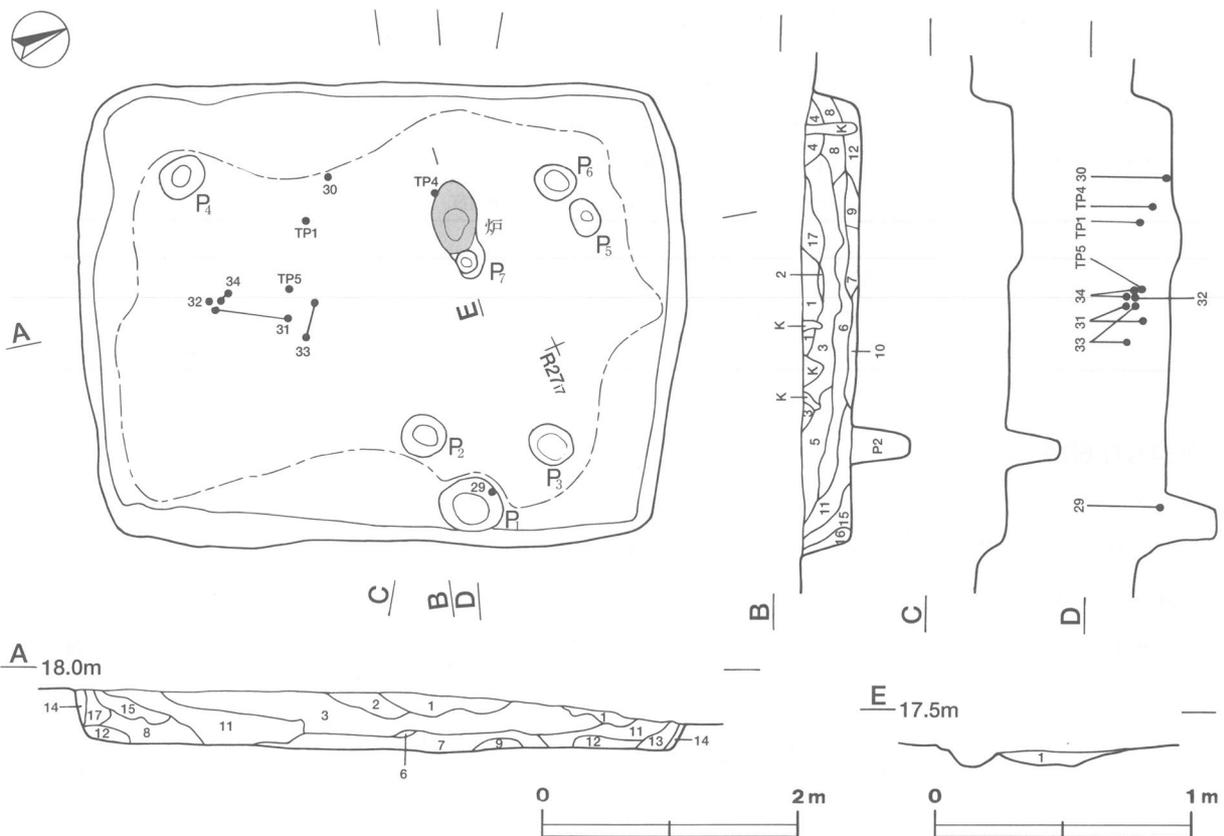
覆土 17層からなる。覆土下層の第7・9・10・12層は、焼土粒子や炭化材を多く含んでいるため、人為堆積の可能性が考えられる。覆土中層から上層は、周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

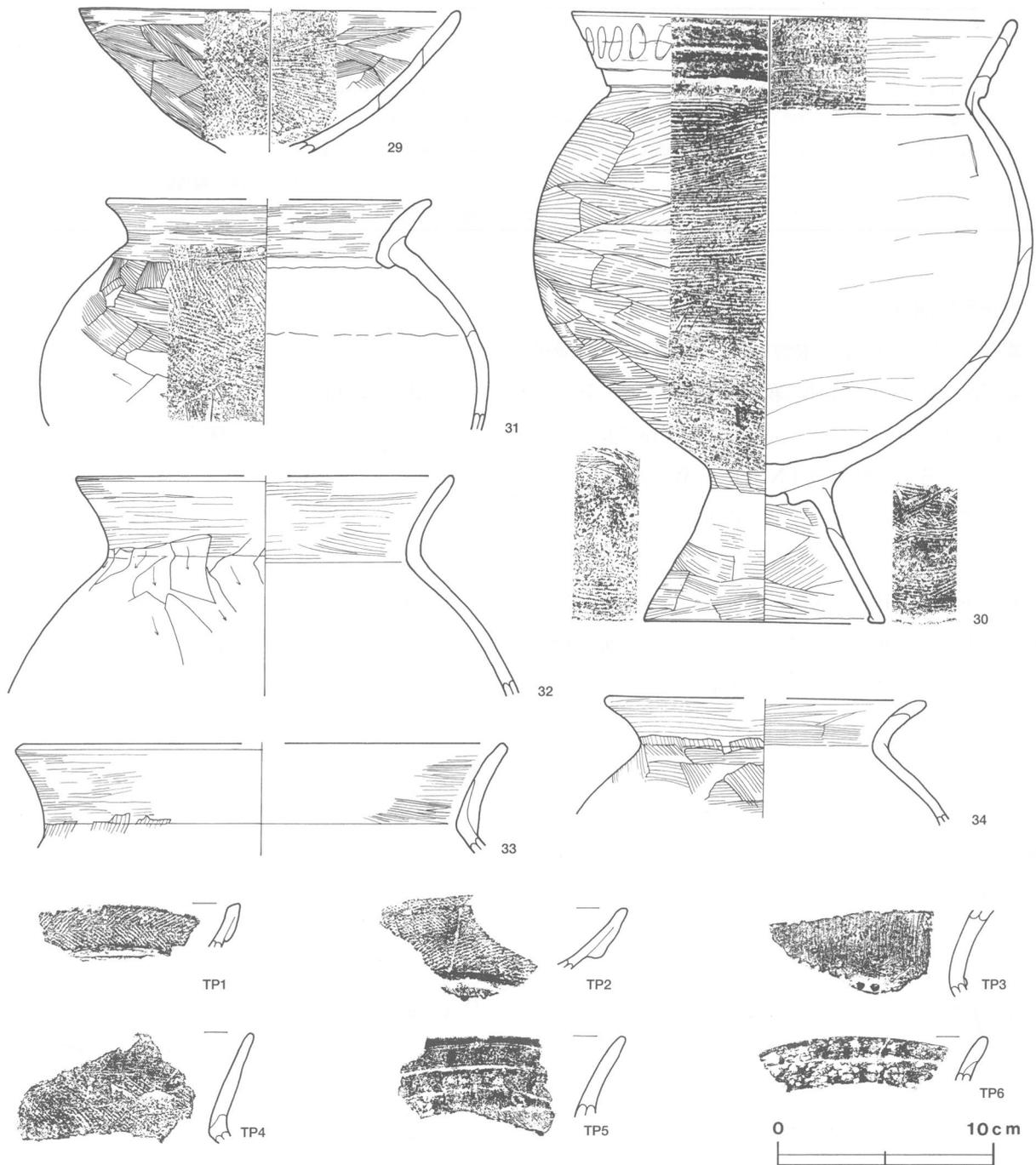
- | | | | |
|--------|----------------------------|---------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム中ブロック少量 | 10 極暗褐色 | 焼土粒子多量, ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子少量 | 11 黒褐色 | ローム中ブロック中量, 焼土粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム大ブロック少量 | 12 黒色 | 炭化物多量, 焼土粒子中量, ローム粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 13 極暗褐色 | ローム大ブロック中量 |
| 5 黒褐色 | ローム中ブロック中量, 焼土粒子少量 | 14 褐色 | ローム粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子多量, 炭化粒子少量 | 15 暗褐色 | ローム小ブロック中量, 焼土粒子少量 |
| 7 黒褐色 | ローム大ブロック多量, 焼土大ブロック・炭化粒子少量 | 16 暗褐色 | ローム大ブロック少量 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 17 暗褐色 | ローム粒子多量, 炭化粒子少量 |
| 9 暗赤褐色 | 焼土大ブロック多量, ローム中ブロック・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片603点（碗15, 高坏15, 器台5, 壺33, 甕535), 礫10点が、主に覆土下層から中層にかけて廃棄されたような状態で出土している。平面的には、埋没過程の中央部付近の窪みに遺物が集中し、第21図30はほぼ完形の台付甕で、床面直上から斜位の状態で出土している。また西側の床面を中心に、焼土ブロックや住居跡の内側に向かって倒れたような状態の炭化材が多く見られた。

所見 覆土下層に焼土粒子や炭化材が多く含まれ、床面にも焼土ブロックや炭化材が見られるため、焼失した可能性が考えられる。時期は、出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第20図 第34号住居跡実測図



第21図 第34号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
29	土師器	高坏	[17.7]	(6.6)	-	長石	明赤褐	普通	坏部ハケ目、口縁端部、坏部外面下端横ナデ。	P1上層	50% PL22
30	土師器	台付甕	20.7	28.3	11.2	石英・長石	にぶい橙	普通	外面ハケ目、内面ヘラ削り、口縁部外面横ナデ、指頭痕。	床面	90% PL25
31	土師器	甕	[15.2]	(10.6)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	体部外面ハケ目、ヘラ削り、口縁部横ナデ。	中層	15% PL25
32	土師器	甕	[17.7]	(10.2)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。	中層	10%
33	土師器	甕	[22.4]	(5.1)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目、口縁部横ナデ。	中層	5%
34	土師器	甕	[15]	(5.7)	-	石英・長石	橙	普通	体部外面ハケ目、口縁部横ナデ。	中層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP1	土師器	壺	-	(2.1)	-	長石	暗赤褐	普通	口縁外面にLR・RL単節縄文を羽状に施す。	中層	5%
TP2	土師器	壺	-	(2.9)	-	長石	浅黄橙	普通	口縁外面に網目状撚り糸文を施す。	中層	5%
TP3	土師器	壺	-	(3.7)	-	石英・長石	暗赤褐	普通	頸部外面磨き，円形貼付文。	中層	5%
TP4	土師器	甕	-	(4.8)	-	石英・雲母	赤黒	普通	口縁部ハケ目，横ナデ。	中層	5%
TP5	土師器	甕	-	(3.7)	-	石英	橙	普通	口縁部ハケ目，横ナデ，指頭痕，輪積痕。	中層	5%
TP6	土師器	甕	-	(2)	-	長石	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ，輪積痕，2次焼成。	中層	5%

第36号住居跡（第22図）

位置 調査区の中央部，R27h2区。標高17mの台地縁辺部に位置する。

重複関係 縄文時代前期の第33号住居跡を掘り込んでいる。北側半分は斜面部で削平されている。

規模と形状 長軸3.25m，推定短軸2.95mで長方形と推定される。壁は高さ6cmで，確認した範囲では外傾して立ち上がる。主軸方向はN-6°-Wである。

床 確認した範囲は，ほぼ平坦である。

ピット 5か所。いずれも性格は不明であるが，P5は規模及び形状から貯蔵穴の可能性も考えられる。深さはP1が22cm，P2が36cm，P3が35cm，P4が19cm，P5が12cmである。

炉 中央部やや北寄りに設けられている。上面は削平されている。長径50cm，短径36cmの楕円形で，確認した炉床までの深さは5cmである。床面を掘りくぼめた地床炉で，炉床は火熱を受け，赤変硬化している。覆土は2層からなる。

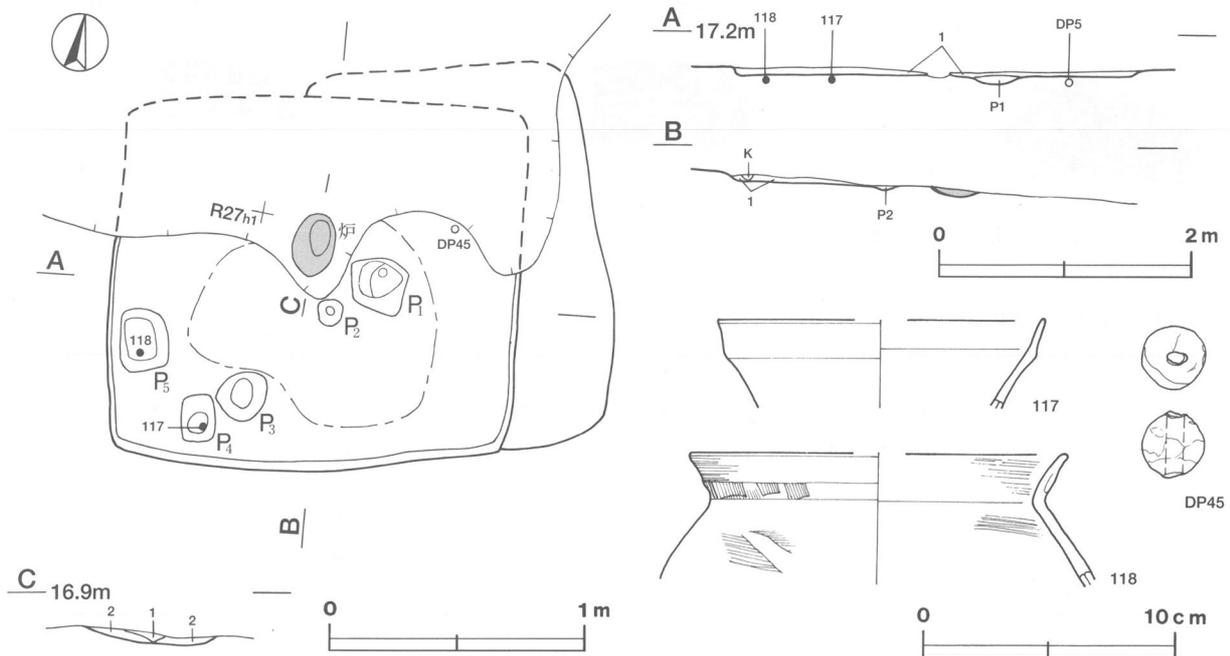
炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土中ブロック中量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化物微量

覆土 単一層である。重複や削平により覆土の詳細は不明である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量



第22図 第36号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片49点（高坏2，壺1，甕46），球状土錘1点が，主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。これらの他に，混入したとみられる縄文土器片5点が出土している。

所見 時期は，出土遺物などから4世紀後半と考えられる。

第36号住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
117	土師器	壺	[12.8]	(3.5)	-	石英・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部外面赤彩，内面ナデ。	P4上層	5%
118	土師器	甕	[14.8]	5.2	-	石英・長石	にぶい赤褐	普通	体部外面ハケ目，ヘラ削り，口縁部ハケ目，ナデ。	P5上層	5%

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
DP45	球状土錘	2.4	2.6	0.6	13.6	球体，外面ナデ。	下層	P L30

第37号住居跡（第23・24図）

位置 調査区の北東部，R27b5区。斜面部から緩斜面部に至る傾斜変換点の標高14.6mに位置する。東側からは埋没谷が入り込んでいる。

確認状況 北側半分が調査区域外に位置していたため，調査区の拡張を行って全体像の把握に努めた。攪乱や削平も少なく，比較的良好な遺存状況である。東側から埋没谷が延びているため，遺構の東側は埋没谷の黒褐色土を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.5m，短軸4.4mの長方形である。壁は高さ42～105cmで外傾して立ち上がる。主軸方向はN-47°-Wである。

床 ほぼ平坦であるが，北側に向かって緩やかに傾斜している。中央部と貯蔵穴と考えられるP1の北西側はよく踏み固められている。

ピット 2か所。P1は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。覆土中層は焼土ブロックを多く含んでいる。P2は炉の北西側を掘り込んでいることから，本跡に伴うものか，性格と共に不明である。深さはP1が46cm，P2が35cmである。

P1土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム中ブロック中量，焼土粒子・炭化物微量 | 3 暗赤褐色 | ローム小ブロック・焼土中ブロック中量，炭化物少量 |
| 2 極暗褐色 | ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化物少量 | 4 黒褐色 | ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |

炉 中央部北寄りに設けられている。長径140cm，短径80cmの不整長楕円形を呈し，炉床は火熱を受け，赤変硬化している。床面を10cm程度掘りくぼめた地床炉である。北西側をP2に掘り込まれている。覆土は4層からなる。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|------------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土粒子・炭化物中量 | 3 暗赤褐色 | 焼土中ブロック中量，炭化物少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土小ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子微量 | 4 暗赤褐色 | ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量 |

覆土 12層からなる。全体的には周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。

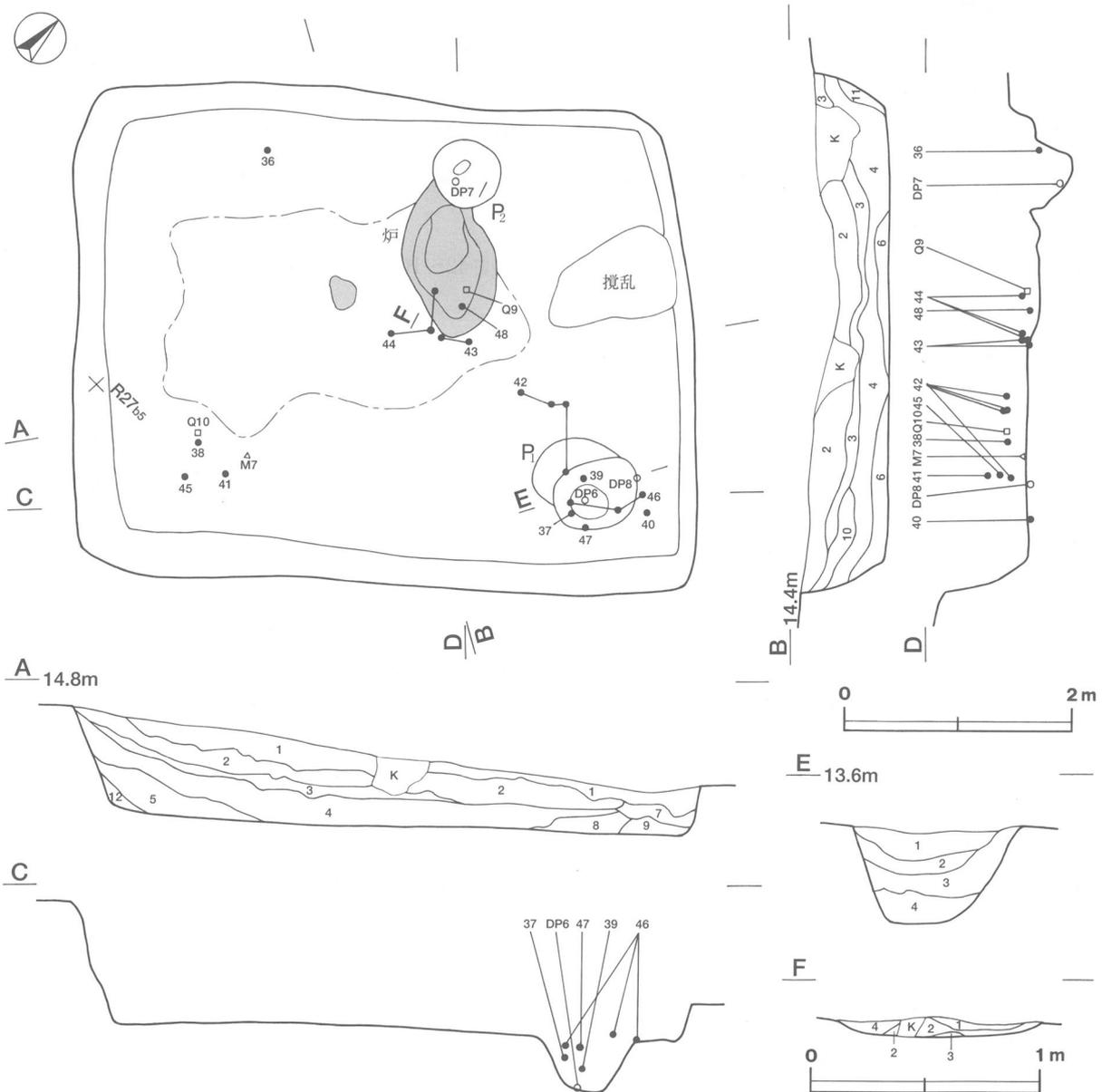
土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|---------|------------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子少量 | 7 暗褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 2 黒色 | 黒色土粒子少量 | 8 暗褐色 | ローム中ブロック少量，炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | ローム小ブロック少量，焼土小ブロック微量 | 10 褐色 | ローム中ブロック中量 |
| 5 暗褐色 | ローム小ブロック中量 | 11 褐色 | ローム粒子多量 |
| 6 暗褐色 | ローム中ブロック少量，焼土小ブロック微量 | 12 暗赤褐色 | 焼土中ブロック少量，炭化粒子少量 |

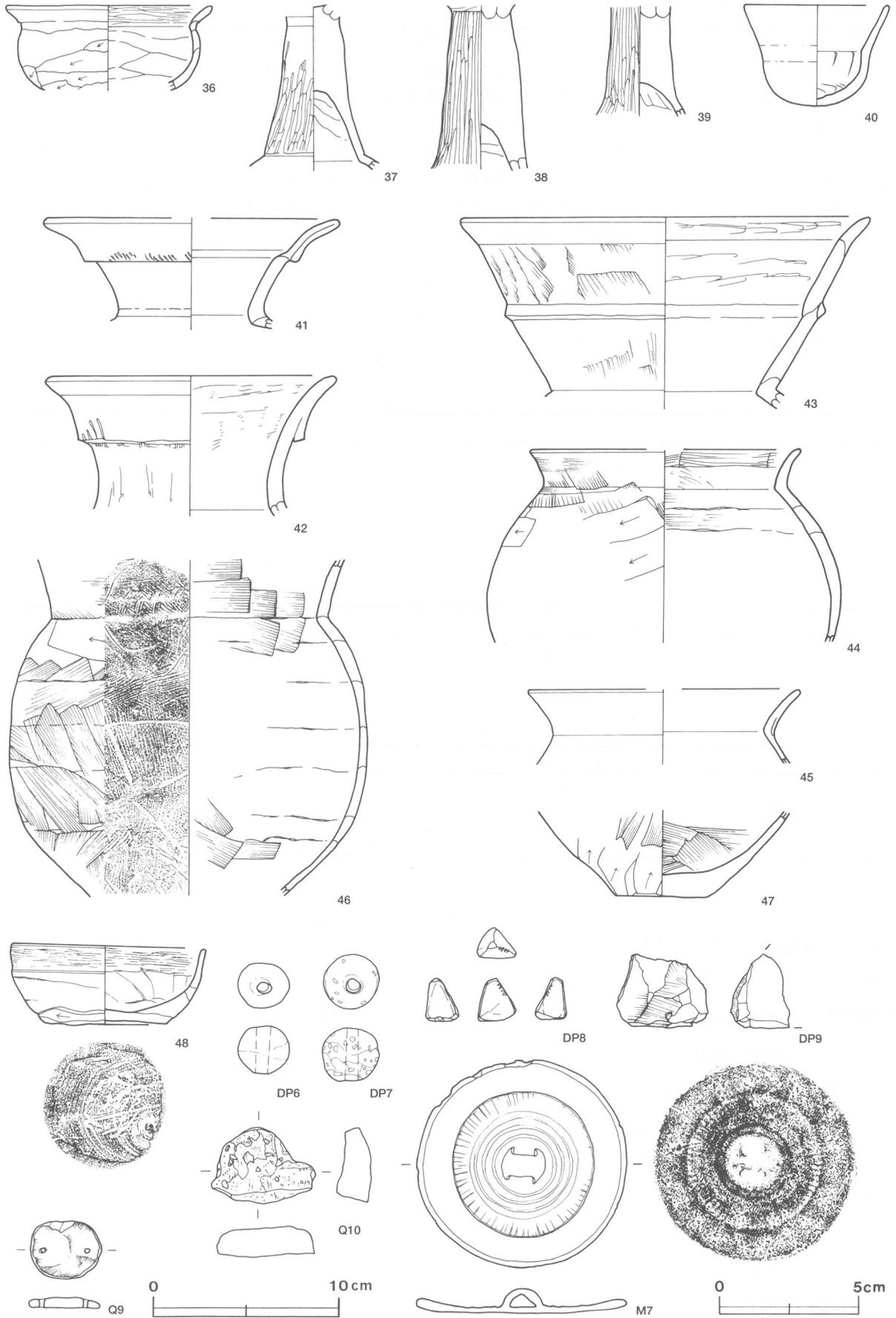
遺物出土状況 土師器片384点（椀1，高坏25，埴1，壺78，甕278，坏1），銅鏡1点，球状土錘2点，不明

土製品 3 点, 滑石製双孔円板 1 点, 軽石製品 1 点, 礫 10 点が, 主に覆土下層から中層にかけて廃棄されたような状態で出土している。特に, 炉の上面や周囲, 貯蔵穴と考えられる P 1 の周辺に, 大形の土師器片や完形品などが集中している。第 24 図 M 7 の銅鏡は, 炉の南約 2.1m, 床面の 8 cm 上位から, 鏡面を下にして廃棄されたような状態で出土している。40 の埴形土器は, 貯蔵穴と考えられ P 1 の北側のほぼ床面から, 48 の坏と Q 9 の滑石製双孔円板は, 炉の覆土上面から出土している。37・39 の高坏形土器の脚部は, 貯蔵穴と考えられる P 1 の覆土中層から, 43 の壺形土器の口縁部は, 炉の南東側のほぼ床面から 10 片に割れた状態で, 42 の壺形土器の口縁部から頸部は, 覆土中層の第 4 層上面から 4 片に割れた状態で出土している。36 の椀形土器の口縁部から体部は, 床面直上からの出土である。これらの他に, 混入したとみられる縄文土器片 9 点が出土している。

所見 時期は, 出土遺物などから 4 世紀末と考えられる。しかし, 覆土中の遺物には少数ながら古墳時代中期初頭に位置づけられる土師器も含まれている。坏と滑石製双孔円板は炉の覆土上面から出土しており, 埋没過程の中央部付近の窪みに廃棄されたものと考えられる。銅鏡は埋納や遺棄を思わせるような出土状況ではなく, 無造作に廃棄されたような状態である。なお銅鏡は仿製鏡の重圏文鏡である。



第 23 図 第 37 号住居跡実測図



第24图 第37号住居跡出土遺物実測図

第37号住居跡出土遺物観察表 (第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
36	土師器	椀	10.9	(4.5)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ナデ、ヘラ削り、口縁部内面ハケ目。	P2上層	25% PL22
37	土師器	高坏	-	-	-	石英・長石	明赤褐	普通	脚部外面磨き、赤彩、内面ナデ。	P1中層	30% PL27
38	土師器	高坏	-	-	-	石英・長石	赤褐	普通	脚部外面磨き、赤彩、内面ナデ。	下層	30% PL27
39	土師器	高坏	-	-	-	石英・長石	赤褐	普通	脚部外面磨き、赤彩、内面ナデ。	P1中層	20% PL27
40	土師器	埴	7.8	5.4	-	石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	外面、口縁部内面ナデ、体部内面ヘラ削り。	床面	10% PL23
41	土師器	壺	[15.4]	(5.9)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	内外面ナデ、口縁部外面ハケ目、ナデ。	下層	10% PL24
42	土師器	壺	[15.5]	(7.5)	-	石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部横ナデ、外面ハケ目、内面磨き、ナデ。	下層	15% PL24
43	土師器	壺	22	(10.2)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	体部ハケ目、内面ナデ。	下層	10% PL24
44	土師器	甕	[14.2]	(10.3)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目、ヘラ削り、口縁部ハケ目、横ナデ。	下層	25% PL25
45	土師器	甕	[14.4]	(4)	-	石英・長石	橙	普通	内外面ナデ。	下層	5%
46	土師器	甕	-	(18)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁～体部ハケ目、横ナデ、体部外面上半ヘラ削り。	P1上層	60% PL25
47	土師器	甕	-	(4.6)	5	長石	橙	普通	体部外面ハケ目、ヘラ削り、内面ハケ目。	P1上層	75%
48	土師器	坏	10.2	4.4	11.4	石英・長石	橙	普通	粘土紐痕、口縁部横ナデ、内面ヘラナデ、底部外縁ヘラ削り。	下層	90% PL23

番号	種別	計測値						特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (g)	孔径 (g)	重量 (g)			
DP6	球状土錘	2.7	2.6	-	-	0.7	15.5	球体、外面ナデ。	床面	PL30
DP7	球状土錘	3	2.9	-	-	0.8	23.6	球体、外面ナデ、2次焼成。	床面	PL30
DP8	土製品	-	2.3	2	1.7	-	4.5	用途不明、三角錐状、外面ナデ。	床面	PL29
DP9	土製品	-	2.3	2	1.7	-	41.9	用途不明、外面ハケ目調整、土製支脚か。	下層	PL29

番号	種別	計測値				石質	特徴	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
Q9	双孔円板	3.8	3.1	0.6	10.3	滑石	石製模造品、双孔、両面に擦痕あり。	床面	PL31
Q10	軽石製品	4.1	3.5	1.8	8.1	軽石	用途不明、砥石・磨石の可能性あり。	床面	

番号	種別	計測値					特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	鉦径 (cm)	鉦高 (cm)			
M7	銅鏡	7.5	0.9	63.4	1.6	0.7	鏡式名「重圈文鏡」、歯齒文帯、4円圈、やや不鮮明。	下層	PL32

第38号住居跡 (第25・26図)

位置 調査区の北部、R27c2区。標高15.5mの斜面部に位置する。

重複関係 古墳時代前期の第40・54号住居跡を掘り込んでいる。北側は斜面部で削平されている。また立木の根によって3か所が攪乱されている。

規模と形状 長軸3.2m、推定短軸2.9mで長方形と推定される。壁は高さ20～40cmで、確認した範囲では外傾して立ち上がる。主軸方向はN-62°-Wである。

床 ほぼ平坦であるが、西側に向かって緩やかに傾斜している。高低差は最大で5cmである。壁際8～54cmの範囲は軟弱で、炉の周囲はよく踏み固められている。

炉 2か所。炉1は中央部北西寄り、炉2は南壁の北側寄りに設けられている。炉1の大半は攪乱され、規模及び形状など不明であるが、床面を掘りくぼめた地床炉と考えられる。確認した炉床は火熱を受け、赤変硬化している。炉2は長径66cm、短径46cmの楕円形で、床面を11cm程度掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け、赤変硬化している。覆土は単一層である。なお炉2は南壁に接しているため、本跡が掘り込んでいる第

54号住居跡に伴う炉の可能性も考えられる。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土大ブロック中量

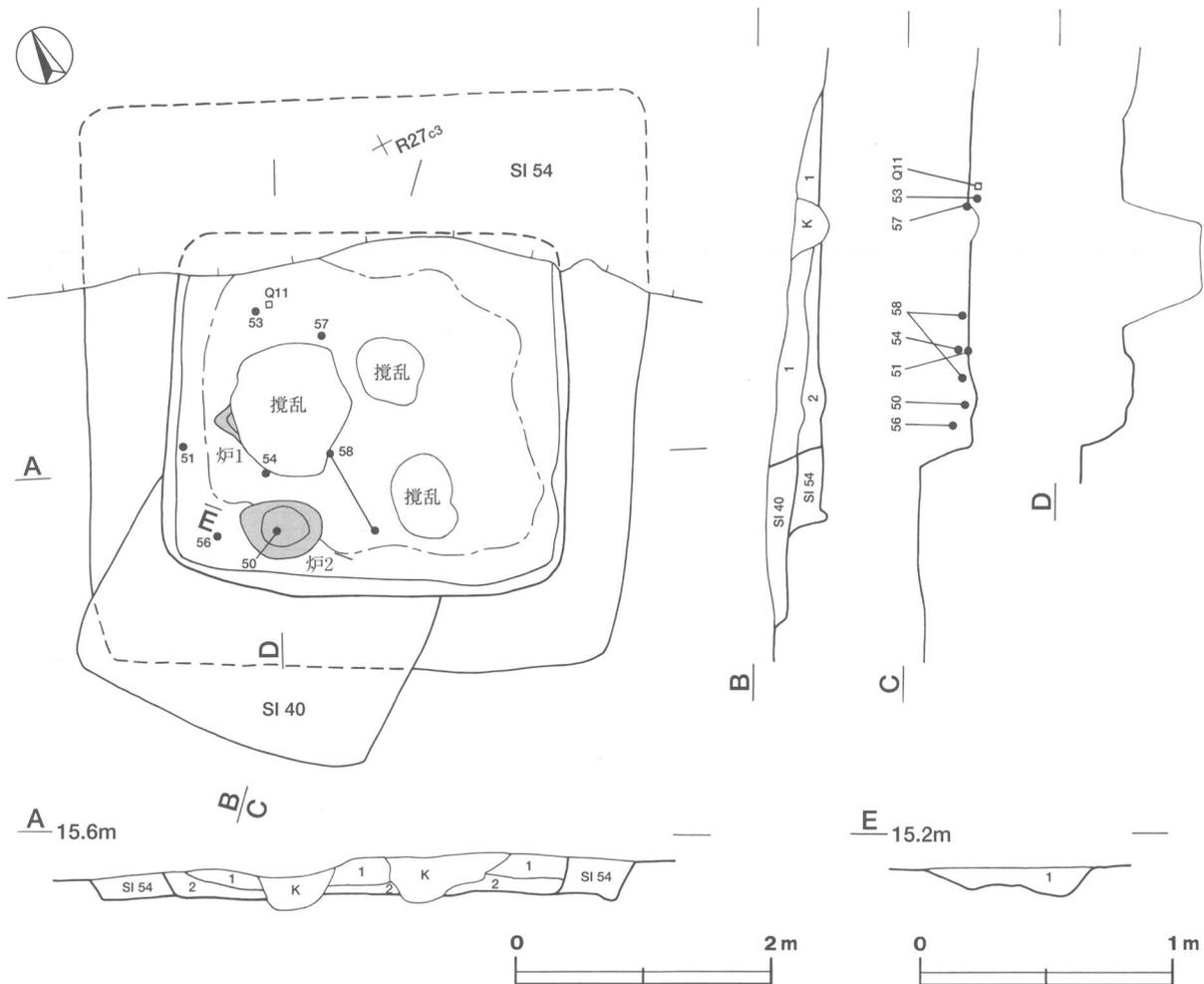
覆土 2層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

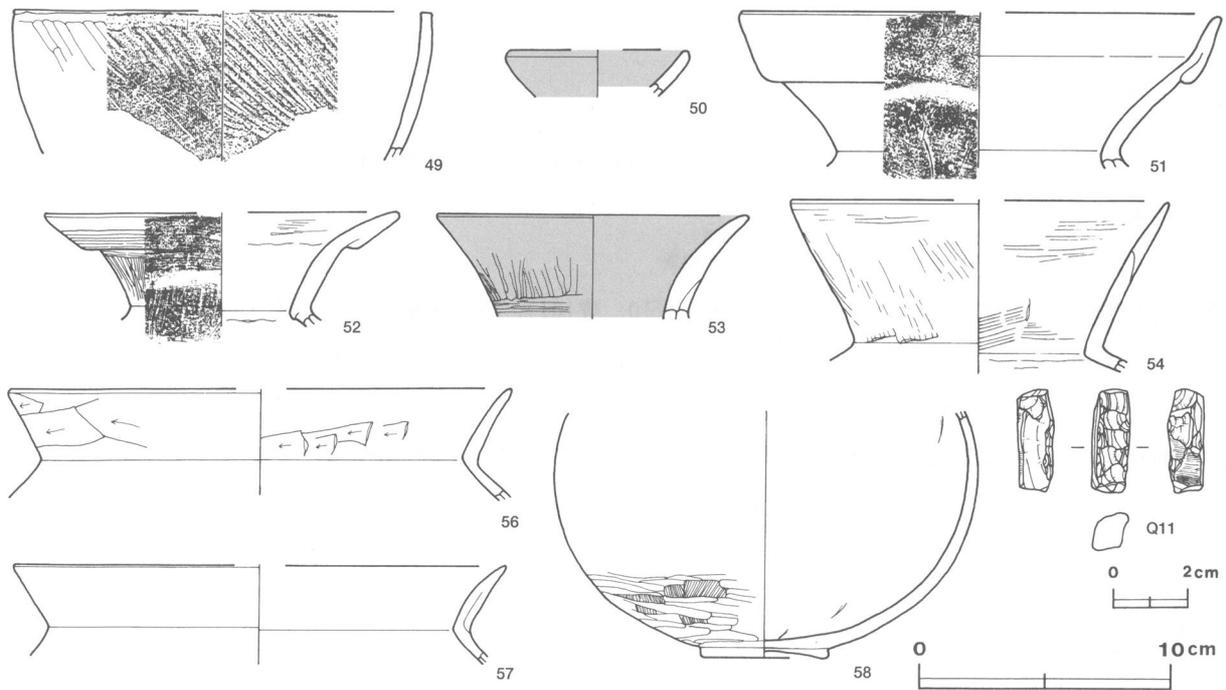
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片224点（器台23，埴30，壺10，甕161），管玉未製品1点，礫5点が，主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。これらの他に，混入したとみられる縄文土器片18点が出土している。

所見 中央部北西寄りに位置する炉1が，その位置から主炉と考えられる。炉2は南壁に接しているため，本跡が掘り込んである第54号住居跡に伴う炉の可能性も考えられるが，炉上面に踏み固めたような痕跡は認められなかった。時期は，出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第25図 第38号住居跡実測図



第26図 第38号住居跡出土遺物実測図

第38号住居跡出土遺物観察表 (第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
49	土師器	鉢	[16.4]	(5.9)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラナデ, 内面ハケ目。	床面	5%
50	土師器	器台	[7]	(1.9)	-	石英・赤色粒子	暗赤褐	普通	内・外面赤彩。	下層	5%
51	土師器	壺	[19]	(6.1)	-	石英・雲母	にぶい黄橙	普通	折り返し口縁部ナデ。	床面	5% P L27
52	土師器	壺	[14]	(4.5)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	折り返し口縁部横ナデ, 内面, 頸部外面ハケ目, ナデ。	下層	5%
53	土師器	壺	12.2	(4.1)	-	石英・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部外面磨き, 下端横ナデ, 内外面赤彩。	下層	15% P L24
54	土師器	壺	[15]	(6.7)	-	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面ハケ目, 横ナデ。	下層	10% P L24
56	土師器	甕	[19.6]	(4.2)	-	石英・雲母	黄橙	普通	口縁部内・外面ヘラ削り, ナデ。	床面	5%
57	土師器	甕	[19.4]	(3.9)	-	石英・赤色粒子	黒褐	普通	内・外面ナデ。	床面	5%
58	土師器	甕	-	(9.8)	4.8	長石	にぶい黄橙	普通	体部外面下半ハケ目, 磨き。	下層	15% P L25

番号	種別	計測値				石質	特徴	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q11	管玉	2.7	1	1	3.7	緑色凝灰岩	未製品, 2側面に捺痕, 分割面・剥離調整面からなる。	床面	P L31

第39号住居跡 (第27・28図)

位置 調査区の中央部, R27c1区。標高15.6mの斜面部に位置する。

確認状況 北側は斜面部で削平されているため, 掘り込みが浅い。

規模と形状 長軸4.14m, 短軸3.86mの方形である。壁は高さ4~46cmで外傾して立ち上がる。主軸方向はN-36°-Wである。

床 ほぼ平坦である。壁際6~66cmの範囲が軟弱で, 炉の周囲はよく踏み固められている。南東壁及び南西壁南側に沿って壁溝が巡っている。断面形はU字状を呈し, 上幅は10~16cm, 深さは底面から6cmである。

ピット 3か所。P1は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。覆土は暗褐色土を主体とする。P2・3は性格不明である。深さはP1が28cm, P2が23cm, P3が59cmである。

炉 3か所。炉1は中央部西寄り、炉2は東コーナー部付近、炉3は南東壁中央部付近に設けられている。いずれも楕円形を呈し、炉1は長径50cm、短径30cm、炉2は長径44cm、短径39cm、炉3は長径48cm、短径28cm、床面を7~12cm程度掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け、赤変硬化している。覆土は2層からなる。

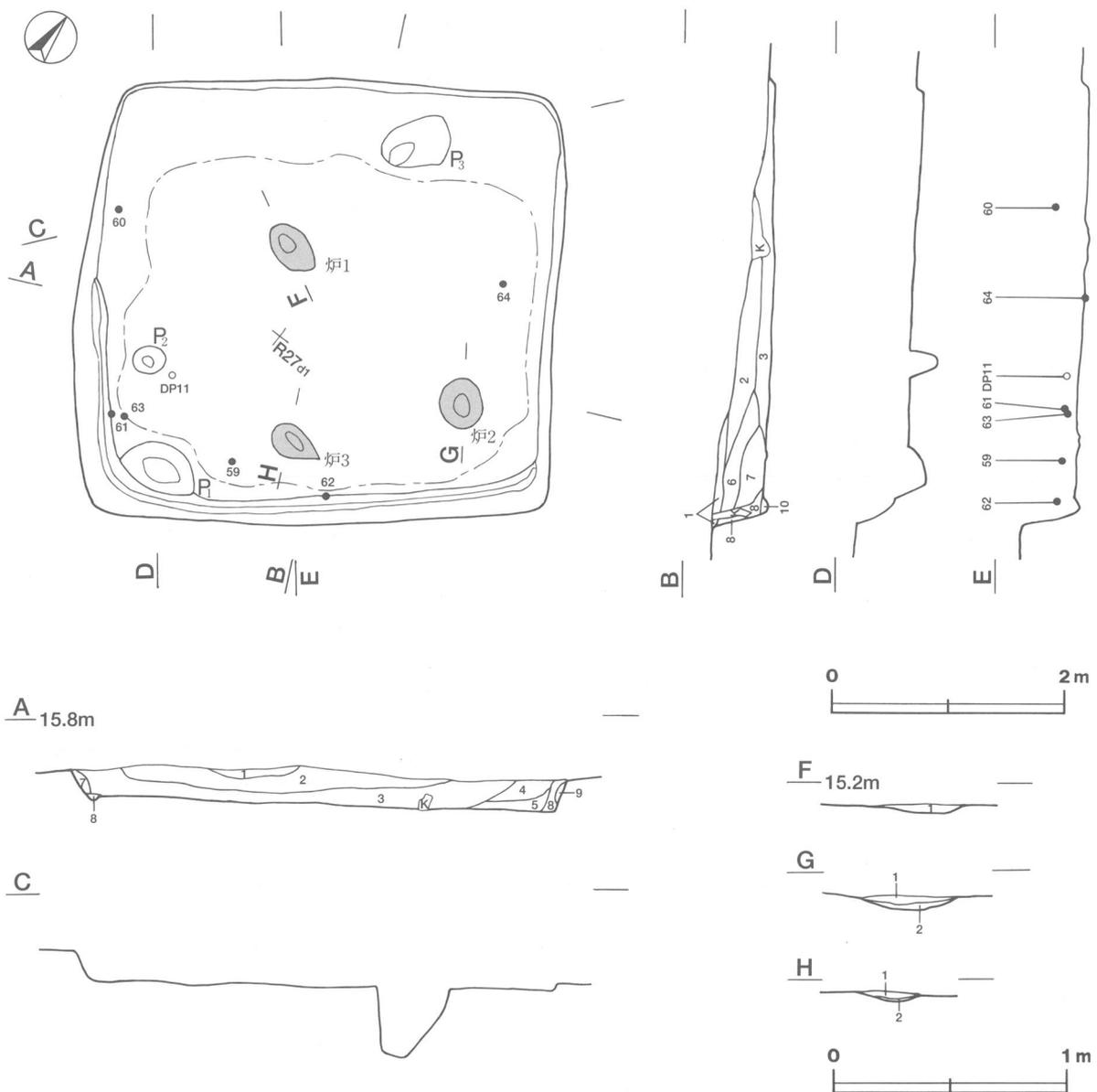
炉土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土小ブロック中量、炭化粒子少量
- 2 赤褐色 焼土中ブロック中量、炭化粒子少量

覆土 10層からなる。東側床面上に堆積する第5層は、焼土粒子や炭化材を比較的多く含んでいるものの、全体的には周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

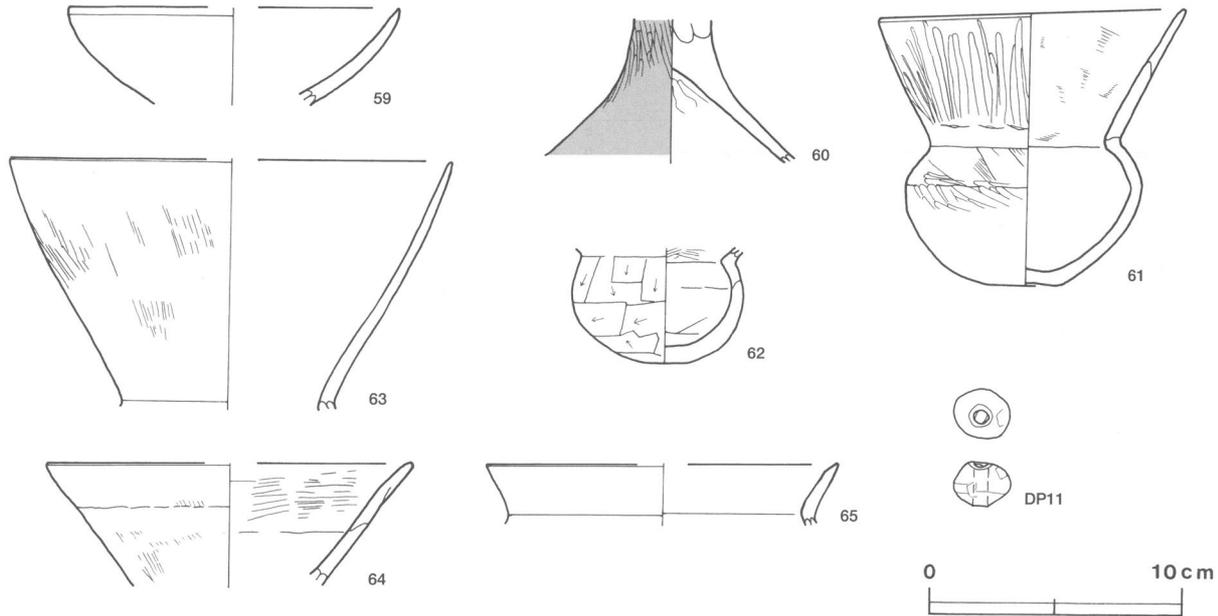
- | | | | |
|-------|------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物少量 |
| 3 暗褐色 | ローム中ブロック・炭化材少量、焼土粒子微量 | 8 褐色 | ローム中ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化材少量 | 9 褐色 | ローム中ブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土中ブロック・炭化材少量 | 10 褐色 | ローム中ブロック微量 |



第27図 第39号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片248点（高坏3，埴10，壺24，甕211），球状土錘1点，礫7点が，主に覆土下層から中層にかけて廃棄されたような状態で出土している。平面的には，中央部よりも北東壁及び南東壁際に大形の土師器片の集中が見られる。これらの他に，混入したとみられる縄文土器片8点が出土している。

所見 確認された3か所の炉の中で，中央部西寄りに位置する炉1が，貯蔵穴と考えられるP1との位置関係から，主炉と考えられる。時期は，出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第28図 第39号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
59	土師器	高坏	[13.0]	(3.8)	-	長石・赤色粒子	にぶい褐	普通	坏部内・外面ナデ。	下層	10%
60	土師器	高坏	-	-	-	石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	脚部外面磨き，赤彩，内面ナデ。	中層	10%
61	土師器	埴	12.1	10.8	2.5	石英・長石	灰白	普通	口縁部外面磨き，内面ハケ目，体部外面ヘラ削り，磨き。	下層	90% P L23
62	土師器	埴	-	(4.6)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部ヘラ削り，口縁部内面ハケ目，ナデ。	下層	70% P L23
63	土師器	壺	[17.4]	(9.8)	-	長石	にぶい橙	普通	口縁部磨き，ナデ。	下層	5%
64	土師器	壺	[14.4]	(4.9)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部ハケ目，ナデ。	下層	10%
65	土師器	甕	[13.8]	(2.4)	-	石英・長石	褐	普通	口縁部ナデ。	床面	5%

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
DP11	球状土錘	2.2	1.7	0.6	7.2	球体，外面ナデ。	下層	P L30

第40号住居跡（第29・30図）

位置 調査区の北部，R27c2区。標高15.5mの斜面部に位置する。

重複関係 古墳時代前期の第54号住居跡を掘り込み，北東側を古墳時代前期の第38号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.5m、確認した短軸1.66mで長方形である。壁は高さ10～18cmで、確認した範囲では外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦であるが、北側に向かって緩やかに傾斜している。壁際13～54cmの範囲を除き、よく踏み固められている。

ピット 確認した範囲に1か所。性格は不明である。深さは26cmである。

炉 確認した範囲にはない。第38号住居跡の構築に際して削平された可能性が考えられる。

覆土 2層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

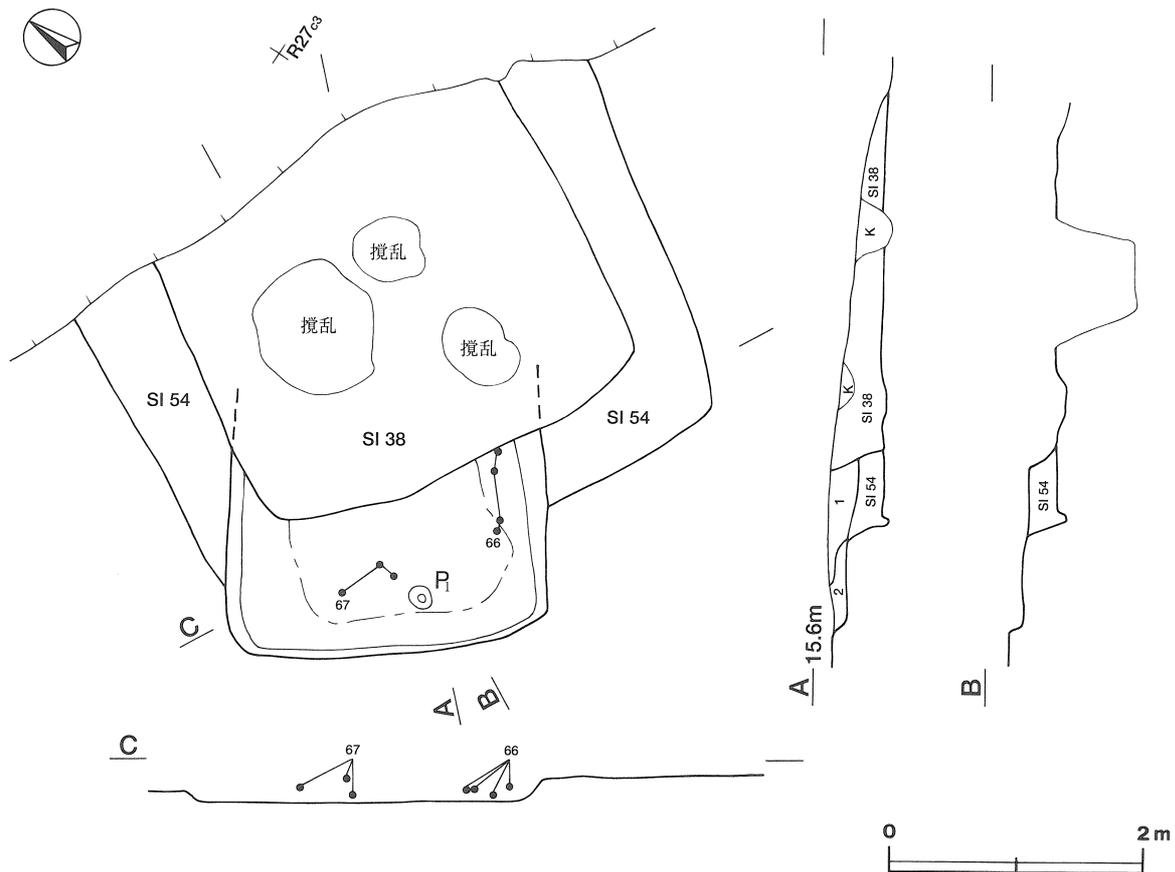
土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム中ブロック少量

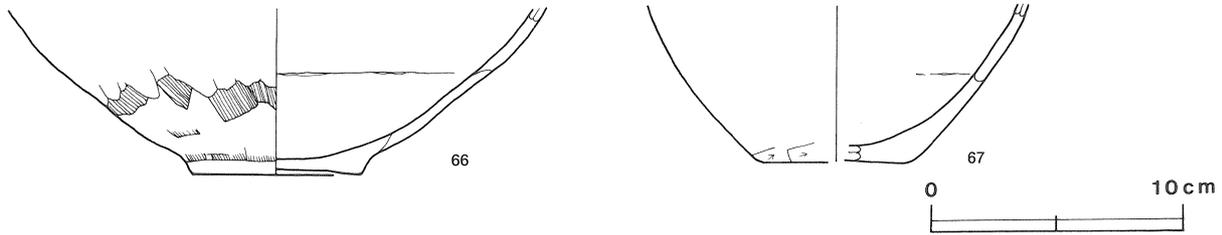
遺物出土状況 土師器片58点（壺1，甕57）が、主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。これらの他に、混入したとみられる縄文土器片1点が出土している。

所見 平成8年度調査及び今回の調査で確認された竪穴住居跡の中では、最も規模が小さい。北東側を第38号住居跡に掘り込まれているため、正確な規模及び形状は不明であるが、一辺2.5m程度の方形と推定される。

炉は不明であるが、床面が明瞭に硬化していることから、居住施設と考えられる。時期は、出土遺物や重複関係から4世紀後半と考えられる。



第29図 第40号住居跡実測図



第30図 第40号住居跡出土遺物実測図

第40号住居跡出土遺物観察表（第30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
66	土師器	甕	-	(6.6)	6.7	石英・長石	赤褐	普通	体部外面下半ハケ目，ナデ，内面ナデ。	中層	20%
67	土師器	甕	-	(6.2)	[5.6]	石英・雲母	橙	普通	体部外面下端ヘラ削り，内面ナデ。	上～下層	10%

第41号住居跡（第31・32図）

位置 調査区の東部，R27g4区。標高17.2mの台地縁辺部に位置する。3m南東側には，主軸方向が一致する第32号住居跡が位置している。

確認状況 北側は斜面部で削平され，かろうじて壁の立ち上がりを確認できた。

規模と形状 長軸7.14m，短軸6.58mの方形である。壁は高さ6～50cmで外傾して立ち上がる。主軸方向はN-25°-Wで，第32号住居跡の主軸方向と一致している。

床 はほぼ平坦であるが，北側に向かって緩やかに傾斜している。高低差は最大で15cmである。支柱穴と考えられるP1～4の内側と貯蔵穴と考えられるP6の北側はよく踏み固められている。壁際24～140cmの範囲は軟弱である。

ピット 6か所。P1～4は配置や規模から支柱穴と考えられる。P5は炉に対する位置で確認されていることから，出入口施設に伴うピットと考えられるが，かなり西にずれている。覆土の観察から，いずれも柱は抜き取られたと考えられる。P6は南コーナー部という位置や規模から貯蔵穴と考えられ，覆土は4層からなる。深さはP1が73cm，P2が54cm，P3が45cm，P4が51cm，P5が55cm，P6が51cmである。

P6土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|-------|--------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック中量，砂微量 | 4 暗褐色 | ローム小ブロック・砂少量 |

炉 中央部北西寄りに設けられている。長径120cm，短径68cmの不整楕円形で，床面を10cm程度掘りくぼめた地床炉と考えられる。炉床は北側に偏り，火熱を受けて赤変硬化している。南側は深さ9cmの浅い窪みで，焚き口と考えられる。覆土は3層からなる。

炉土層解説

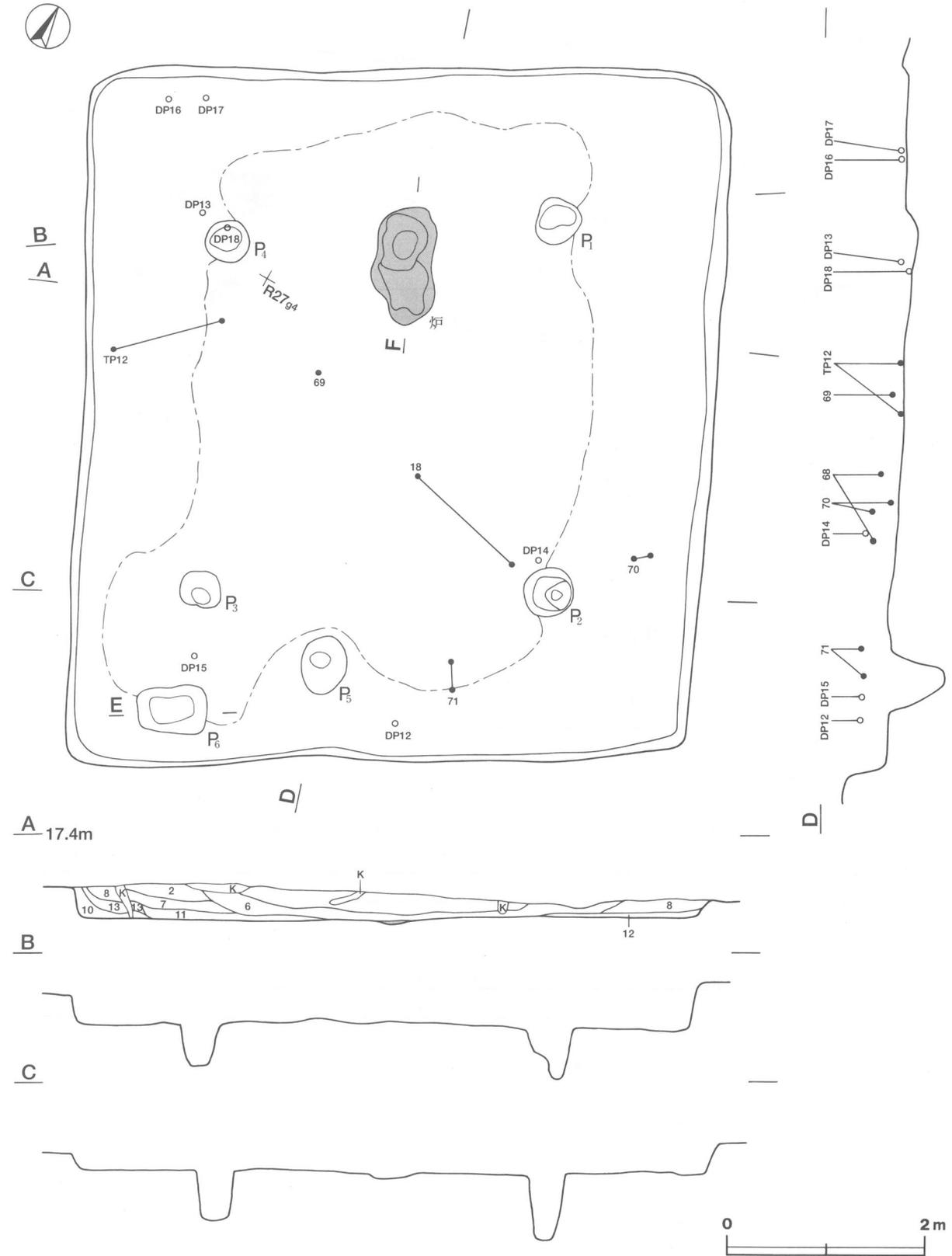
- | | | | |
|--------|------------------|--------|----------------|
| 1 赤褐色 | 焼土小ブロック多量，炭化粒子少量 | 3 暗赤褐色 | 焼土中ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土小ブロック中量，炭化粒子少量 | | |

覆土 13層からなる。第13層は北東壁際や東コーナー部の壁際で，三角堆積土の上に見られる焼土ブロックや炭化物を多く含んでいる赤褐色土である。その堆積状況から，炉などから掻き出された焼土が廃棄されたものと考えられる。全体的には周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。

土層解説

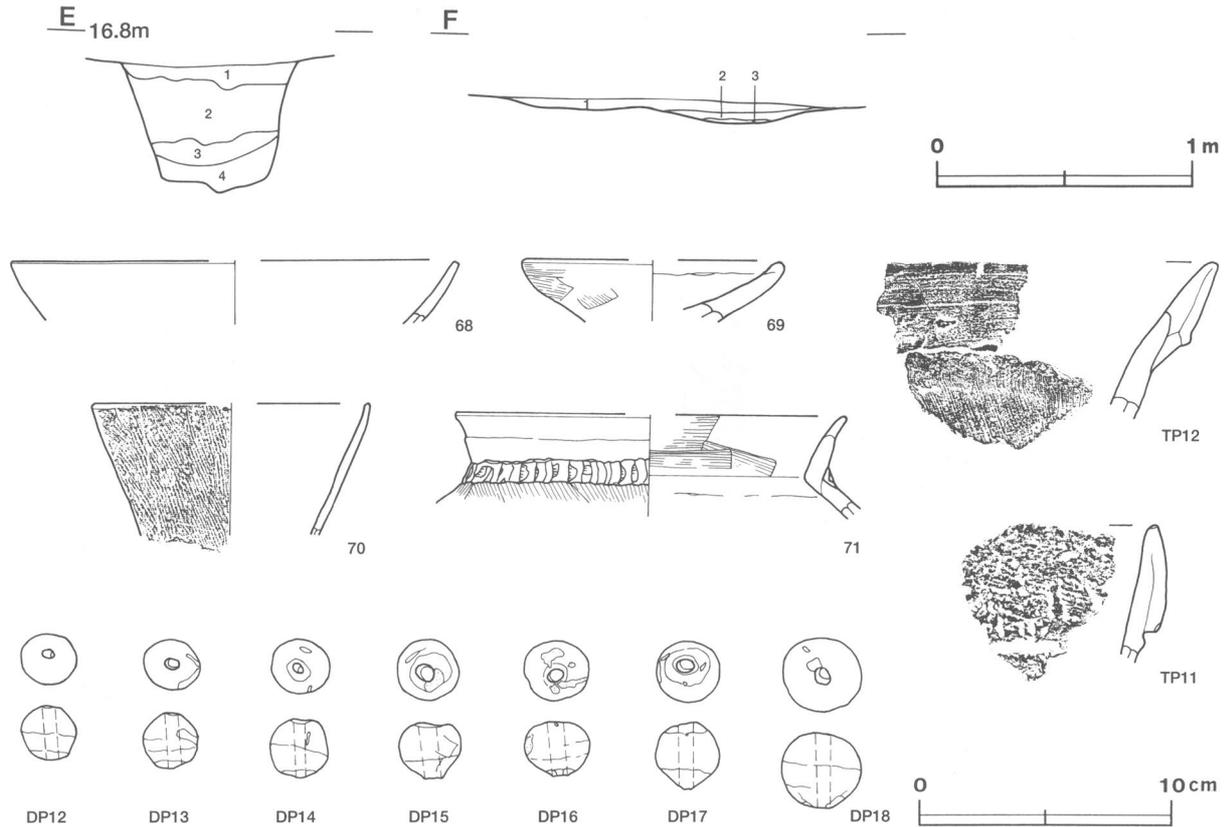
- | | | | |
|--------|------------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム中ブロック・炭化物微量 | 6 暗褐色 | ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量 | 7 褐色 | ローム大ブロック少量，炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量 | 8 赤褐色 | 焼土大ブロック中量，炭化物微量 |
| 4 黒褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量 | 9 暗褐色 | ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片432点（高坏45，器台10，埴 2，壺24，甕351），球状土錘8点，不明土製品18点，礫27点が，主に覆土下層から中層にかけて廃棄されたような状態で出土している。特に遺物の集中地点はないが，8点の球状土錘の内，7点が北西部の覆土下層から出土している。また炉の覆土中から5点の小円礫が出土している。これらの他に，混入したとみられる縄文土器片8点と安山岩製打製石斧片1点が出土している。



第31図 第41号住居跡実測図

所見 今回の調査で確認した最大規模の住居跡であり、平成8年度調査で確認した第5号住居跡に次ぐ規模である。時期は、出土遺物などから4世紀後半と考えられる。また、第32号住居跡と主軸方向及び形態が類似している。



第32図 第41号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡出土遺物観察表 (第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
68	土師器	高坏	[17.5]	(2.5)	-	石英・長石	明赤褐	普通	坏部ナデ。	中層	5%
69	土師器	器台	[10.2]	(2.4)	-	石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	器受部外面ハケ目、口縁端部横ナデ。	下層	5%
70	土師器	埴	12.1	10.8	2.5	長石・雲母	橙	普通	口縁部外面ハケ目、内面ナデ。	中層	5%
71	土師器	甕	[15.4]	(4)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部外面ナデ、体部外面ハケ目、頸部刻みをもつ粘土紐。	中層	70% P L 27

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP11	土師器	壺	-	(5.1)	-	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	折り返し口縁端部ハケ目、刻み。	中層	5%
TP12	土師器	壺	-	(6.2)	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	折り返し口縁部横ナデ、頸部ハケ目。	下層	5%

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
DP12	球状土鍾	2.1	2.2	0.5	7.7	球体、外面ナデ。	上層	P L 30
DP13	球状土鍾	2.1	2.2	0.5	8.4	球体、外面ナデ。	中層	P L 30
DP14	球状土鍾	2.3	2.3	0.4	10.2	球体、外面ナデ。	上層	P L 30
DP15	球状土鍾	2.4	2.1	0.7	11.6	球体、外面ナデ。	上層	P L 30
DP16	球状土鍾	2.6	2.2	0.6	12.2	球体、外面ナデ。	下層	P L 30
DP17	球状土鍾	2.5	2.7	0.6	13.3	球体、外面ナデ。	下層	P L 30
DP18	球状土鍾	3.1	3	0.6	28.2	球体、外面ナデ。	床面	P L 30

第42号住居跡 (第33・34図)

位置 調査区の中央部, R27g1区。標高16.6mの台地縁辺部に位置する。南西側で第43号住居跡, 南東側で第62号住居跡と隣接している。

確認状況 北西側は斜面部で, 壁及び床の一部が削平されている。

規模と形状 長軸4.04m, 推定短軸3.8mで方形と推定される。壁は高さ6~14cmで, 北西壁と北東壁の一部は削平されている。確認した範囲では外傾して立ち上がる。主軸方向はN-34°-Wである。

床 ほぼ平坦である。壁際10~110cmの範囲が軟弱で, 炉やP1の周囲は踏み固められている。2か所が攪乱されている。

ピット 1か所。P1は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。覆土は4層からなり, 深さは50cmである。

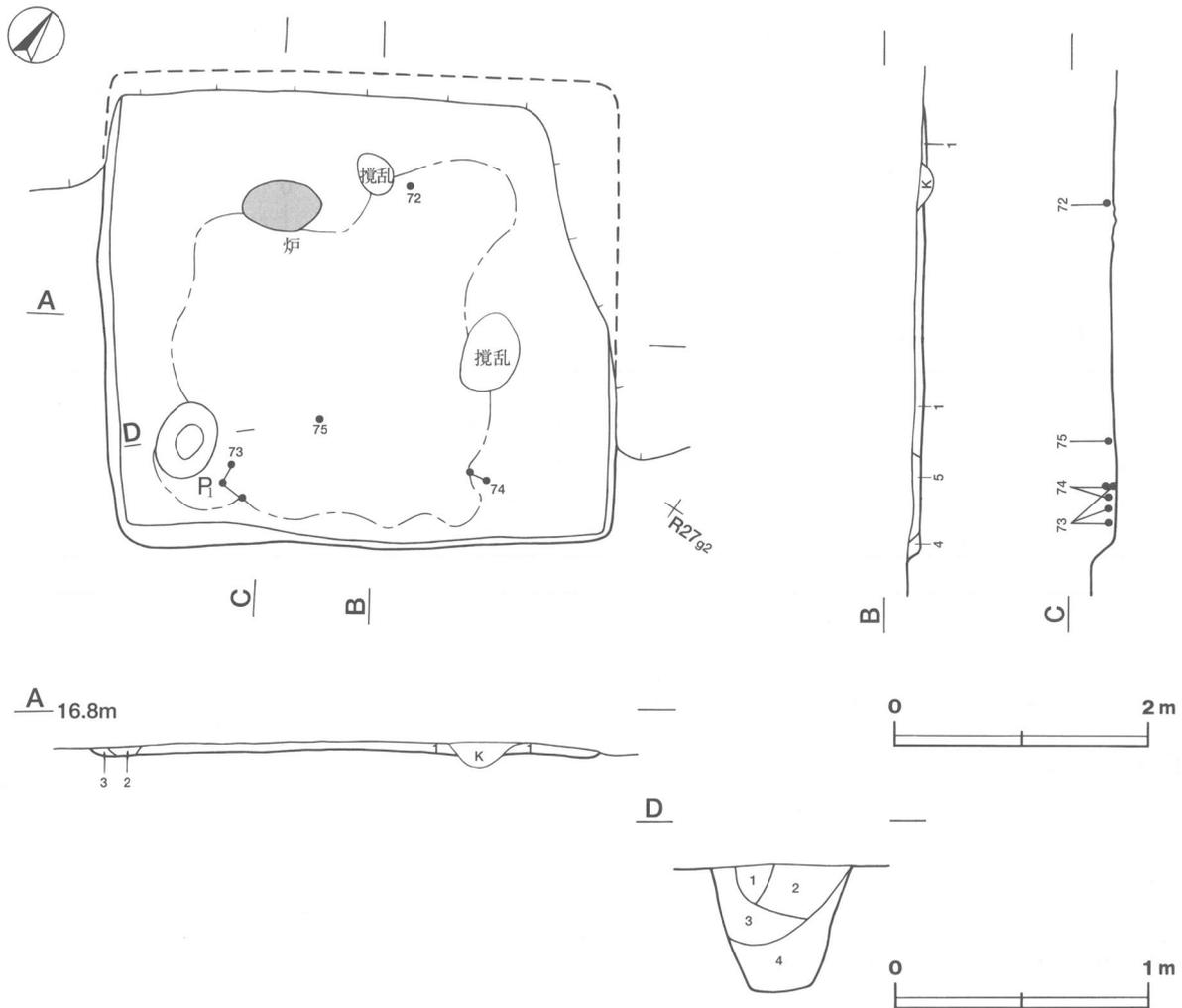
P1土層解説

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 3 黒褐色 ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 ローム中ブロック少量 |

炉 中央部北西寄りに設けられている。長径50cm, 短径30cmで, 床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化し, 炉床の外縁部は床面とほぼ同じ高さである。覆土は極めて薄く, 焼土ブロックや炭化物を多く含んでいる暗赤褐色の単一層である。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, ローム小ブロック・炭化物少量



第33図 第42号住居跡実測図

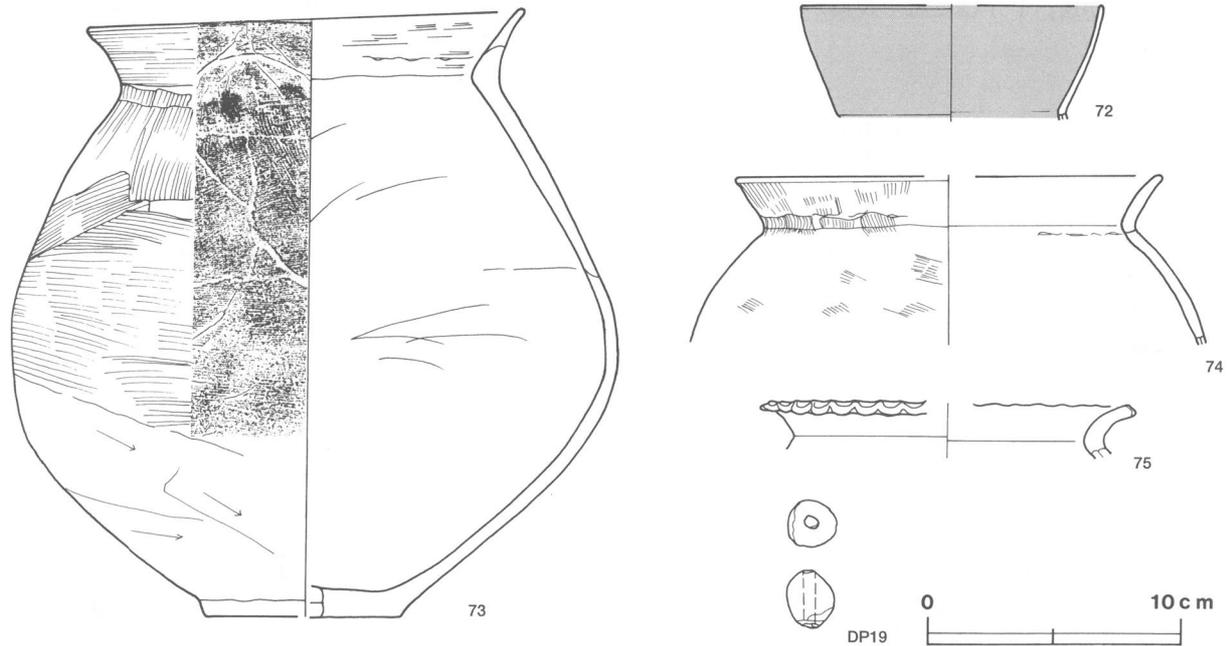
覆土 5層からなる。層厚が10cmと薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|-----------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量 | | |

遺物出土状況 土師器片97点（高坏4，埴3，甕90），球状土錘1点，礫3点が，主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。球状土錘は貯蔵穴と考えられるP1の覆土下層から出土している。これらの他に，混入したとみられる縄文土器片6点が出土している。

所見 時期は，出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第34図 第42号住居跡出土遺物実測図

第42号住居跡出土遺物観察表（第34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
72	土師器	埴	[11.6]	(5.7)	-	雲母	赤	普通	内・外面磨き，赤彩。	下層	5%
73	土師器	甕	17	(24.1)	[7.4]	石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ハケ目，ヘラ削り，内面ヘラナデ。	下層	70% P L26
74	土師器	甕	[16.8]	(6.7)	-	長石・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外面，体部外面ハケ目，ナデ，内面ナデ。	下層	5%
75	土師器	甕	[14]	(2.2)	-	石英・長石	黒褐	普通	口唇部交互指頭押圧で小波状，口縁部外面横ナデ。	下層	5%

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
DP19	球状土錘	2	2.2	0.5	7.6	球体，外面ナデ。	下層	P L30

第43号住居跡（第35・36図）

位置 調査区の中央部，R26g0区。標高16.7mの台地縁辺部に位置する。北東側で第42号住居跡と隣接している。

重複関係 時期不明の第15号土坑に掘り込まれ，縄文時代早期の第2号炉穴の東側を掘り込んでいる。

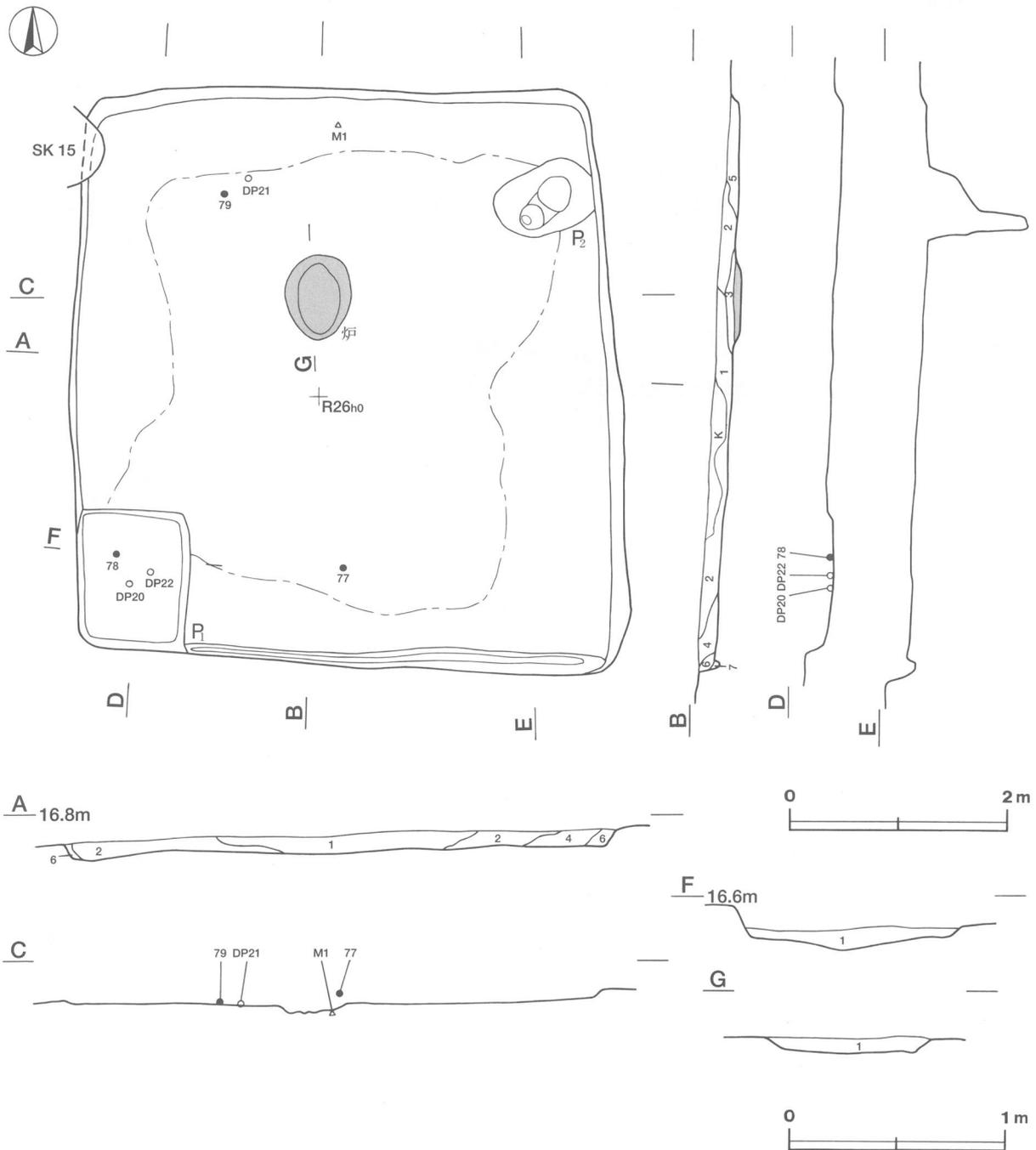
規模と形状 長軸5.45m，短軸5.14mの方形である。壁は高さ4～20cmで外傾して立ち上がる。主軸方向はN-1°-Wである。

床 ほぼ平坦であるが、北側に向かって緩やかに傾斜している。高低差は最大で16cmである。中央部と貯蔵穴と考えられるP1の北側はよく踏み固められている。壁際22~110cmの範囲は軟弱である。南壁に沿って壁溝が巡っている。断面形はU字状を呈し、上幅は10~22cm、深さは底面から9cmである。

ピット 2か所。P1は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。形状は長軸1.3m、短軸1.04mの長方形である。深さは10cmと浅く、底面はほぼ平坦である。覆土は単一層である。P2は東壁北寄りに位置し、深さ95cmである。土層観察の結果、柱痕が確認されているため柱穴と考えられる。床面を掘り下げて対応する柱穴の確認に努めたが確認できなかった。

P1土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック・焼土中ブロック少量、炭化物微量



第35図 第43号住居跡実測図

炉 中央部北寄りに設けられている。長径80cm，短径60cm，床面を14cm程度掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け，赤変硬化している。覆土は単一層である。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土中ブロック少量，ローム粒子・炭化物微量

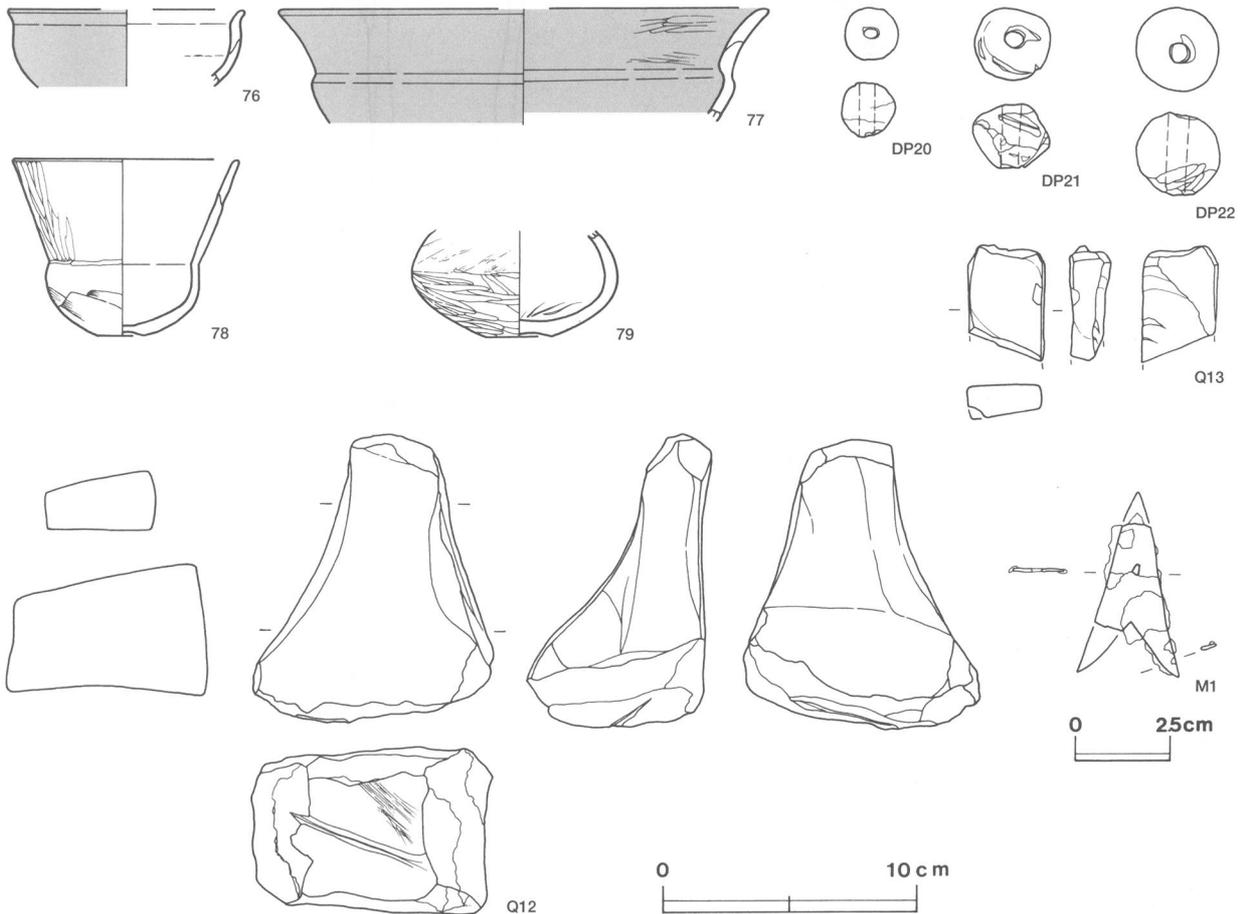
覆土 7層からなる。全体的には周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と推定される。また北西コーナーや南壁際の床面上には，ブロック状の焼土塊や細片化した炭化材が見られた。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物少量 | 5 褐色 | ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック少量，炭化物微量 | 6 褐色 | ローム中ブロック少量，焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土中ブロック・炭化物少量 | 7 褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 褐色 | ローム小ブロック・焼土中ブロック・炭化材少量 | | |

遺物出土状況 土師器片（椀1，高坏2，器台1，埴3，壺17，甕126）150点，球状土錘3点，無茎式鉄鎌1点，礫12点が，主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。貯蔵穴と考えられるP1の底面からは，第36図78の埴形土器とDP20・22の球状土錘が出土している。また，M1の無茎式鉄鎌は，北壁際中央部の床面から出土している。

所見 北西コーナーや南壁際の床面上には，ブロック状の焼土塊や炭化材が見られた。これらは，本跡の焼失に伴うものなのか，単に埋没過程で廃棄されたものなのか，詳細は不明である。時期は，出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第36図 第43号住居跡出土遺物実測図

第43号住居跡出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
76	土師器	碗	[9.2]	(3)	-	長石	明赤褐	普通	外面磨き, 赤彩, 内面ナデ。	床面	5%
77	土師器	埴	[9.2]	(4.4)	-	長石	明赤褐	普通	内・外面赤彩, 口縁部内面磨き, ナデ。	下層	5%
78	土師器	埴	8.7	7	1.8	石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部外面磨き, 内面ナデ, 体部ハケ目, ナデ。	床面	95% P L23
79	土師器	埴	-	(4.2)	2.4	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ハケ目, ナデ, 磨き, 内面ヘラナデ。	床面	80% P L23

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
DP20	球状土錘	2.1	2.1	0.6	9.5	球体, 外面ナデ。	床面	P L30
DP21	球状土錘	3	2.3	0.8	18.1	球体, 外面ナデ, 棒状工具痕。	床面	P L30
DP22	球状土錘	3.2	3.2	0.8	33.1	球体, 外面ナデ, 棒状工具痕。	床面	P L30

番号	種別	計測値				石質	特徴	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
Q12	砥石	11.5	9.4	7	589.9	凝灰岩	4面使用, 下端に線条痕, 断面V字状の切込あり。	床面	P L31
Q13	砥石	(4.6)	3	1.6	(23.9)	凝灰岩	4面使用, 折損あり。	床面	

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
M1	鉄鏃	(4.2)	(2.3)	0.2	(3.2)	無茎式, 中央部に孔, 先端部・逆刺折損。	床面	P L32

第44号住居跡（第37図）

位置 調査区の中央部, R26e0区。標高16.2mの斜面部に位置する。南西側で第57号住居跡と隣接している。

確認状況 北側は斜面部で, 壁及び床の一部が削平されている。

規模と形状 推定長軸3.28m, 短軸3.26mで方形と推定される。壁は高さ11~29cmで, 確認した範囲で外傾して立ち上がる。主軸方向はN-7°-Wである。

床 ほぼ平坦であるが, 中央部がややくぼんでいる。床面は全体的に軟弱で, 炉の南側を中心に踏み固められている。

ピット 3か所。P1は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。底面の一部がさらに掘り込まれ, 段を有している。覆土は暗褐色土の2層からなる。P2・3は性格不明である。深さはP1が38cm, P2が22cm, P3が25cmである。

P1土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量

炉 中央部東寄りに設けられている。長径62cm, 短径49cmで, 床面を20cm程度掘りくぼめた地床炉である。炉床はあまり赤変硬化していない。覆土は3層からなる。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, ローム小ブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量

覆土 4層からなる。全体的には周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため, 自然堆積と推定される。

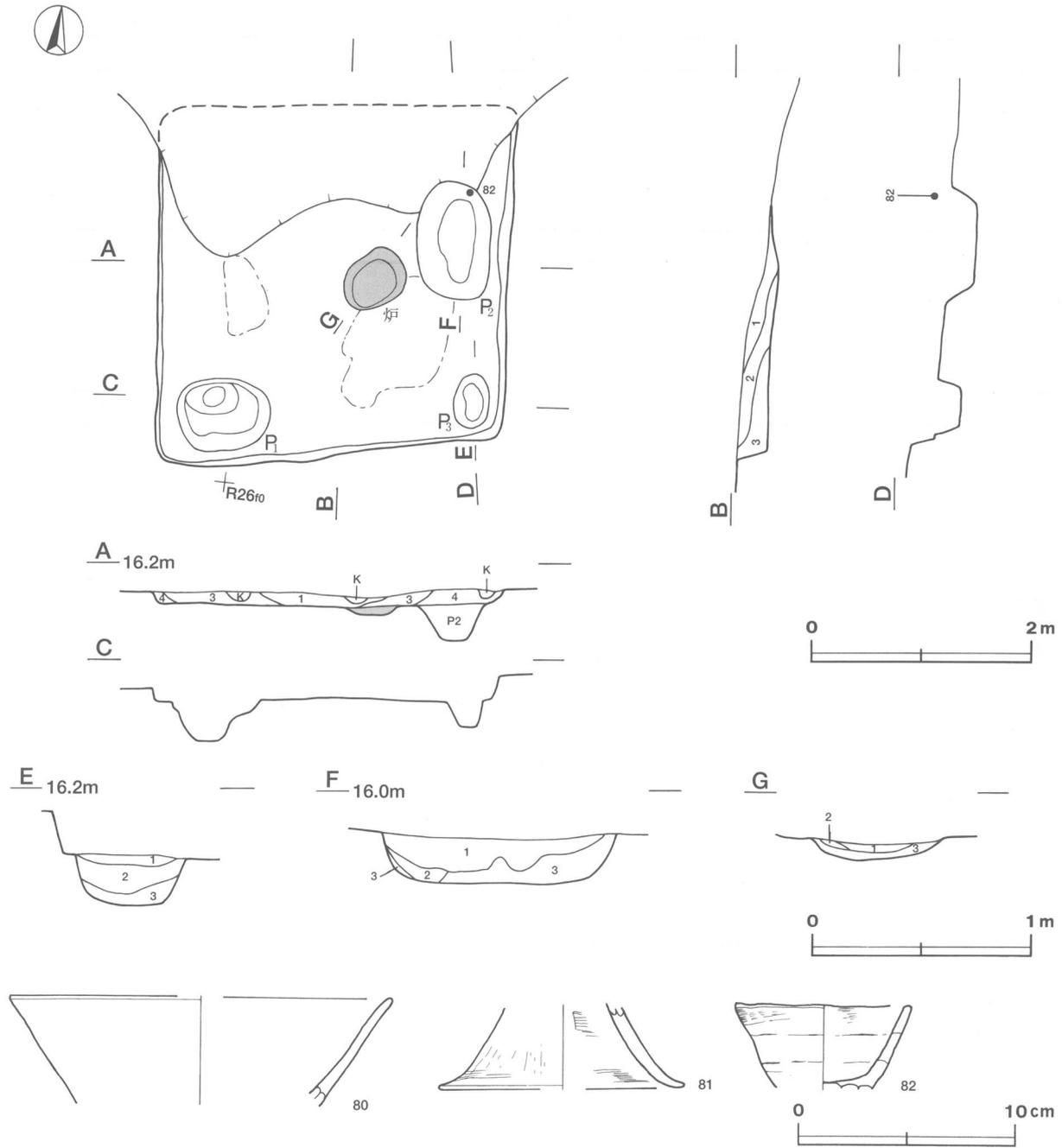
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 土師器片84点（高坏13, 埴13, 壺1, 甕56, 手捏土器1）, 礫1点が, 主に覆土下層から廃棄

されたような状態で出土している。これらの他に、混入したとみられる縄文土器片3点とチャート製凹石1点が出土している。

所見 時期は、出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第37図 第44号住居跡・出土遺物実測図

第44号住居跡出土遺物観察表 (第37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
80	土師器	高坏	[17.2]	(4.9)	-	石英・長石	橙	普通	内・外面ナデ。	床面	5%
81	土師器	高坏	-	-	(12.2)	石英・長石	明赤褐	普通	脚部内外面ハケ目、横ナデ。	下層	5%
82	土師器	手捏土器	7.9	(3.9)	-	石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁端部横ナデ、体部輪積み痕。	床面	95% PL23

第45号住居跡 (第38・39図)

位置 調査区の中央部, R26d8区。標高15.3mの斜面部に位置する。西側で第46号住居跡と隣接している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。北側は斜面部で削平されている。

規模と形状 確認した長軸3.5mから, 1辺が3.5m程度の方形と推定される。壁は高さ10~19cmで, 確認した範囲ではほぼ直立する。北壁は完全に削平されている。主軸方向はN-28°-Wである。

床 確認した範囲はほぼ平坦である。炉の周囲を中心に踏み固められている。

ピット 3か所。P1は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。底面の中央部に深さ20cmの小穴が穿たれている。覆土は単一層である。P2・3は性格不明である。深さはP1が20cm, P2が32cm, P3が16cmである。

P1土層解説

1 暗褐色 ローム中ブロック少量, 焼土粒子微量

炉 中央部南東寄りに位置し, 南東壁に近接している。長径66cm, 短径43cmで, 床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化し, 炉床の外縁部は床面とほぼ同じ高さである。覆土は極めて薄く, 焼土ブロックや炭化物を多く含んでいる暗赤褐色の単一層である。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土中ブロック少量, ローム小ブロック・炭化物微量

覆土 2層からなる。層厚が10cmと薄いため, 堆積状況は不明である。

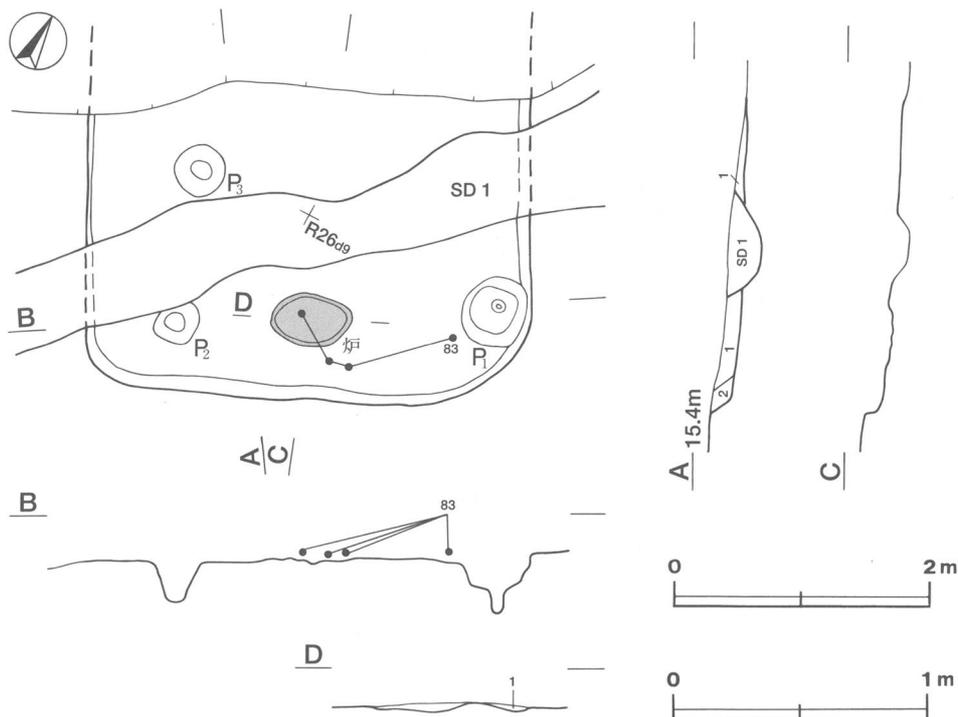
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量

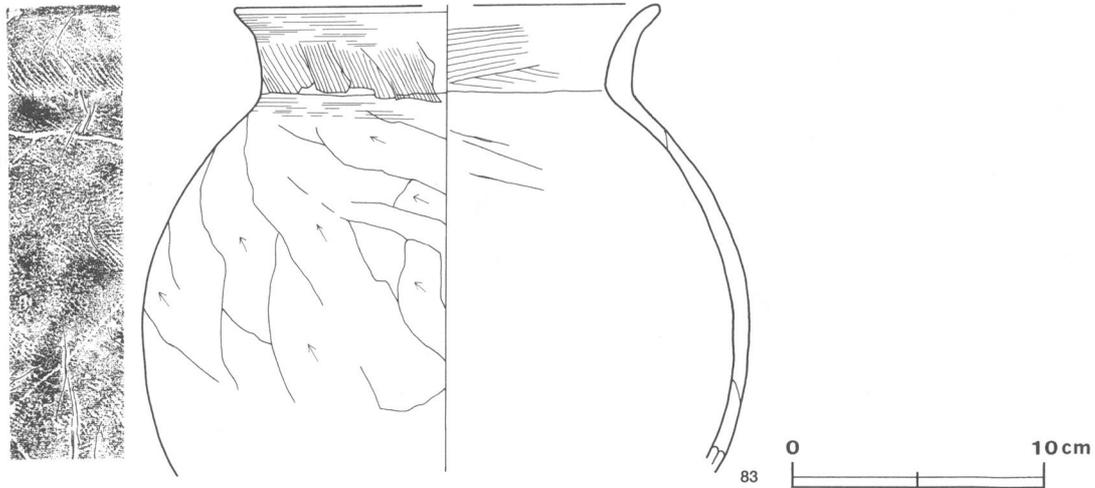
2 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 土師器片38点(壺7, 甕31)が, 炉の周囲の床面や覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。

所見 時期は, 出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第38図 第45号住居跡実測図



第39図 第45号住居跡出土遺物実測図

第45号住居跡出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
83	土師器	甕	16.8	(18.4)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目，横ナデ，体部外面へラ削り。	下層	40%

第46号住居跡（第40・41図）

位置 調査区の西部，R26c7区。標高14.8mの斜面部に位置する。北東側で第4号竪穴跡，東側で第45号住居跡，南側で第56号住居跡と隣接している。

確認状況 北側は斜面部で削平されているが，掘り込みが深いので，壁の立ち上がりを確認できた。

規模と形状 長軸5.42m，短軸5mの方形である。壁は高さ16～42cmで外傾して立ち上がる。主軸方向はN-34°-Wである。

床 ロームブロックを多量に含む褐色土を，6～29cmほど埋土して構築された貼床である。床面はやや凹凸が見られ，北側に向かって緩やかに傾斜している。高低差は最大で20cmである。壁際20～80cmの範囲は軟弱で，炉の周囲はよく踏み固められている。

ピット 3か所。P1は東コーナー部に位置し，規模及び形状から貯蔵穴と考えられる。P1の覆土上面や周囲には焼土層が堆積し，8層からなる覆土も焼土ブロックや焼土粒子を多く含んでいる。また覆土中層にはブロック状の白色粘土が存在したため，人為的に埋め戻されたと考えられる。P2・3は性格不明である。深さはP1が55cm，P2が41cm，P3が30cmである。

P1土層解説

- | | |
|----------------------------------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 炭化物少量，焼土粒子微量 | 5 赤褐色 焼土小ブロック中量，灰少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土小ブロック少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量 | 6 極暗赤褐色 焼土小ブロック・灰中量 |
| 3 極暗赤褐色 焼土中ブロック中量，炭化物微量 | 7 暗褐色 ローム中ブロック・焼土粒子少量 |
| 4 赤褐色 焼土大ブロック多量 | 8 灰白色 白色粘土多量，焼土粒子少量 |

炉 中央部北寄りに設けられている。長径92cm，短径60cmの楕円形で，床面を8cm程度掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け，赤変硬化している。覆土は単一層である。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土中ブロック・炭化物中量，ローム小ブロック少量

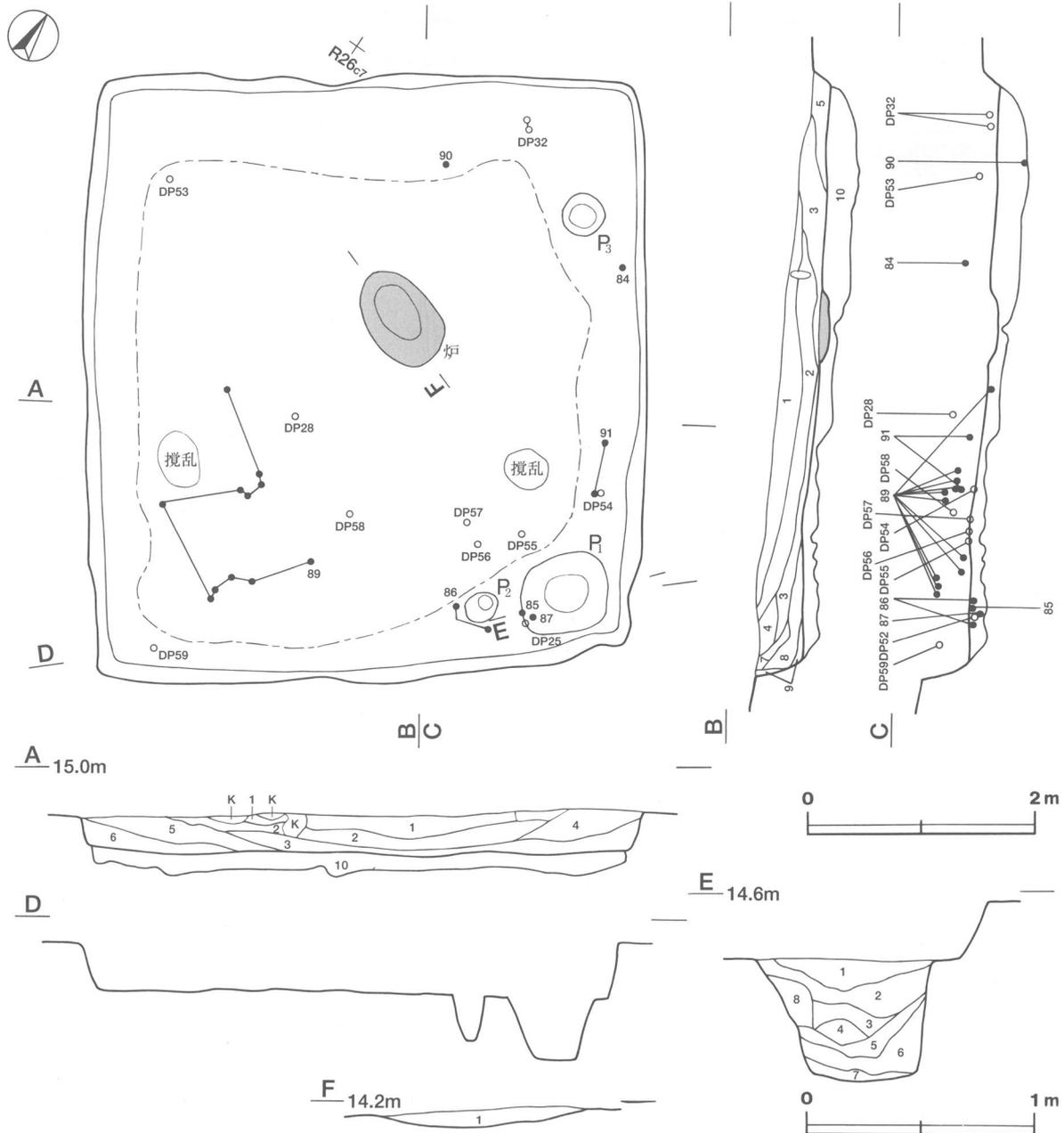
覆土 9層からなる。全体的には周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。

土層解説

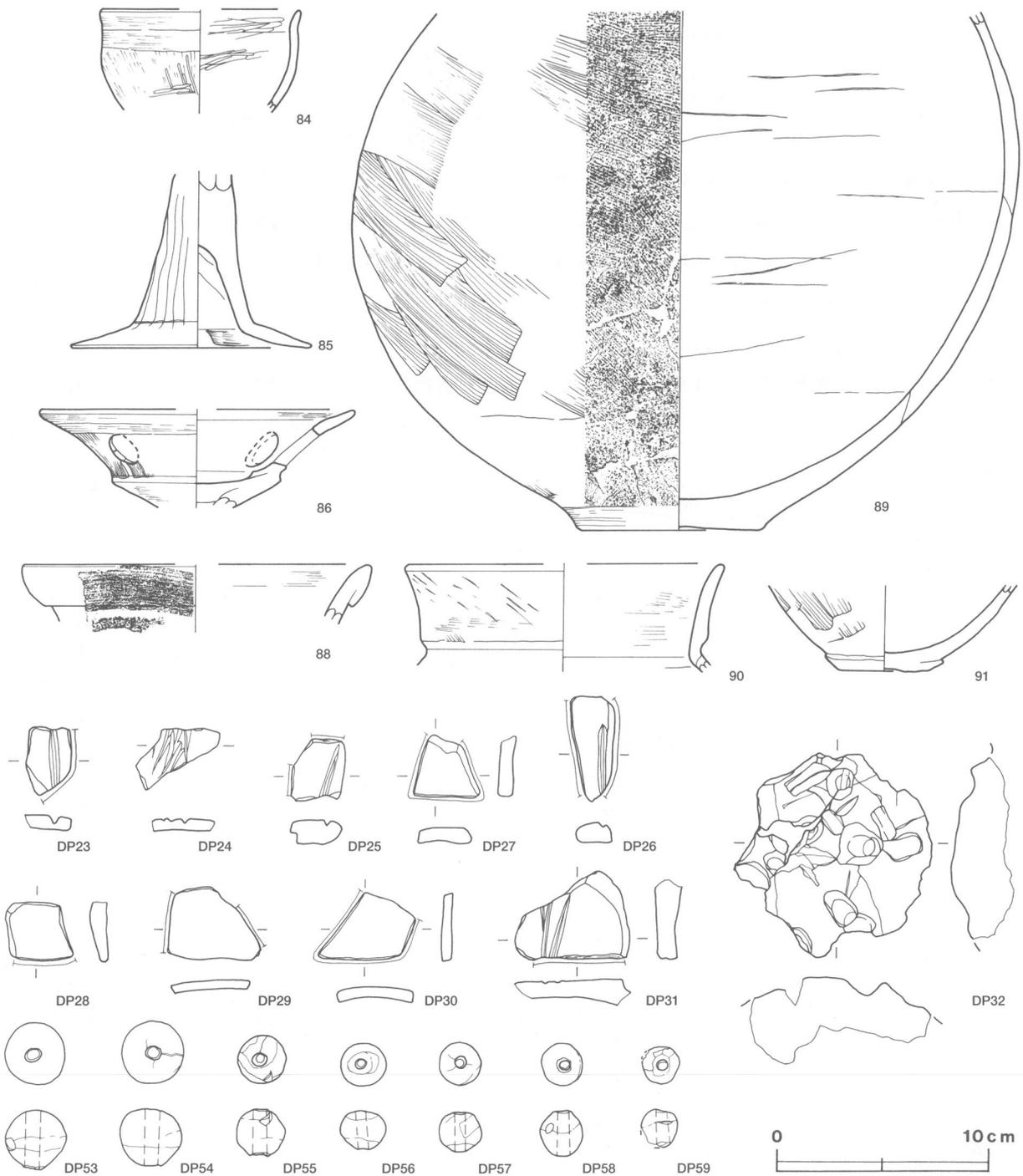
- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム中ブロック・焼土粒子・炭化材微量 |
| 2 黒褐色 | ローム中ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム大ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化材微量 |
| 4 暗褐色 | ローム中ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ローム中ブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ローム中ブロック少量 | 10 褐色 | ローム中ブロック多量 (貼床) |

遺物出土状況 土師器片641点 (碗3, 高坏63, 埴2, 壺24, 甕548, ミニチュア土器1), 球状土錘7点, 土師器片転用砥9点, 不明土製品29点, 礫1点が, 主に覆土下層から中層にかけて廃棄されたような状態で出土している。また炭化材が壁際の三角堆積土の上に散見された。特に遺物の集中地点はないが, 9点の土師器片転用砥の内, 7点がP1の覆土中から出土していることは注目される。これらの他に, 混入したとみられる縄文土器片19点が出土している。

所見 時期は, 出土遺物などから4世紀後半と考えられる。遺物では9点の土師器片転用砥の出土が注目される。その多くは何らかの理由により, 焼土ブロックなどと共にP1の中に廃棄されたと考えられる。



第40図 第46号住居跡実測図



第41図 第46号住居跡出土遺物実測図

第46号住居跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
84	土師器	碗	[9.4]	(4.8)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ, 体部, 口縁部内面磨き, ナデ。	中層	25% P L22
85	土師器	高環	-	-	(11.3)	長石・赤色粒子	浅黄橙	普通	脚部外面磨き, 内面ナデ, 下端ハケ目。	床面	30% P L22
86	土師器	高環	[14.9]	(4.6)	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ハケ目, 内面ナデ, 5孔か。	床面	25%
88	土師器	壺	[16.2]	(2.8)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ。	下層	5%
89	土師器	壺	-	(24.5)	8.9	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目, 下端ナデ, 体部内面ヘラナデ。	上層~床面	70% P L26
90	土師器	甕	[15]	(5)	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面ハケ目, 横ナデ, 口縁部内面横ナデ。	床面	5%
91	土師器	甕	-	(4)	(4.3)	石英・長石	橙	普通	体部外面ハケ目, ナデ。	中層	5%

番号	種別	計測値						特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (g)	孔径 (g)	重量 (g)			
DP23	転用砥	-	3.2	2.2	0.6	-	5.1	1側縁使用, 片面にV字状の切込あり。	P1中層	P L 29 甕
DP24	転用砥	-	2.9	3.9	0.5	-	4.9	片面にV字状の切込多数あり。	P1中層	P L 29 甕
DP25	転用砥	-	2.9	2.5	1.1	-	8.9	2側縁使用, 片面にV字状の切込あり。	P1上層	P L 29 壺
DP26	転用砥	-	5.1	2.1	0.9	-	10.2	2側縁使用, 片面にV字状の切込あり。	P1中層	P L 29 甕
DP27	転用砥	-	2.9	3.1	0.7	-	6.9	3側縁使用。	P1中層	P L 29 壺
DP28	転用砥	-	2.8	3.1	0.8	-	8.7	1側縁使用。	中層	P L 29 甕
DP29	転用砥	-	3.5	4.3	0.4	-	8.3	2側縁使用。	P1中層	P L 29 甕
DP30	転用砥	-	3.2	4.6	0.5	-	8	3側縁使用。	P1中層	P L 29 甕
DP31	転用砥	-	4.1	5.5	1.3	-	25.3	1側縁使用, 片面にV字状の切込あり。	P1中層	P L 29 甕
DP32	土製品	-	9.6	9.4	3.4	-	191.8	表面に指頭痕, ヘラ状工具痕多数あり。	下層	
DP53	球状土錘	2.8	2.8	-	-	0.7	21.7	球体, 外面ナデ。	上層	
DP54	球状土錘	2.8	2.7	-	-	0.7	22.7	球体, 外面ナデ。	床面	
DP55	球状土錘	2.3	2.2	-	-	0.7	10.3	球体, 外面ナデ。	床面	
DP56	球状土錘	2.2	1.8	-	-	0.5	7.7	球体, 外面ナデ。	床面	
DP57	球状土錘	2	1.9	-	-	0.5	7.8	球体, 外面ナデ。	床面	
DP58	球状土錘	2	2.1	-	-	0.5	8.5	球体, 外面ナデ。	下層	
DP59	球状土錘	1.7	1.7	-	-	0.5	5.2	球体, 外面ナデ。	下層	

第47号住居跡 (第42・43図)

位置 調査区の西部, R26e5区。標高15.2mの斜面部に位置する。

確認状況 北側は斜面部で削平されている。

規模と形状 長軸5.42m, 推定短軸5.35mで方形と推定される。壁は高さ18~40cmで, 確認した範囲では外傾して立ち上がる。主軸方向はN-15°-Wである。

床 確認した範囲はほぼ平坦であるが, 北側に向かって緩やかに傾斜している。高低差は最大で20cmである。

床面は壁際46~170cmの範囲が軟弱で, 炉の周囲はよく踏み固められている。

ピット 3か所。P1~3は西コーナー部に位置し, 東西方向に並んでいる。P2は規模及び形状から貯蔵穴と考えられる。P1・3は性格不明であるが, 位置から貯蔵穴に関係するピットの可能性が高い。深さはP1が32cm, P2が25cm, P3が20cmである。

P1~3土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック中量

炉 中央部北寄りに設けられている。長径50cm, 短径42cmの楕円形で, 床面を8cm程度掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け, 赤変硬化している。覆土は単一層である。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土中ブロック中量, 炭化粒子少量

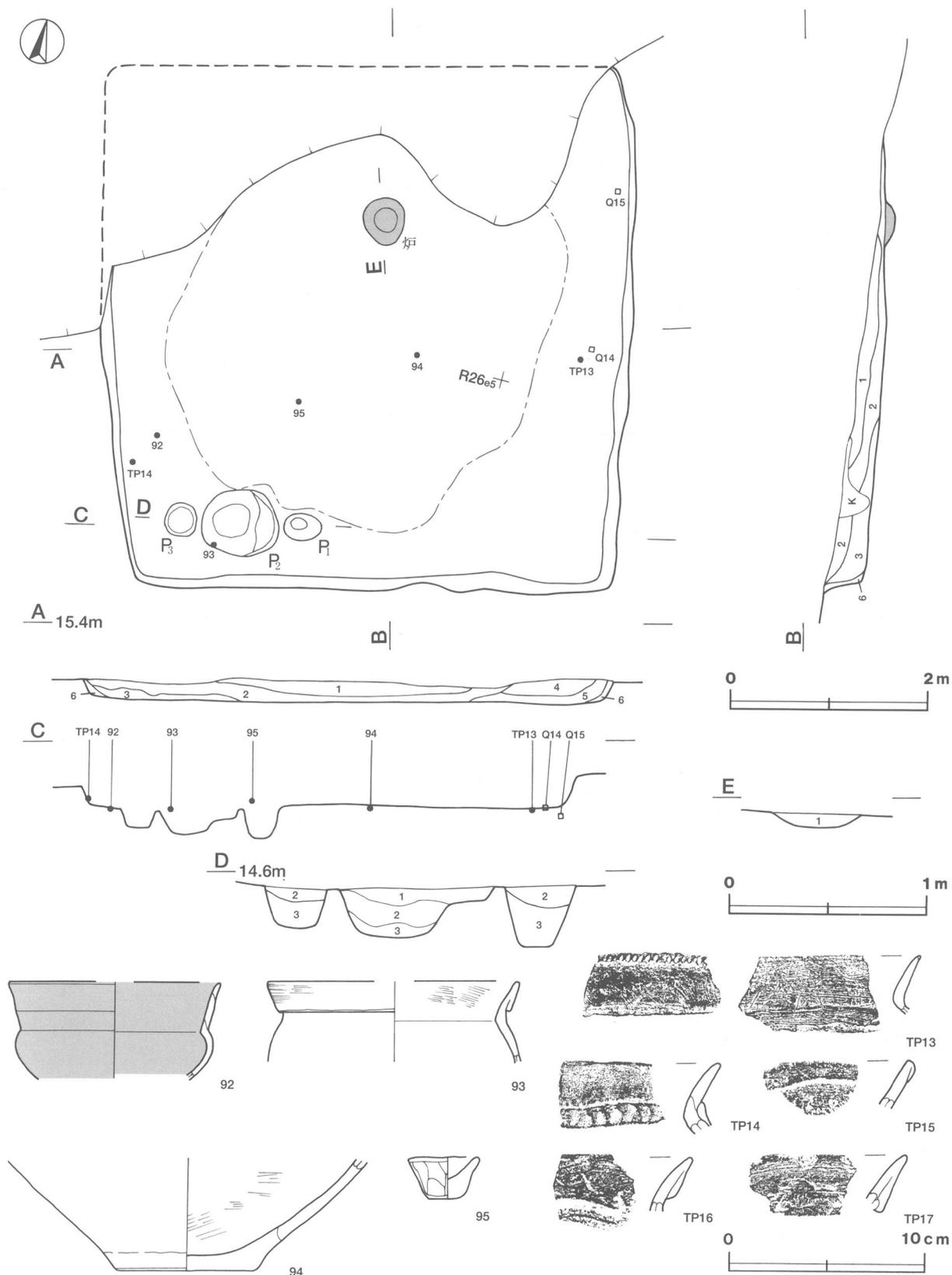
覆土 6層からなる。全体的には周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため, 自然堆積と考えられる。

土層解説

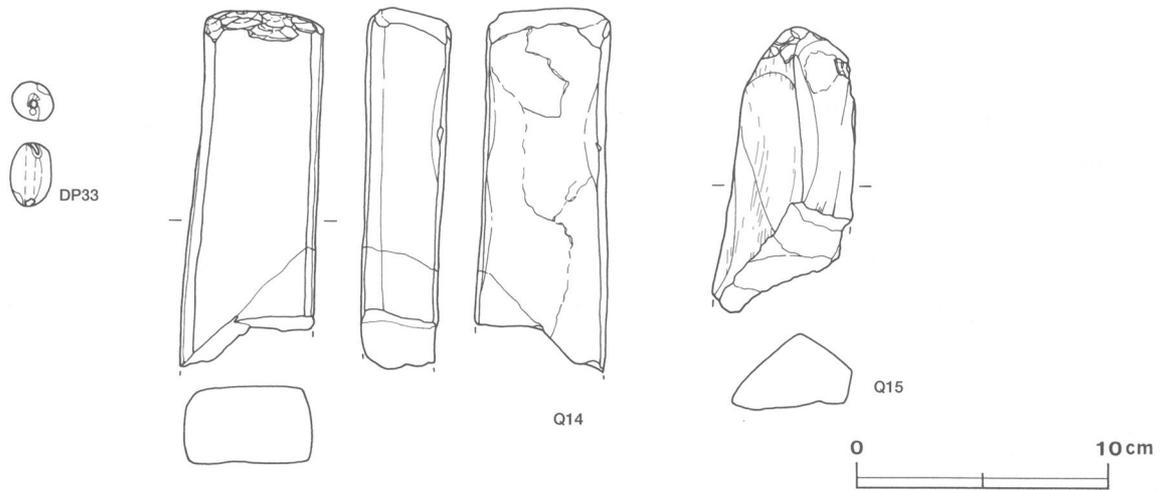
- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黄褐色 ローム中ブロック少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・炭化材微量
- 5 暗褐色 ローム中ブロック少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 6 褐色 ローム大ブロック少量

遺物出土状況 土師器片641点 (高坏17, 器台3, 埴13, 壺43, 甕522, ミニチュア土器1), 球状土錘1点, 凝灰岩製砥石2点, 礫7点が, 主に覆土下層から中層にかけて廃棄されたような状態で出土している。2点の

凝灰岩製砥石は、東壁際の床面から出土している。また混入したとみられる縄文土器片132点が出土している。所見 P1～3は、東西方向に並んで西コーナー部に位置し、その第2・3層がいずれにも共通する覆土のため、貯蔵穴と貯蔵穴に関係するピットと考えられる。時期は、出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第42図 第47号住居跡・出土遺物実測図



第43図 第47号住居跡出土遺物実測図

第47号住居跡出土遺物観察表 (第42・43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
92	土師器	埴	[10.7]	(4.9)	-	長石	赤	普通	内・外面磨き, 赤彩。	床面	5%
93	土師器	甕	[12.8]	(4.1)	-	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ, 内面ハケ目, ナデ。	P2上層	5%
94	土師器	甕	-	(5.7)	7	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ナデ, 内面ハケ目, ナデ。	床面	10%
95	土師器	ミニチュア土器	3.6	2.2	1.7	石英・長石	にぶい黄橙	普通	指頭によるつまみ上げ, ナデ。	床面	完形 P L23

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP13	土師器	甕	-	(2.6)	-	長石・雲母・赤色粒子	灰褐	普通	口縁部ハケ目, ナデ, 口唇部刻み目。	床面	5%
TP14	土師器	甕	-	(3.2)	-	長石・雲母	灰黄褐	普通	口縁部横ナデ, 頸部押捺を加えた粘土紐。	床面	5%
TP15	土師器	壺	-	(2.5)	-	長石・雲母	橙	普通	折り返し口縁部ハケ目, ナデ。	下層	5%
TP16	土師器	壺	-	(2.6)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	折り返し口縁部ナデ。	下層	5%
TP17	土師器	壺	-	(2.9)	-	長石・雲母・赤色粒子	灰褐	普通	折り返し口縁部横ナデ。	下層	5%

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
DP33	球状土錘	1.6	2.5	0.3	5.6	球体, 外面ナデ。	下層	P L30

番号	種別	計測値				石質	特徴	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
Q14	砥石	(14.3)	5.3	3.2	(408.1)	凝灰岩	4面使用, 折損あり。	床面	P L31
Q15	砥石	(11.2)	5	3.2	(154.3)	凝灰岩	2面使用, 線状痕多数, 折損あり。	床面	P L31

第48号住居跡 (第44・45図)

位置 調査区の北部, Q26j8区。標高13.6mの緩斜面部に位置する。

重複関係 時期不明の第2号溝に掘り込まれ, 西側は斜面部で削平されている。

規模と形状 確認した長軸3.8mから, 1辺が4m程度の方角と推定される。壁は高さ14~18cmで, 確認した範囲では外傾して立ち上がる。主軸方向はN-73°-Wである。

床 確認した範囲はほぼ平坦であるが, 北側に向かって緩やかに傾斜している。高低差は最大で16cmである。

床面は壁際20~40cmの範囲が軟弱で, 炉の周囲はよく踏み固められている。

ピット 5か所。P 1は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。P 2は炉に対する位置で確認されていることから、出入口施設に伴うピットと考えられるが、やや南にずれている。P 3～5は性格不明である。深さはP 1が33cm, P 2が35cm, P 3が31cm, P 4が30cm, P 5が26cmである。

P 1土層解説

- | | |
|------------------|--------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量 | 3 褐色 ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 ローム小ブロック少量 | |

炉 2か所。炉 1は中央部西寄り、炉 2は中央部南西寄りに設けられている。どちらも楕円形を呈し、炉 1は長径66cm, 短径58cm, 炉 2は長径56cm, 短径42cmで、床面を8cm程度掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け、赤変硬化している。覆土は4層からなる。

炉土層解説

- | | |
|-----------------------|----------------------------|
| 1 暗赤褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子少量 | 3 赤褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 赤褐色 焼土中ブロック・炭化粒子少量 | 4 暗赤褐色 焼土粒子中量・焼土粒子少量 |

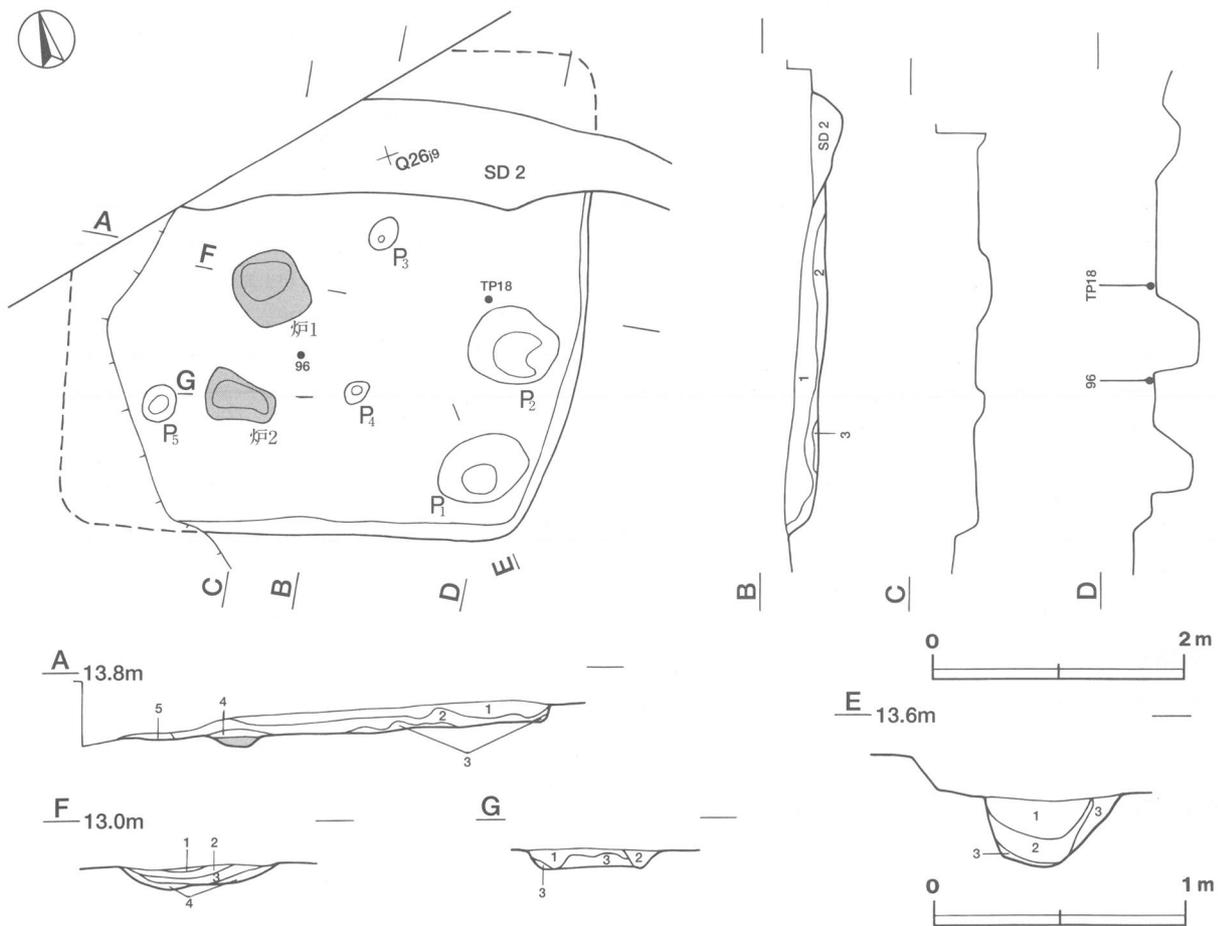
覆土 5層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土小ブロック少量, ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | 5 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 ローム小ブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片120点(高坏2, 器台1, 壺7, 甕110)が、主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。

所見 確認された2か所の炉の中で、中央部西寄りに位置する炉 1が規模も大きく、貯蔵穴と考えられるP 1との位置関係から、主炉と考えられる。時期は、出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第44図 第48号住居跡実測図



第45図 第48号住居跡出土遺物実測図

第48号住居跡出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
96	土師器	高坏	[16.6]	(3.5)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	内・外面ナデ。	床面	25%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP18	土師器	壺	-	(5.1)	-	長石・雲母	橙	普通	単口縁部外面ハケ目、ナデ、沈線をもつ棒状浮文。	床面	5%

第49号住居跡（第46図）

位置 調査区の北西部，Q26j6区。標高13.5mの緩斜面部に位置する。

重複関係 古墳時代前期の第50号住居跡に掘り込まれている。北側及び西側は斜面部で削平されている。

規模と形状 確認した長軸5.1mから，1辺が5m程度の方角と推定される。壁は高さ5～18cmで，確認した範囲では外傾して立ち上がる。主軸方向はN-44°-Wである。

床 第50号住居跡の床面と重複しているため，詳細は不明である。壁際は軟弱である。

ピット 確認した範囲にはない。

炉 中央部に設けられている。長径59cm，短径37cmで，床面を7cm程度掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け，赤変硬化している。覆土は2層からなる。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック多量，炭化粒子少量
- 2 赤褐色 焼土小ブロック中量，炭化粒子少量

覆土 5層からなる。第50号住居跡に掘り込まれ，覆土の大半が削平されているため，堆積状況は不明である。

土層解説

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量，炭化物微量 | 4 暗褐色 ローム小ブロック少量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量 | 5 褐色 ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量 | |

遺物出土状況 土師器片15点（埴1，壺1，甕13）が，覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。いずれも小破片である。

所見 時期は，出土遺物や重複関係から4世紀後半と考えられる。

第50号住居跡（第46・47図）

位置 調査区の北西部，Q26j6区。標高13.5mの緩斜面部に位置する。

重複関係 古墳時代前期の第49号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.1m，短軸3.2mの長方形である。壁は高さ4～20cmで外傾して立ち上がる。主軸方向はN-14°-Eである。

床 はほぼ平坦であるが，南東部はやや凹凸が見られる。全体的に軟弱である。

ピット 7か所。すべて性格は不明である。深さはP1が22cm，P2が20cm，P3が18cm，P4が13cm，P5が20cm，P6が20cm，P7が14cmである。

炉 中央部北寄りに設けられている。長径44cm，短径31cmで，床面を4cm程度掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け，赤変硬化している。覆土は単一層である。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック多量，炭化粒子少量

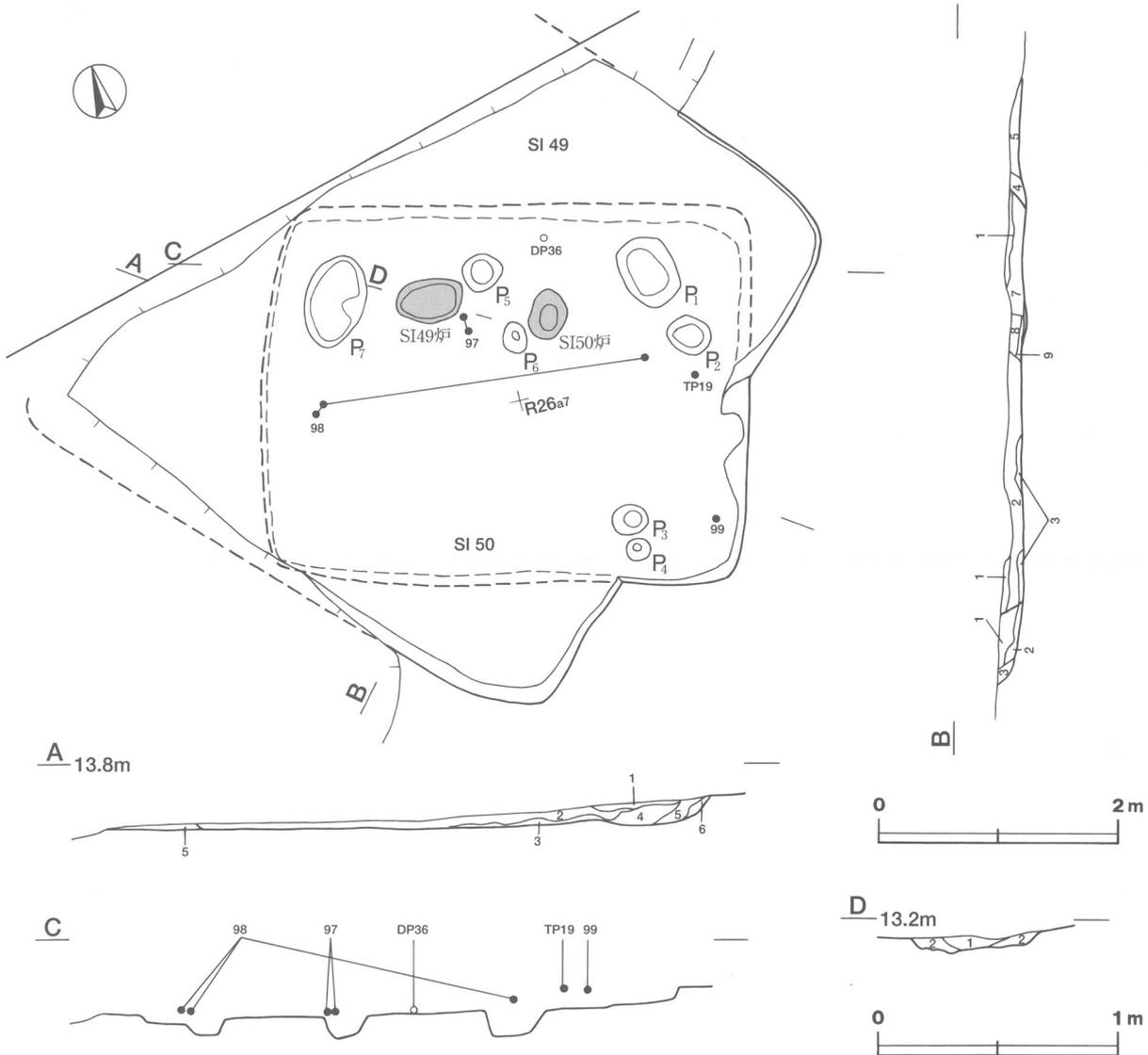
覆土 9層からなる。層厚20cmと薄いが，周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。

土層解説

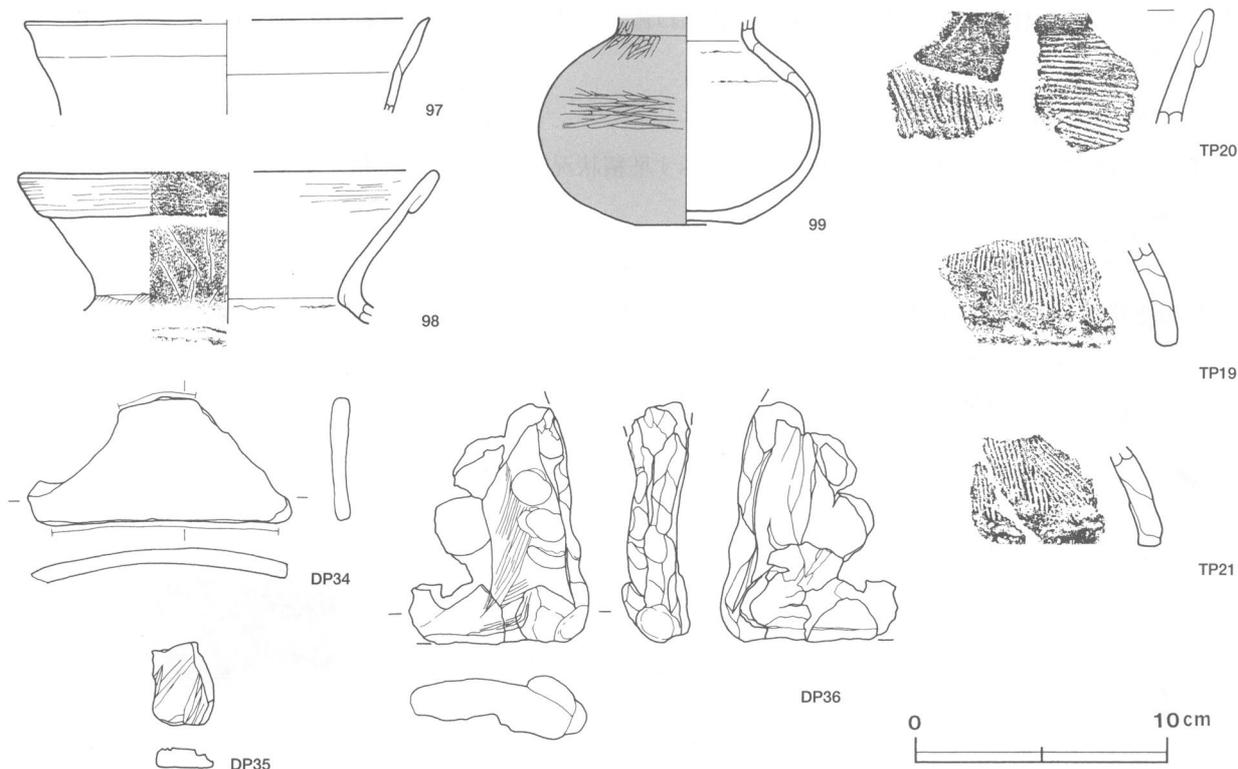
- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量，炭化物微量 | 6 褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム小ブロック少量，炭化粒子微量 | 7 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量 | 8 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量 | 9 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量 |
| 5 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片274点（高坏7，碗1，壺36，甕230），凝灰岩製砥石1点，土師器片転用砥1点，不明土製品10点が，主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。これらの他に，混入したとみられる縄文土器片1点，安山岩製磨石1点が出土している。

所見 時期は，出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第46図 第49・50号住居跡実測図



第47図 第50号住居跡出土遺物実測図

第50号住居跡出土遺物観察表 (第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
97	土師器	椀	[16]	(3.7)	-	石英・長石	橙	普通	内・外面ナデ。	床面	10%
98	土師器	壺	[16]	(6)	-	石英・長石	橙	普通	口縁～頸部横ナデ, ハケ目。	下層	5% P L27
99	土師器	埴	-	(8.2)	3.2	石英・長石	赤褐	普通	体部外面磨き, 赤彩。	中層	80% P L23

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP19	土師器	粗製器台	-	(4.1)	-	石英・雲母	明赤褐	普通	台部外面ハケ目, 下端横ナデ, 内面ナデ。	中層	5%
TP20	土師器	粗製器台	-	(3.9)	-	石英・雲母	にぶい褐	普通	台部外面ハケ目, 下端横ナデ, 内面ナデ。	下層	5%
TP21	土師器	壺	-	(4.2)	-	石英・雲母	赤橙	普通	折り返し口縁部外面ナデ, 頸部外面, 内面ハケ目。	下層	5%

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
DP34	転用砥	5	10.4	0.5	32.1	2側縁使用。	下層	P L30 壺
DP35	転用砥	3.3	2.5	0.7	6.9	片面にV字状の切込, 擦痕多数あり。	下層	P L29 甕
DP36	土製品	(9.5)	(7)	(2.3)	113.4	指頭痕, ハケ目調整あり, 欠損。	下層	P L29

第51号住居跡 (第48図)

位置 調査区の北西部, R26a5区。標高13.2mの緩斜面部に位置する。

確認状況 北側は斜面部で削平されている。

規模と形状 確認した長軸3.15mから, 1辺が3m程度の方角と推定される。壁は高さ8~10cmで, 確認した範囲では外傾して立ち上がる。

床 確認した範囲はほぼ平坦である。床面は全体的に軟弱である。

ピット 2か所。性格は不明である。P1は出入口施設に伴うピットの可能性が考えられる。深さはP1が23cm, P2が31cmである。

炉 確認した範囲にはない。

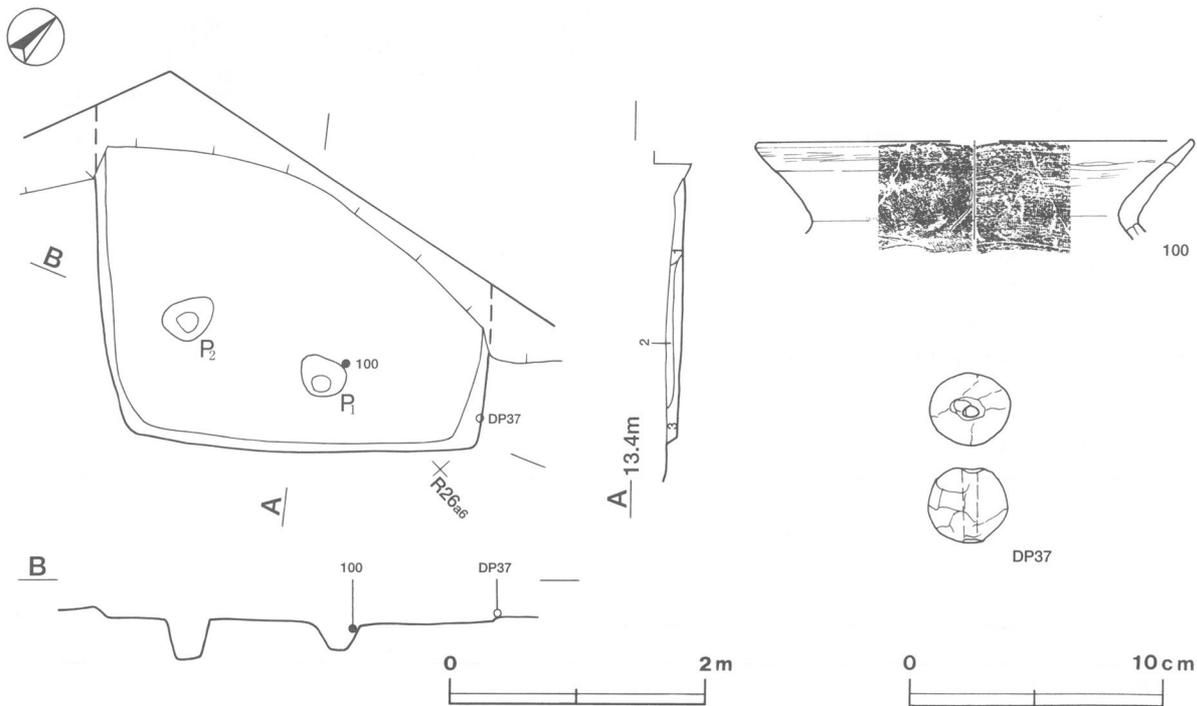
覆土 3層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック多量

遺物出土状況 土師器片49点(埴6, 壺2, 甕41), 球状土錘1点が, 主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。これらの他に, 混入したとみられる縄文土器片1点が出土している。

所見 時期は, 出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第48図 第59号住居跡・出土遺物実測図

第51号住居跡出土遺物観察表 (第48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
100	土師器	甕	[17.2]	(3.9)	-	長石	灰褐	普通	内・外面横ナデ。	床面	5%

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
DP37	球状土錘	3.2	3	0.6	25	球体, 外面ナデ。	床面	P L 30

第52号住居跡 (第49・50図)

位置 調査区の北西部, R26b4区。標高13.7mの緩斜面部に位置する。

確認状況 西側の大半が調査区域外に位置する。

規模と形状 規模及び平面形は不明である。壁は高さ36~70cmで, 確認した範囲では外傾して立ち上がる。

床 確認した範囲はほぼ平坦である。床面は壁際20~62cmの範囲が軟弱である。確認した範囲では壁に沿って壁溝が巡っている。断面形はU字状を呈し, 上幅は20~28cm, 深さは底面から8~16cmである。

ピット 確認した範囲にはない。

炉 確認した範囲にはない。

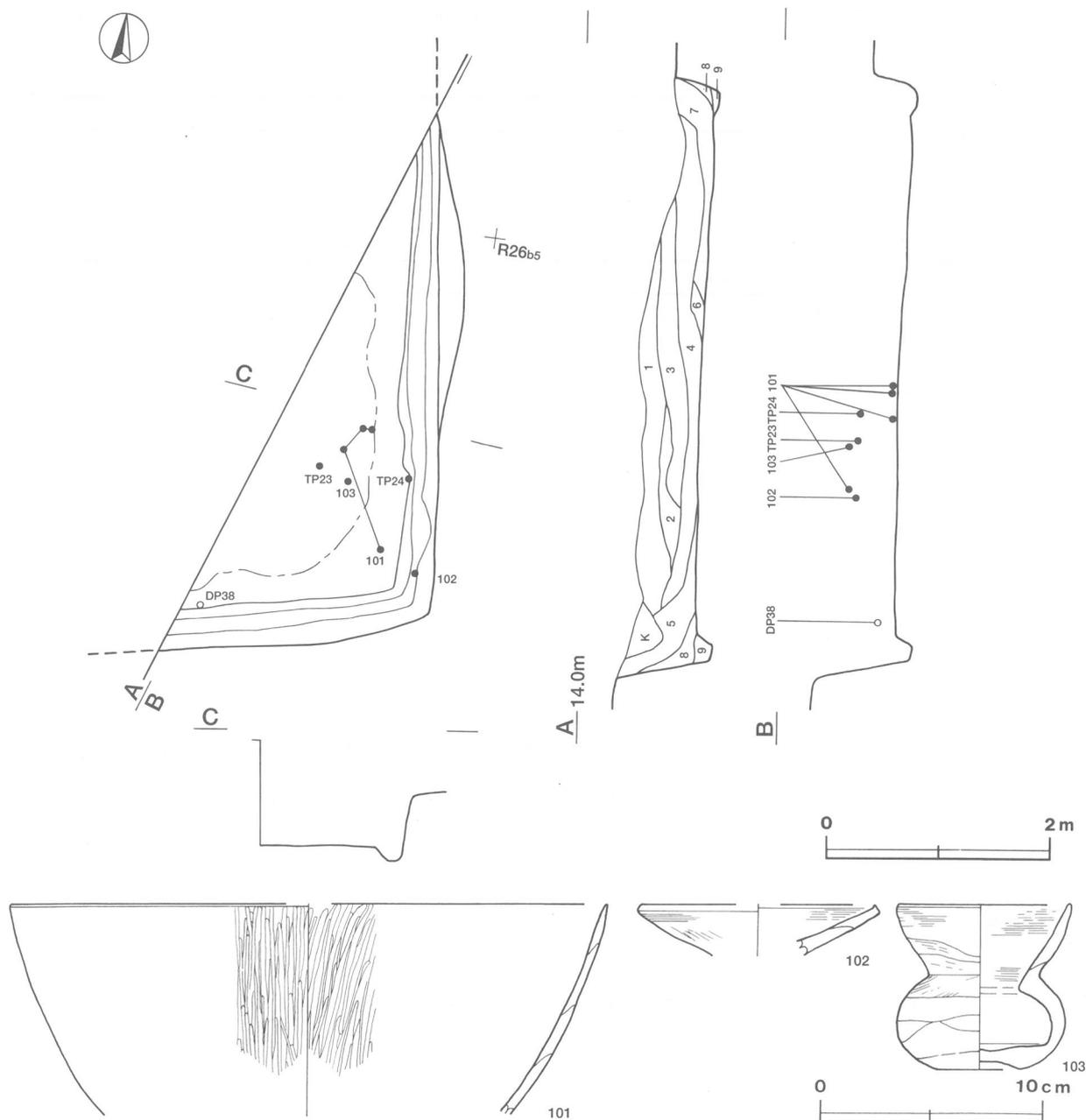
覆土 9層からなる。覆土下層の第4～6層には焼土ブロックや炭化物が多く含まれており、人為堆積の可能性が高い。それらより上層は周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

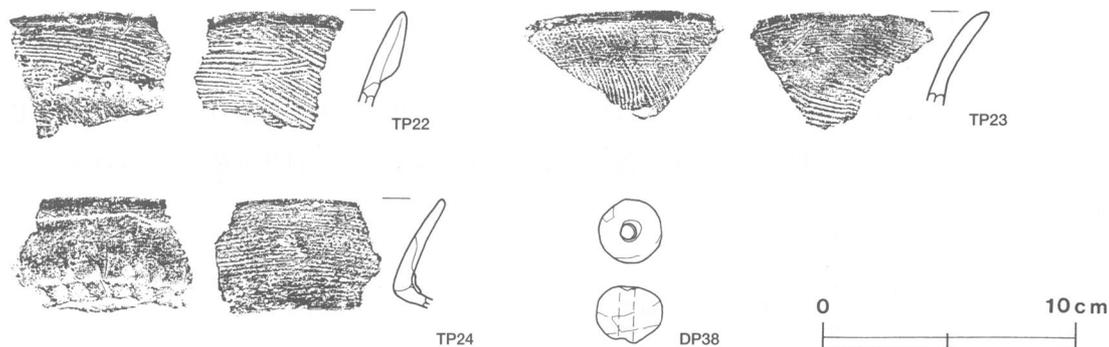
- | | | | |
|--------|---------------------------|--------|---------------------|
| 1 褐色 | ローム小ブロック少量 | 6 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化物中量, ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム小ブロック中量 | 7 暗褐色 | ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム中ブロック少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土小ブロック少量, ローム粒子・炭化物微量 | 9 褐色 | ローム粒子中量 |
| 5 赤褐色 | ローム小ブロック・焼土小ブロック少量, 炭化材微量 | | |

遺物出土状況 土師器片164点 (高坏2, 埴9, 壺13, 甕140), 球状土錘1点, 不明土製品1点, 礫2点が, 主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。

所見 時期は, 出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第49図 第52号住居跡・出土遺物実測図



第50図 第52号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡出土遺物観察表 (第49・50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
101	土師器	高坏	[26.8]	(9.5)	-	長石	赤褐	普通	内・外面磨き, 赤彩。	中~下層	10%
102	土師器	器台	[10.5]	(2.3)	-	長石	橙	普通	器受部外面ハケ目, 横ナデ, 内面横ナデ。	中層	5%
103	土師器	埴	7.7	7.5	3.6	石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り, 口縁部横ナデ。	中層	完形 P L 23

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP22	土師器	壺	-	(3.9)	-	石英	橙	普通	折り返し口縁部外面, 口縁部内面ハケ目。	中層	5%
TP23	土師器	甕	-	(4)	-	石英・長石・雲母	黒褐	普通	口縁部ハケ目, 端部横ナデ。	中層	5%
TP24	土師器	甕	-	(4)	-	石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面ナデ, 内面ハケ目, 頸部押捺を加えた粘土細附。	中層	5%

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
DP38	球状土錘	2.5	2.1	0.5	11.9	球体, 外面ナデ。	下層	P L 30

第54号住居跡 (第51・52図)

位置 調査区の北部, R27c2区。標高15.5mの斜面部に位置する。

重複関係 古墳時代前期の第38・40号住居跡に掘り込まれている。北側は斜面部で削平されている。また立木の根によって3か所が攪乱されている。

規模と形状 確認した長軸4.5mから, 一辺4.5m程度の方形と推定される。壁は高さ16~28cmで, 確認した範囲では外傾して立ち上がる。

床 第38号住居跡の床面と重複しているため, 詳細は不明である。壁際は軟弱である。東壁及び南壁に沿って壁溝が巡っている。断面形はU字状を呈し, 上幅は8~22cm, 深さは底面から4~8cmである。

ピット 確認した範囲に2か所。P1は南コーナー部に位置するため, 貯蔵穴と考えられる。覆土は2層からなる。P2は性格不明である。深さはP1が16cm, P2が17cmである。

P1土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量

炉 確認した範囲にはない。本跡を掘り込んでいる第38号住居跡の炉2が, 本跡に伴う炉の可能性も考えられる。また, 削平されている北側に存在した可能性も考えられる。

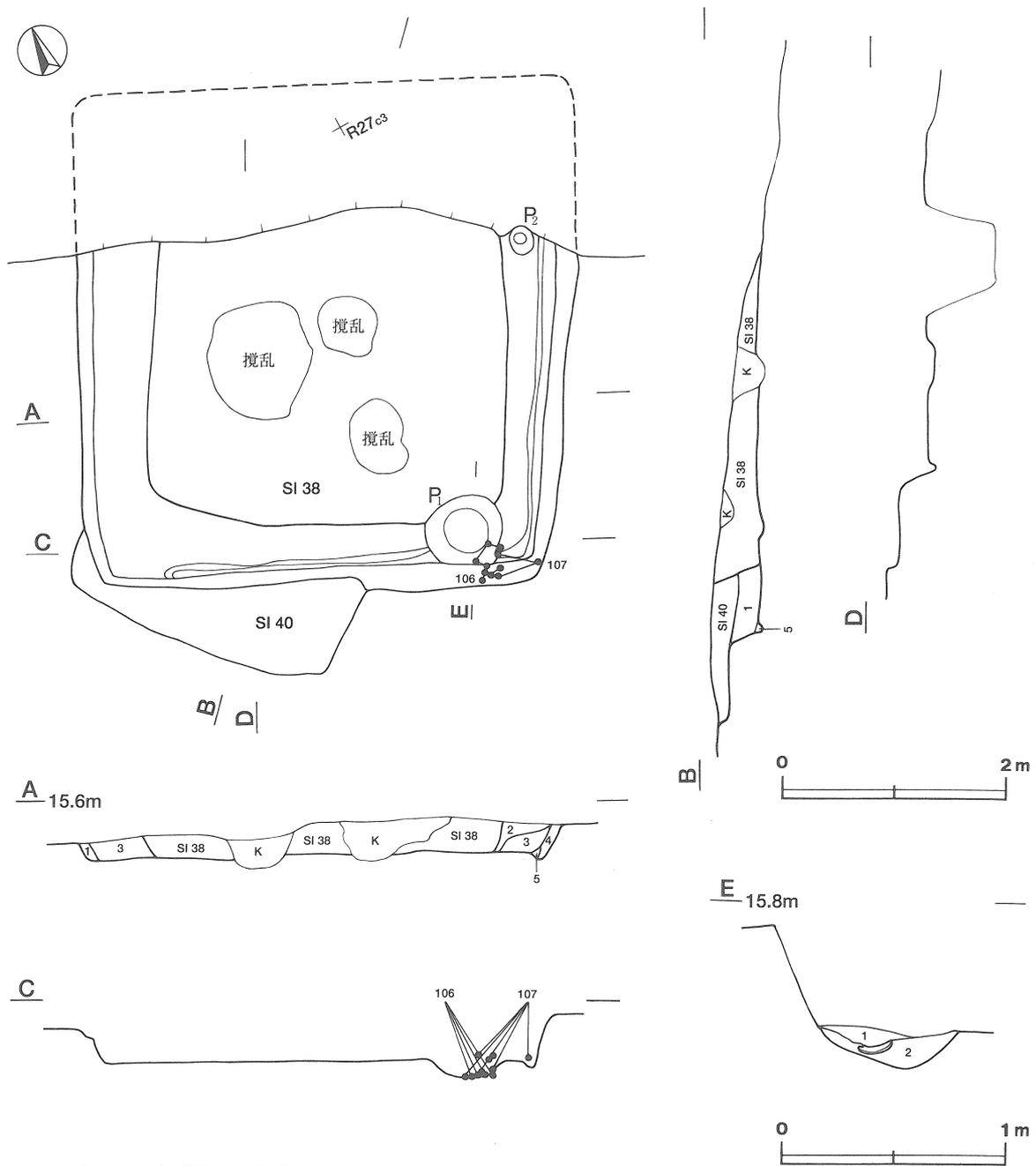
覆土 5層からなる。第38号住居跡に掘り込まれ, 覆土の大半が削平されているため, 堆積状況は不明である。

土層解説

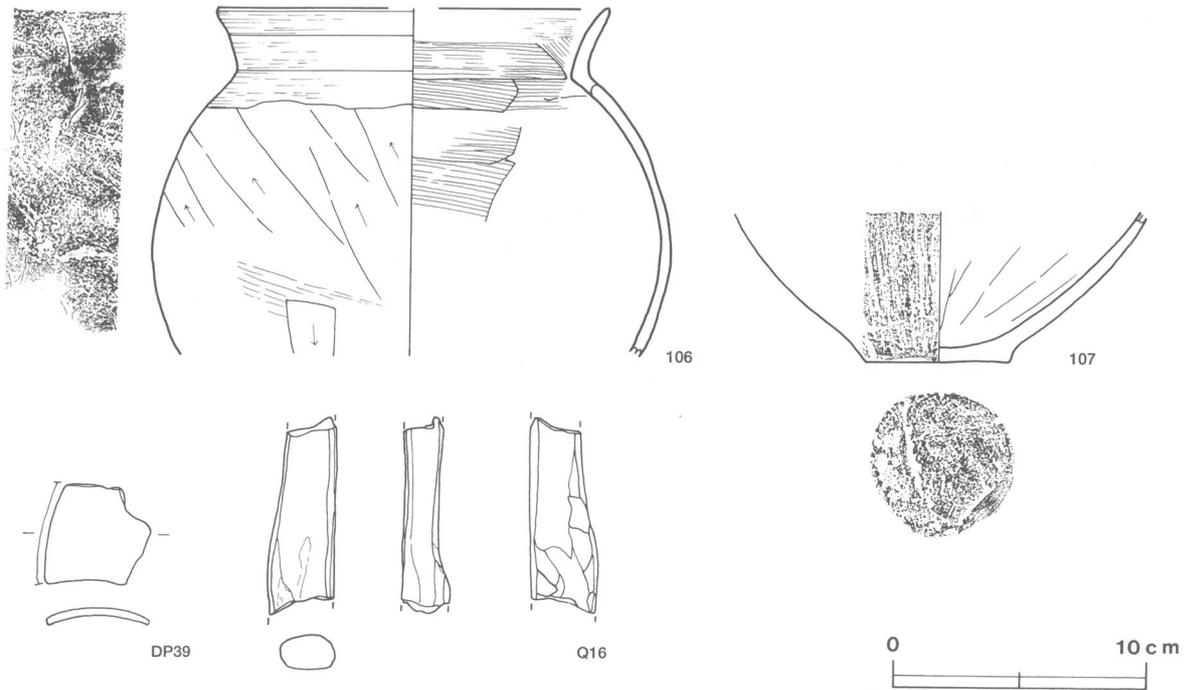
- | | | | |
|-------|-------------------------|------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム中ブロック少量 | 5 褐色 | ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム大ブロック少量, 焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片121点 (高坏2, 埴3, 椀1, 壺7, 甕108), 凝灰岩製砥石1点, 土師器片転用砥1点, 礫2点が, 主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。特に, 貯蔵穴と考えられるP1の覆土中層から, 土師器甕の大形破片がまとまって出土している。これらの他に, 混入したとみられる縄文土器片2点が出土している。

所見 時期は, 出土遺物や重複関係から4世紀後半と考えられる。



第51図 第54号住居跡実測図



第52図 第54号住居跡出土遺物実測図

第54住居跡出土遺物観察表（第52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
106	土師器	甕	[15.2]	(13.7)	-	石英・長石	灰褐	普通	口縁外面横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ハケ目、横ナデ。	床面	60% P L 26
107	土師器	甕	-	(6)	5.4	石英・長石	赤褐	普通	体部外面、底部ヘラ削り、体部内面ヘラナデ。	下層	15%

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
DP39	転用砥	4	4.1	0.3	6	1側縁使用。	下層	P L 29 埴

番号	種別	計測値				石質	特徴	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q16	玉砥石	(7.8)	2.7	1.9	(51)	石英片岩	内磨き板砥石、断面楕円形、全面使用、両端折損あり。	床面	P L 31

第55号住居跡（第53図）

位置 調査区の西部，R26f6区。標高15.9mの斜面部に位置する。

確認状況 北側は斜面部で削平されている。

規模と形状 推定長軸3.4m，短軸3.32mで方形と推定される。壁は高さ9～18cmで，確認した範囲では外傾して立ち上がる。主軸方向はN-13°-Wである。

床 確認した範囲はほぼ平坦であるが，北側に向かって緩やかに傾斜している。高低差は最大で15cmである。床面は全体的に軟弱である。

ピット 4か所。P1～4は，不規則な配置ながら支柱穴と考えられる。深さはP1が44cm，P2が23cm，P3が37cm，P4が16cmと，ばらつきが見られる。

炉 中央部北寄りに設けられている。長径84cm，短径66cmで，床面を8cm程度掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受け，赤変硬化している。覆土は極めて薄く，焼土ブロックや炭化物を多く含んでいる暗赤褐色の

単一層である。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土中ブロック多量, 炭化物微量

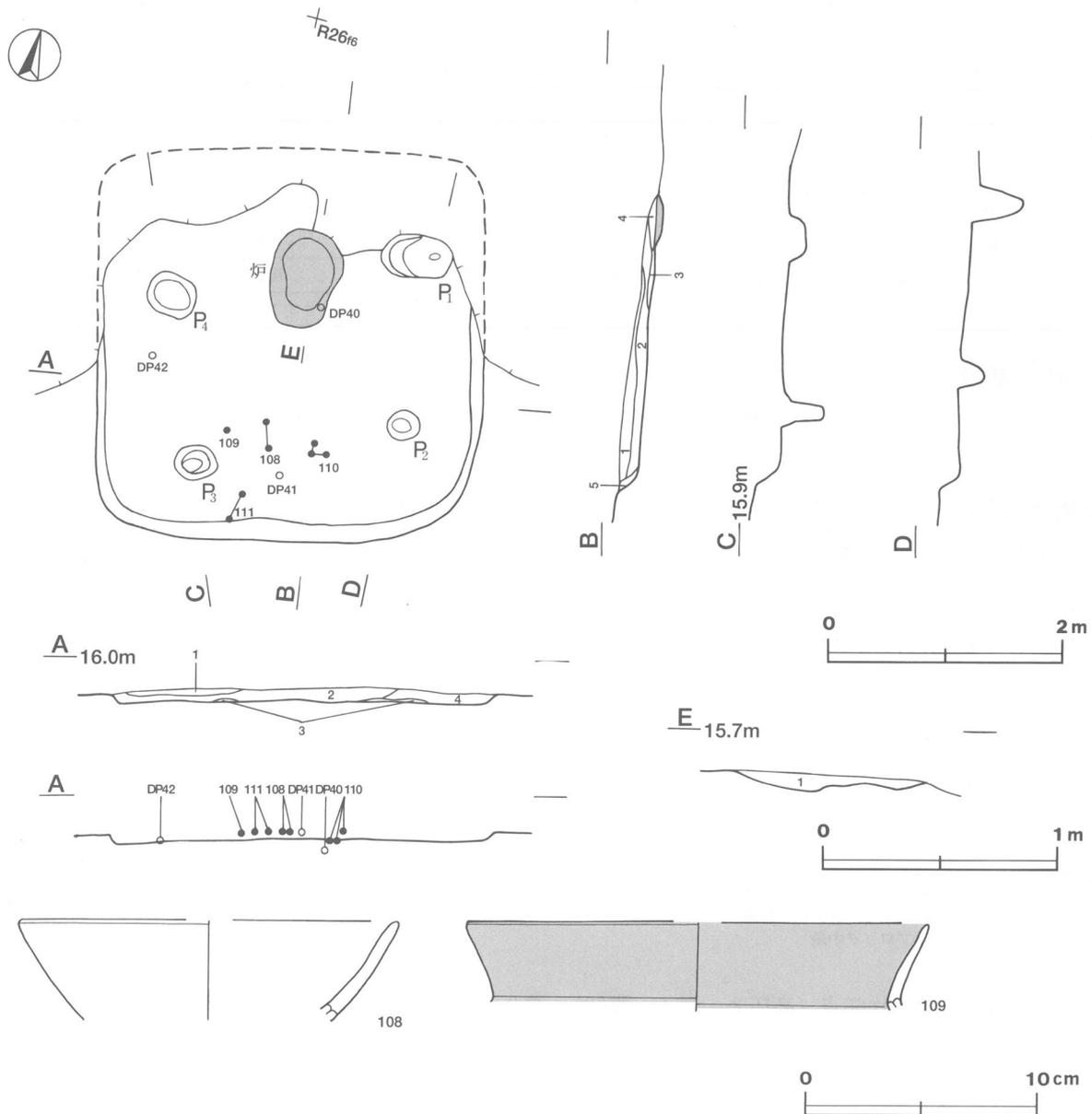
覆土 5層からなる。層厚が18cmと薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

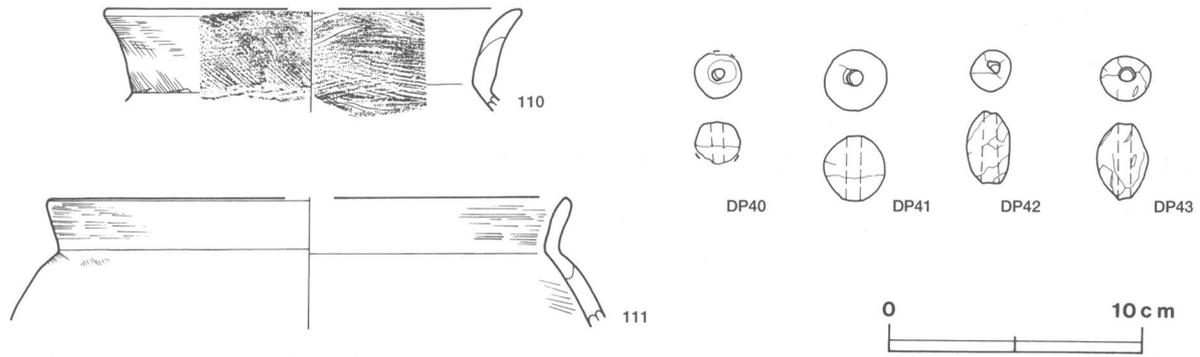
- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|--------------------|
| 1 褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ローム小ブロック中量 |
| 3 褐色 | ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片227点（高坏5，器台1，埴1，壺8，甕212），球状土錘4点，礫3点が，床面や覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。平面的にはP2とP3に挟まれた範囲に遺物の集中が見られる。一方，4点の球状土錘はまばらに出土している。これらの他に，混入したとみられる縄文土器片14点が出土している。

所見 時期は，出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第53図 第55号住居跡・出土遺物実測図



第54図 第55号住居跡出土遺物実測図

第55号住居跡出土遺物観察表 (第53・54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
108	土師器	高坏	[16]	(4.3)	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	内・外面ナデ。	下層	10%
109	土師器	甕	[19.6]	(3.8)	-	石英・長石	橙	普通	内・外面ナデ，赤彩。	下層	5%
110	土師器	甕	[15.2]	(4)	-	石英・長石	橙	普通	内・外面ハケ目，横ナデ。	床面	5%
111	土師器	甕	[20.2]	(4.5)	-	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ，体部ハケ目，ナデ。	下層	5%

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
DP40	球状土鍾	1.9	1.7	0.6	4.9	球体，外面ナデ。	床面	P L 30
DP41	球状土鍾	2.5	2.6	0.6	14.7	球体，外面ナデ。	下層	P L 30
DP42	管状土鍾	1.6	2.9	0.5	7.6	管状，外面ナデ，棒状工具痕。	床面	P L 30
DP43	管状土鍾	2	3	0.6	9.4	管状，外面ナデ，棒状工具痕。	下層	P L 30

第56号住居跡 (第55図)

位置 調査区の西部，R26e8区。標高15.7mの斜面部に位置する。北側で第46号住居跡，北東側で第45号住居跡と隣接している。

重複関係 時期不明の第1号溝に掘り込まれている。北側は斜面部で削平されている。

規模と形状 確認した長軸4.14mから，1辺4m程度の方形と推定される。壁は高さ6～14cmで，確認した範囲ではほぼ直立する。

床 確認した範囲はほぼ平坦であるが，北側に向かって緩やかに傾斜している。床面は全体的に軟弱である。

ピット 確認した範囲にはない。

炉 確認した範囲にはない。

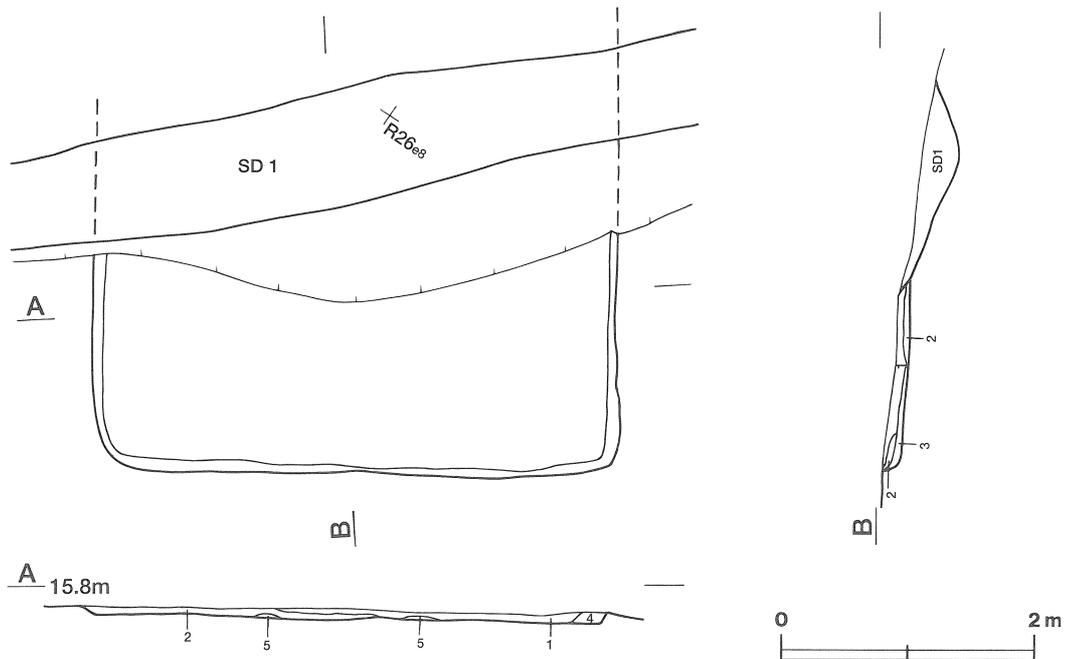
覆土 5層からなる。層厚が14cmと薄いため，堆積状況は不明である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量，炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム小ブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師器片66点 (高坏2，壺4，甕60)，礫3点が，床面や覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。これらの他に，混入したとみられる縄文土器片8点が出土している。

所見 大部分が削平を受けて出土遺物もわずかなため，詳細は明らかでないが，時期は出土した土師器片の様相などから4世紀後半と考えられる。



第55図 第56号住居跡実測図

第57号住居跡 (第56図)

位置 調査区の中央部，R26f9区。標高16.3mの斜面部に位置する。北東側で第44号住居跡と隣接している。

確認状況 斜面部に位置し，掘り込みも浅いため，壁は完全に削平されている。さらに覆土や床なども攪乱を多く受けており，遺存状況は極めて不良である。

規模と形状 推定長軸3.7m，推定短軸3.3mで長方形と推定される。主軸方向はN-13°-Wである。

床 ほぼ平坦であるが，北側に向かって緩やかに傾斜している。高低差は最大で14cmである。床面は全体的に軟弱で，3か所の炉の周囲がやや踏み固められている。

ピット 1か所。P1は位置や規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。底面はほぼ平坦で，覆土は2層からなる。深さは14cmである。

P1土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量
- 2 褐色 ローム小ブロック中量

炉 3か所。炉1は中央部西寄り，炉2・3は中央部北西寄りに設けられている。いずれも楕円形と推定され，炉1は長径56cm，確認した短径22cm，炉2は確認した長径66cm，短径32cm，炉3は長径30cm，短径25cmで，床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化し，炉床は床面とほぼ同じ高さである。覆土は極めて薄く，焼土ブロックや炭化物を多く含んでいる赤褐色の単一層である。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土小ブロック中量，炭化粒子少量

覆土 単一層である。層厚が10cmと薄いため，堆積状況は不明である。

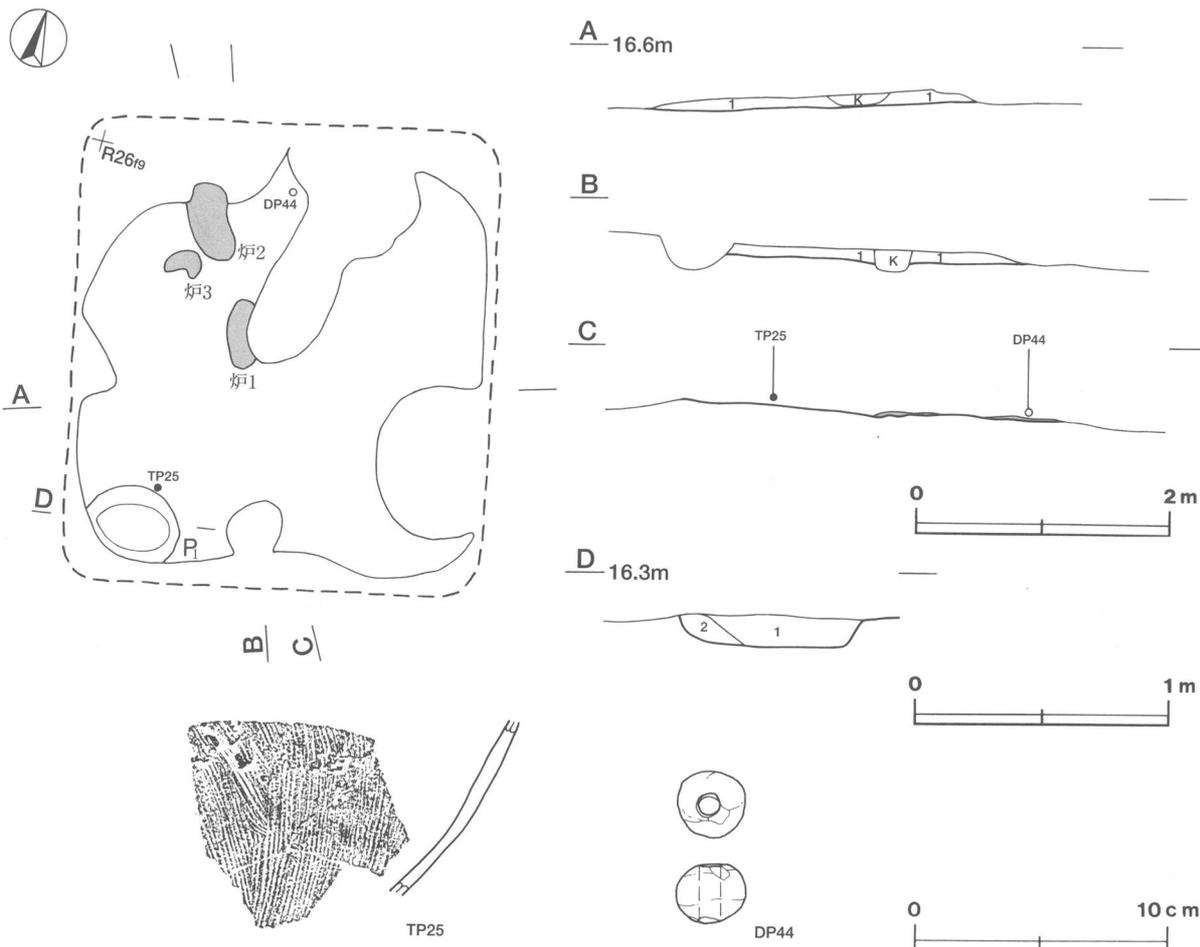
土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片（高坏1，甕96）97点，球状土錘1点，礫2点が，主に覆土下層から廃棄されたよう

な状態で出土している。これらの他に、混入したとみられる縄文土器片 3 点が出土している。

所見 確認された 3 か所の炉の中で中央部西寄りに位置する炉 1 が、貯蔵穴と考えられる P 1 との位置関係から、主炉と考えられる。時期は、出土遺物などから 4 世紀後半と考えられる。



第56図 第57号住居跡・出土遺物実測図

第57号住居跡出土遺物観察表 (第56図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP25	土師器	甕	-	(6.9)	-	石英・雲母	橙	普通	外面ハケ目, 内面ナデ。	床面	5%

番号	種別	計測値				特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
DP44	球状土錘	2.7	2.3	0.8	14.1	球体, 外面ナデ。	下層	P L 30

第58号住居跡 (第57図)

位置 調査区の中央部, R27e2区。標高16.4mの斜面部に位置する。

確認状況 斜面部に位置し、掘り込みも浅いため、北壁及び東壁は完全に削平されている。さらに覆土や床なども攪乱を多く受けており、遺存状況は極めて不良である。

規模と形状 推定長軸3.4m, 推定短軸2.95mで長方形と推定される。主軸方向は不明である。壁は高さ10~15cmで、確認した範囲では外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦であるが、北側に向かって緩やかに傾斜している。中央部から南側にかけて、踏み固めら

れている。

ピット 1か所。中央部西寄りに位置し、深さは10cmで、性格は不明である。

炉 確認した範囲にはない。

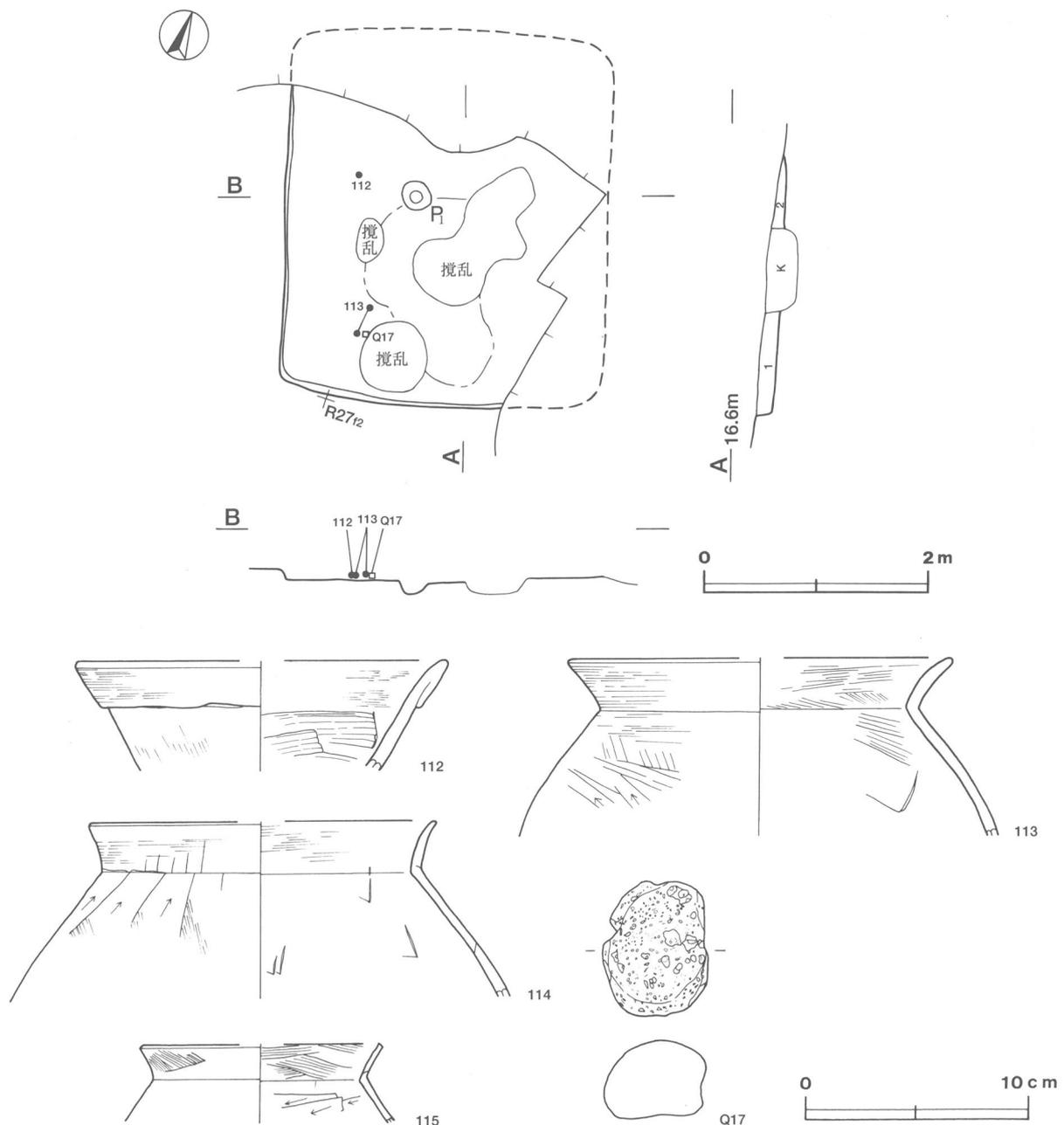
覆土 2層からなる。層厚が15cmと薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片128点（高坏5，壺5，甕118），軽石製品1点，礫4点が，主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。また本跡を掘り込んでいる攪乱坑の中から，ミニチュア土器1点が出土しており，本来，本跡の覆土中に存在した遺物であった可能性が高い。これらの他に，混入したとみられる縄文土器片1点が出土している。

所見 時期は，出土遺物などから4世紀後半と考えられる。



第57図 第58号住居跡実測図

第58号住居跡出土物観察表 (第57図)

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
112	土師器	壺	[16.7]	(4.9)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部横ナデ, 頸部外面ナデ, 内面ハケ目。	床面	5%
113	土師器	甕	[17.2]	(8.1)	-	雲母・長石	灰黄褐	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ハケ目, ヘラ削り, 内面ヘラナデ。	下層	15%
114	土師器	甕	[15.4]	(8)	-	雲母	黄橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ハケ目, ヘラ削り, 内面ヘラナデ。	下層	10%
115	土師器	甕	[10.5]	(3.6)	-	雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部ハケ目, ナデ, 体部外面ナデ, 内面ヘラ削り。	下層	10%

番号	種別	計測値				石質	特徴	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q17	軽石製品	6.1	4.7	3.4	15.5	軽石	用途不明, 表面摩滅, 砥石・磨石の可能性あり。	床面	P L31

(2) 竪穴跡

第4号竪穴跡 (第58図)

位置 調査区の北西部, R26b8区。標高14.5mの斜面部に位置する。

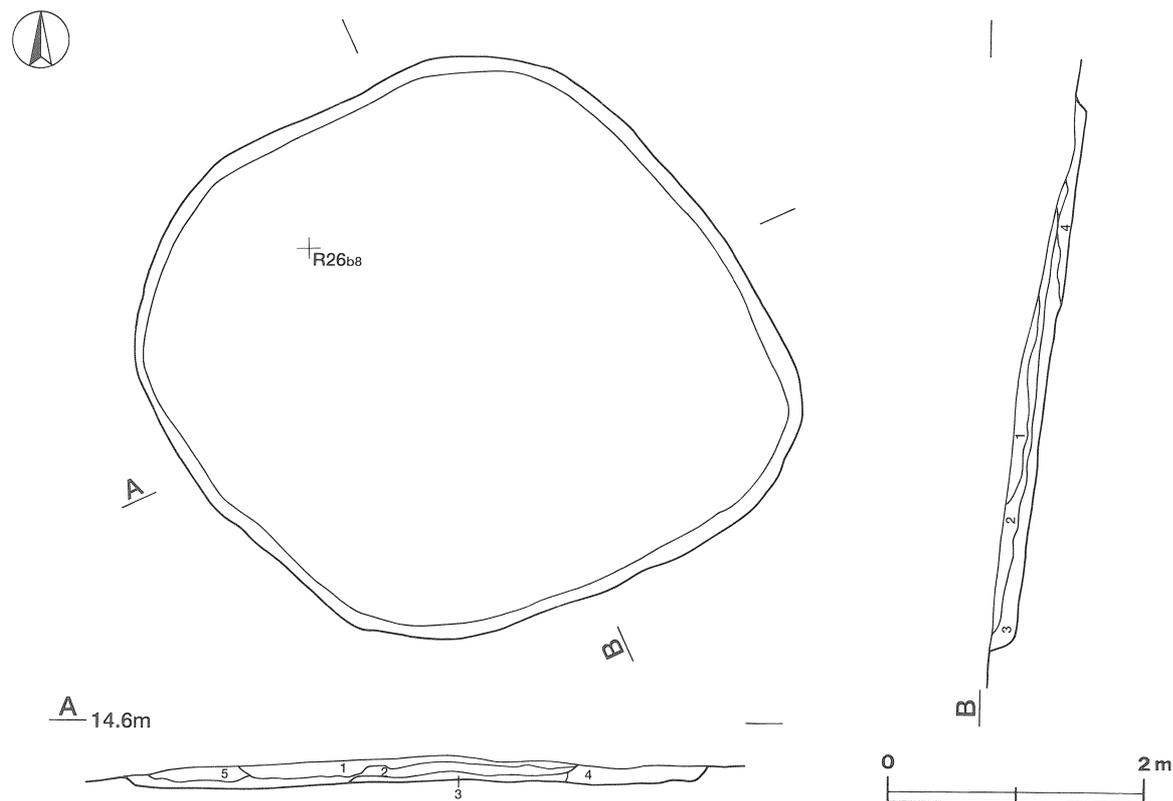
確認状況 北側は斜面部で削平されているため, 掘り込みが浅い。

規模と形状 長径5.3m, 短径4.65mの楕円形である。壁は高さ8~20cmで外傾して立ち上がる。底面はやや凹凸が見られ, 北側に向かってかなり傾斜している。高低差は最大で50cmである。特に踏み固められている部分はない。長径方向はN-75°-Wである。

覆土 5層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------|-------|------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック少量 | 4 褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 2 灰褐色 | ローム粒子中量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量 | | |



第58図 第4号竪穴跡実測図

遺物出土状況 土師器片42点（高坏2，甕40），礫1点が，主に覆土下層から出土している。

所見 出土遺物は少量で，大半が小破片である。時期を決定することは難しいが，古墳時代前期と考えられる。

3 平安時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した平安時代の遺構は，竪穴住居跡1軒である。平成8年度の調査では該期の遺構は確認されていない。また今回の調査で出土した該期の遺物は，わずかに土師器坏2点と須恵器坏1点である。よって，該期の集落跡は台地のより西方に存在している可能性が考えられる。以下，第53号竪穴住居跡の特徴と出土した遺物について，記述していくことにする。

(1) 竪穴住居跡

第53号住居跡（第59図）

位置 調査区の西部，R26e3区。標高15mの斜面部に位置する。

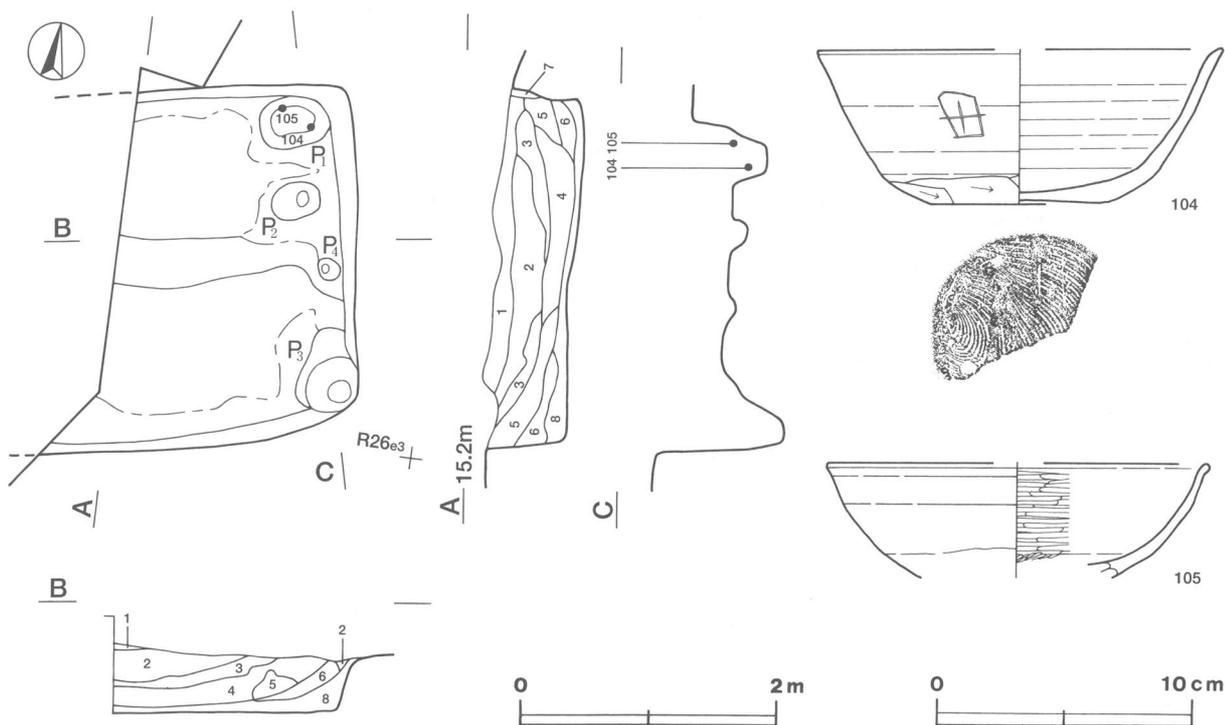
確認状況 西半分が調査区域外に位置する。

規模と形状 確認した長軸2.84m，短軸2.6mで，平面形は隅丸長方形ないし方形と推定される。長軸方向はN-9°-W，壁の高さは42~74cmで，確認した範囲で直立する。

床 確認した範囲では，北側と南側で最大11cmの段差を有する。それぞれ平坦で，高位の南側から低位の北側に至るなだらかな傾斜部を含め，よく踏み固められているが，壁際は軟弱である。

ピット 確認した範囲では，4か所。P1は深さ23cmで北東コーナーに，P3は深さ46cmで南東コーナーに位置する。位置及び規模などから貯蔵穴の可能性が考えられる。P2・4は性格不明で，深さはそれぞれ31cm，6cmである。

炉・竈 確認した範囲には，認められない。



第59図 第53号住居跡・出土遺物実測図

覆土 8層からなる。全体的には、周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム大ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック少量 | 6 黒褐色 | ローム小ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ローム中ブロック少量 | 7 黒褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ローム中ブロック中量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器坏2点が、P1の覆土上層から出土している。この他に、混入と思われる古墳時代前期から後期の土師器片200点、縄文土器片15点、磨石1点、剥片6点が、覆土中層から下層にかけて出土している。第59図104・105は土師器坏で、2点ともP1の覆土上層から出土している。1は底部に回転糸切り痕、体部外面には「田」の刻書を有する。

所見 時期は、P1の覆土上層から出土した第59図104・105などから、10世紀前～中葉と推定される。一方、該期の遺物は覆土中に存在せず、P1から出土した2点のみであることから、P1は本跡を掘り込んでいるピットの可能性も考えられる。しかし、P1は床面で確認され、床の硬化面との間に一定の空間が存在し、北東コーナーに沿って掘り込まれているため、本跡に伴うピットと考えたい。

第53号住居跡出土遺物観察表（第59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
104	土師器	坏	[15.6]	6.1	6.8	石英・赤粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面磨き、刻書「田」。	P1中層	25% PL23
105	土師器	坏	[14.8]	(4.5)	-	雲母・赤粒子	橙	普通	ロクロ成形、内面磨き。	P1上層	10%

4 時期不明の遺構と遺物

今回の調査で時期不明の土坑19基、溝3条を確認した。土坑の多くは、台地縁辺部から斜面部にかけての標高15～17mに位置する。平面形は楕円形を主体とする。性格は不明で、出土遺物はわずかな縄文土器や土師器の小破片のため、時期を決定することが困難である。溝は斜面部及び緩斜面部で3条確認した。その内の2条は古墳時代前期の竪穴住居跡を掘り込んでいる。これらの溝の性格は、形態や規模から区画溝や排水溝の可能性が考えられる。出土遺物は土坑と同様に少なく、時期を決定することは困難である。したがって、時期不明の遺構として一括し、それぞれの遺構の特徴と出土した主な遺物について、記述していくことにする。

(1) 土坑

第1号土坑（第60図）

位置 調査区の北部、R27a2区。標高14mの緩斜面部に位置する。

確認状況 北東部が調査区域外に位置する。南東側は立木の根により、壁の上位を破壊されている。

規模と形状 長径3.84m、短径3.5mの不整楕円形である。長径方向はN-29°-W、確認面からの深さは1.01mで、壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆土 11層からなる。覆土中層の第4・5・7層は、ロームブロックを比較的多く含んでいるものの、全体的には締まりの軟弱な土質で、周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|------------|
| 1 暗褐色 | ローム中ブロック・黒色土小ブロック少量 | 7 褐色 | ローム中ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム中ブロック少量 | 8 黒色 | ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック中量 | 9 褐色 | ローム粒子多量 |
| 4 暗褐色 | ローム中ブロック中量 | 10 黒褐色 | ローム小ブロック中量 |
| 5 黒褐色 | ローム大ブロック中量 | 11 褐色 | ローム中ブロック少量 |
| 6 灰褐色 | ローム粒子中量 | | |

遺物出土状況 土師器片38点、縄文土器片4点が、主に覆土上層から出土している。

所見 出土遺物はすべて流れ込みによるもので、時期を決定することができない。覆土は全体的に軟弱な土質のため、近世を遡ることはないと考えられる。

第2号土坑（第60図）

位置 調査区の東部，R27f7区。標高16mの斜面部に位置する。6m北側には，東方向から埋没谷が入り込んでいる。

確認状況 北側は斜面部で削平されている。

規模と形状 長径1.32m，短径1.12mの不整楕円形である。長径方向はN-23°-W，確認面からの深さは42cmで，壁はなだらかに立ち上がる。底面は皿状を呈する。

覆土 6層からなる。第1～4層は焼土ブロック及び焼土粒子を多く含む土層であるが，炉床などは認められない。全体的に焼土ブロック及び焼土粒子を多く含んでいるため，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|---------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック少量，炭化物微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土小ブロック中量，炭化粒子少量 | 5 極暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 | ローム粒子少量，焼土小ブロック少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片64点，縄文土器片6点，礫1点が，主に覆土上層から出土している。

所見 出土遺物はすべて流れ込みによるもので，時期を決定することができない。覆土は全体的に焼土ブロック及び焼土粒子を多く含んでいるため，調査当初，縄文時代の炉穴や屋外炉の可能性も考えたが，炉床が認められないため，性格は不明である。

第3号土坑（第60図）

位置 調査区の東部，R27g6区。標高16.9mの斜面部に位置する。

確認状況 北側は斜面部で削平されている。

規模と形状 長径1.15m，短径0.94mの楕円形である。長径方向はN-45°-W，確認面からの深さは44cmで，壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆土 4層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------|-------|------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量 | 3 褐色 | ローム中ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック多量 | 4 褐灰色 | ローム小ブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片2点，縄文土器片1点が，覆土上層から出土している。

所見 出土遺物はすべて流れ込みによるもので，時期を決定することができない。性格も不明である。

第4号土坑（第60図）

位置 調査区の西部，R26f7区。時期不明の土坑が集中する標高16mの台地縁辺部に位置する。

規模と形状 長径0.9m，短径0.59mの楕円形である。長径方向はN-14°-W，確認面からの深さは18cmで，壁はなだらかに立ち上がる。底面は皿状を呈する。

覆土 2層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|------------|
| 1 褐色 | ローム小ブロック微量 |
| 2 黄褐色 | ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片3点，礫1点が，覆土上層から出土している。

所見 出土遺物はすべて流れ込みによるもので、本跡の時期を決定することができない。性格も不明である。

第5号土坑（第60図）

位置 調査区の西部，R26g6区。時期不明の土坑が集中する標高16mの台地縁辺部に位置する。

規模と形状 長径0.83m，短径0.71mの楕円形である。長径方向はN-2°-W，確認面からの深さは28cmで，壁はなだらかに立ち上がる。底面は皿状を呈する。

覆土 3層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化物微量 | 3 黄褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム小ブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片11点が，覆土上層から出土している。

所見 出土遺物はすべて流れ込みによるもので，時期を決定することができない。性格も不明である。

第6号土坑（第60図）

位置 調査区の西部，R26g9区。時期不明の土坑が集中する標高16.4mの台地縁辺部に位置する。

規模と形状 長径1.50m，短径1.1mの楕円形である。長径方向はN-9°-E，確認面からの深さは26cmで，壁はなだらかに立ち上がる。底面はやや凹凸のある皿状を呈する。

覆土 4層からなる。第1～3層は焼土ブロック及び焼土粒子を多く含む土層であるが，炉床などは認められない。全体的に焼土ブロック及び焼土粒子を多く含んでいるため，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|-------|----------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土小ブロック少量，炭化粒子少量 | 3 赤褐色 | ローム粒子中量，炭化物少量，焼土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化物微量 | 4 褐灰色 | ローム小ブロック少量 |

遺物出土状況 古銭1点，土師器片7点，縄文土器片5点が，覆土上層から出土している。

所見 出土した古銭は寛永通寶で，第2層から出土しているため，時期は近世以降と考えられる。覆土には焼土ブロック及び焼土粒子が多く含まれており，炉床の形成に至らなかった焼土跡の可能性も考えられるが，性格は不明である。

第6号土坑出土遺物観察表（第60図）

番号	銭名	計測値				鋳造年代(西暦)	出土地点	備考
		径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
M2	寛永通寶	2.8	0.7	0.8	3.8	真鍮四文銭，波銭(十一波)，明和5(1768)年～	上層	P L32

第7号土坑（第60図）

位置 調査区の西部，R26f7区。時期不明の土坑が集中する標高16mの台地縁辺部に位置する。

規模と形状 径0.5mの円形である。確認面からの深さは20cmで，壁はなだらかに立ち上がる。底面は皿状を呈する。

覆土 単一層である。

土層解説

- | | |
|------|---------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量，炭化物微量 |
|------|---------------|

所見 出土遺物がないため，時期を決定することができない。性格も不明である。

第8号土坑（第60図）

位置 調査区の西部，R27f8区。時期不明の土坑が集中する標高16mの台地縁辺部に位置する。

規模と形状 長径1.24m，短径0.81mの楕円形である。長径方向はN-29°-E，確認面からの深さは30cmで，壁はなだらかに立ち上がる。底面は皿状を呈する。

覆土 7層からなる。第6層は灰白色粘土塊である。全体的にブロック状の堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------|-------|-------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化物微量 | 5 褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | 炭化物微量 | 6 灰白色 | 灰白色粘土ブロック多量 |
| 3 明褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片5点，縄文土器片1点が，第4層から出土している。また灰白色粘土塊が廃棄されたような状況で出土している。

所見 出土遺物はすべて流れ込みによるもので，時期を決定することができない。性格も不明である。

第9号土坑（第61図）

位置 調査区の南西部，R26h3区。標高16.1mの台地縁辺部に位置する。

規模と形状 長径1.58m，短径1.24mの楕円形である。長径方向はN-9°-W，確認面からの深さは24cmで，壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆土 4層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられるが，第1層は焼土粒子を少量含む赤褐色土である。炉床の形成に至らなかった焼土跡の可能性も考えられるが，性格は不明である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|------|------------|
| 1 赤褐色 | ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量 | 4 褐色 | ローム中ブロック中量 |

所見 出土遺物がないため，時期を決定することができない。性格も不明である。

第10号土坑（第61図）

位置 調査区の北東部，R27c6区。標高15.6mの斜面部に位置する。2m北側には，東方向から埋没谷が入り込んでいる。

確認状況 北側は斜面部で削平されている。

規模と形状 径1.08mの円形である。確認面からの深さ31cmで，壁はなだらかに立ち上がる。底面は皿状を呈する。

覆土 3層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|-------|--------------|
| 1 黒褐色 | 炭化物中量，焼土粒子微量 | 3 黄褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒色 | 焼土粒子中量 | | |

所見 出土遺物がないため，時期を決定することができない。性格も不明である。

第11号土坑（第61図）

位置 調査区の西部，R26e4区。標高15mの斜面部に位置する。

規模と形状 長径1.59m，短径1.1mの不整楕円形である。長径方向はN-42°-E，確認面からの深さは22

cmで、壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆土 2層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片1点が、覆土上層から出土している。

所見 出土遺物は流れ込みによるもので、時期を決定することができない。性格も不明である。

第12号土坑（第61図）

位置 調査区の西部，R27e3区。標高16.4mの斜面部に位置する。

確認状況 第13・14号土坑と南北に並んでいる。

規模と形状 長径0.77m，短径0.6mの楕円形である。長径方向はN-60°-W，確認面からの深さは14cmで、壁はなだらかに立ち上がる。底面は皿状を呈する。

覆土 2層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

所見 出土遺物がないため、時期を決定することができない。性格も不明である。

第13号土坑（第61図）

位置 調査区の西部，R27e3区。標高16.4mの斜面部に位置する。

確認状況 第12・14号土坑と南北に並んでいる。

規模と形状 長径0.56m，短径0.44mの楕円形である。長径方向はN-84°-E，確認面からの深さは22cmで、壁はなだらかに立ち上がる。底面は皿状を呈する。

覆土 2層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム中ブロック微量

所見 出土遺物がないため、時期を決定することができない。性格も不明である。

第14号土坑（第61図）

位置 調査区の西部，R27e3区。標高16.4mの斜面部に位置する。

確認状況 第12・13号土坑と南北に並んでいる。

規模と形状 長径0.73m，短径0.58mの楕円形である。長径方向はN-30°-E，確認面からの深さは16cmで、壁はなだらかに立ち上がる。底面は皿状を呈する。

覆土 2層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム小ブロック中量

所見 出土遺物がないため、時期を決定することができない。性格も不明である。

第15号土坑（第10図）

位置 調査区の中央部，R26g9区。標高16.3mの台地縁辺部に位置する。

重複関係 北側で縄文時代早期の第2号炉穴を，東側で第43号竪穴住居跡の西壁の一部を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.46m，短径0.98mの楕円形である。長径方向はN-75°-E，確認面からの深さは25cmで，壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆土 3層からなる。ブロック状の堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量 | 3 褐色 ローム小ブロック多量 |
| 2 褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量 | |

遺物出土状況 土師器片1点，礫1点が，覆土中層から出土している。

所見 出土遺物は流れ込みによるもので，時期を決定することができない。性格も不明である。

第16号土坑（第61図）

位置 調査区の西部，R26g3区。標高15.4mの台地縁辺部に位置する。

規模と形状 長径1.19m，短径1.08mの楕円形である。長径方向はN-60°-E，確認面からの深さは42cmで，壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆土 4層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 黒褐色 ローム小ブロック微量 | 3 暗褐色 ローム小ブロック少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 4 褐色 ローム小ブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片1点が，覆土中層から出土している。

所見 出土遺物は流れ込みによるもので，時期を決定することができない。性格も不明である。

第17号土坑（第61図）

位置 調査区の西部，R26f4区。標高15.3mの台地縁辺部から斜面部にかけて位置する。

規模と形状 長径1.04m，短径0.89mの楕円形である。長径方向はN-76°-W，確認面からの深さは34cmで，壁は，南壁及び北壁で外傾し，東壁及び西壁でなだらかに立ち上がる。底面は皿状を呈する。

覆土 3層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------|--------------|
| 1 暗褐色 ローム少ブロック少量 | 3 褐色 ローム粒子多量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | |

遺物出土状況 土師器片5点，縄文土器片4点が，覆土上層から出土している。

所見 出土遺物は流れ込みによるもので，時期を決定することができない。性格も不明である。

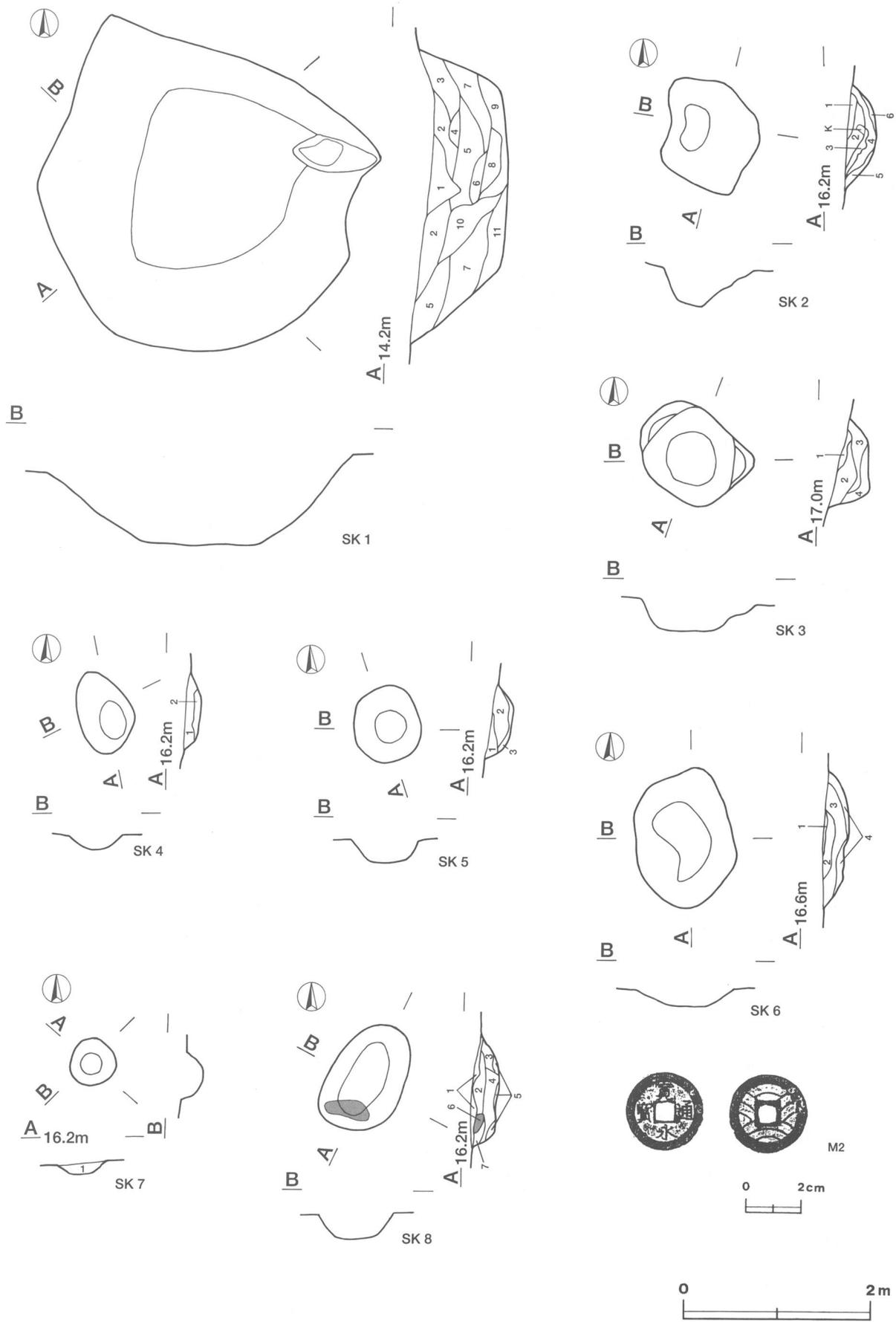
第18号土坑（第61図）

位置 調査区の北部，R27j1区。標高13.2mの緩斜面部に位置する。

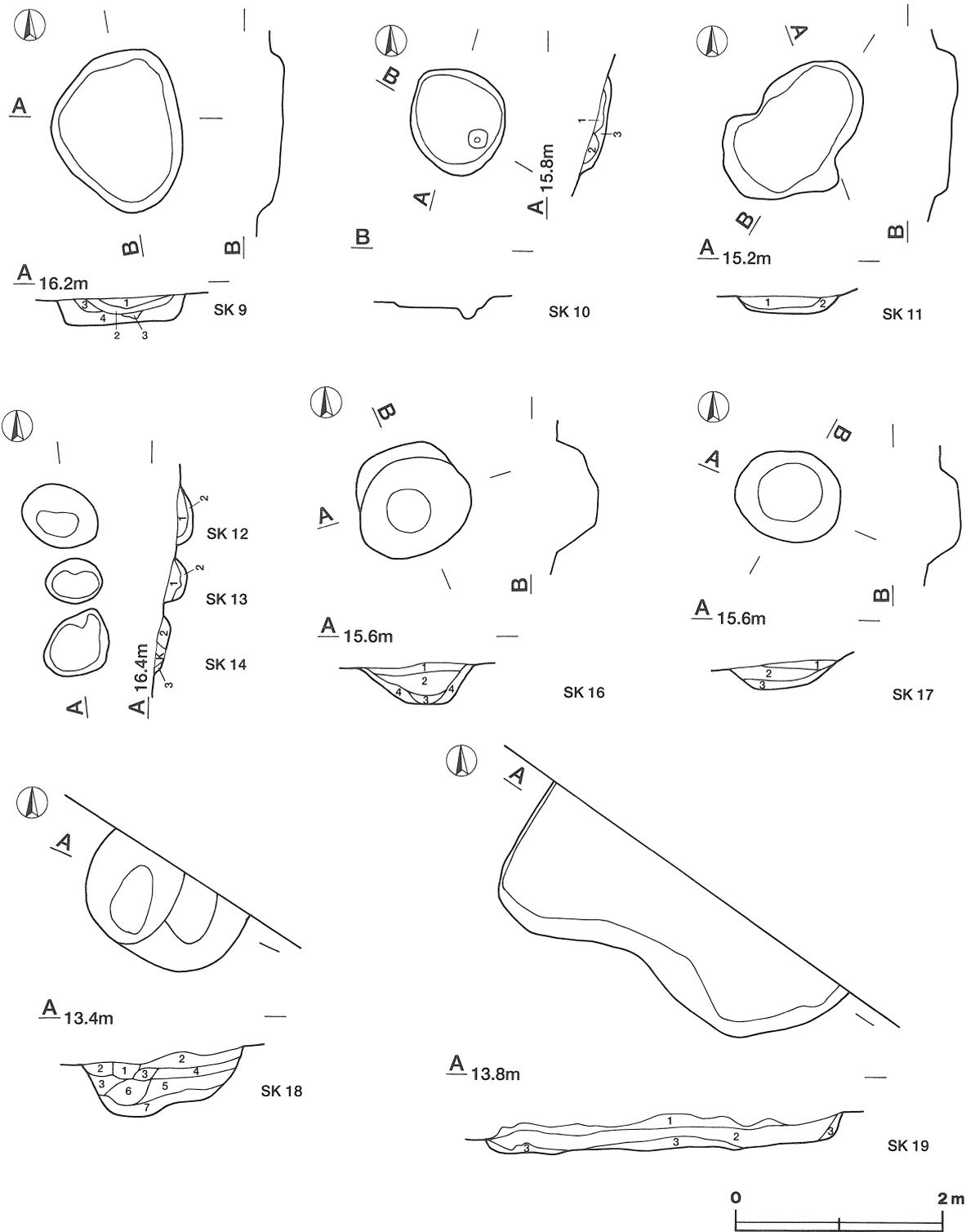
確認状況 遺構の北東部が調査区域外に位置する。

規模と形状 確認した長径1.62m，短径0.94mの楕円形と推定される。長径方向はN-65°-W，確認面からの深さは66cmで，壁は外傾して立ち上がる。底面は12cm程度の段差を有する。

覆土 7層からなる。覆土上層でブロック状の堆積が認められるが，全体的には，周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。また覆土は締まりのない軟弱な土質からなる。



第60図 土坑・出土遺物実測図



第61図 土坑実測図

土層解説

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 5 暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 6 暗褐色 ローム小ブロック少量 |
| 3 褐色 ローム小ブロック少量 | 7 褐色 ローム中ブロック少量 |
| 4 暗褐色 黒色土粒子中量, ローム粒子少量 | |

遺物出土状況 土師器片 3 点が, 覆土上層から出土している。

所見 出土遺物はすべて流れ込みによるもので, 時期を決定することができない。覆土は全体的に軟弱な土質のため, 近世を遡ることはないと考えられる。

第19号土坑（第61図）

位置 調査区の北部，R27j2区。標高13.5mの緩斜面部に位置する。

確認状況 北側が調査区域外に位置する。

規模と形状 確認した長径3.56m，短径1.32mの不整楕円形と推定される。長径方向はN-57°-W，確認面からの深さは44cmで，壁はほぼ直立する。底面には凹凸が見られ，西側に傾斜している。

覆土 3層からなる。全体的に締まりのない軟弱な土質で，周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|------|------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量 | 3 褐色 | ローム小ブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片1点が，覆土上層から出土している。

所見 出土遺物は流れ込みによるもので，時期を決定することができない。覆土は全体的に軟弱な土質のため，近世を遡ることはないと考えられる。

(2) 溝

第1号溝（第62図）

位置 調査区の北部・中央部・西部，R26e7～R27a1区。標高14.3～15.6mの斜面部に位置する。

重複関係 古墳時代前期の第45号竪穴住居跡及び第56号竪穴住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長さ22.8m，上幅45～92cm，下幅13～40cm，深さ15～18cmである。走行方向はN-45°-Eで，ほぼ直線的に延びる。壁はなだらかに立ち上がり，底面は～状を呈する。

覆土 2層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。全体的に軟弱な土質である。

土層解説

- | | |
|-------|------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師質土器1点，土師器片83点が，覆土中から出土している。

所見 出土した土師質土器は内耳鍋の口縁部片と考えられるが，小片のために時期を決定することができない。第2号溝と規模及び形態，覆土の様相など，類似する点が多く，本来はL字状に曲がる連続する溝であった可能性が高い。

第2号溝（第62図）

位置 調査区の北部，Q26i9～R27a1区。標高13.3～14.3mの緩斜面部に位置する。

重複関係 古墳時代前期の第48号竪穴住居跡を掘り込んでいる。さらに調査区域外に延びる。

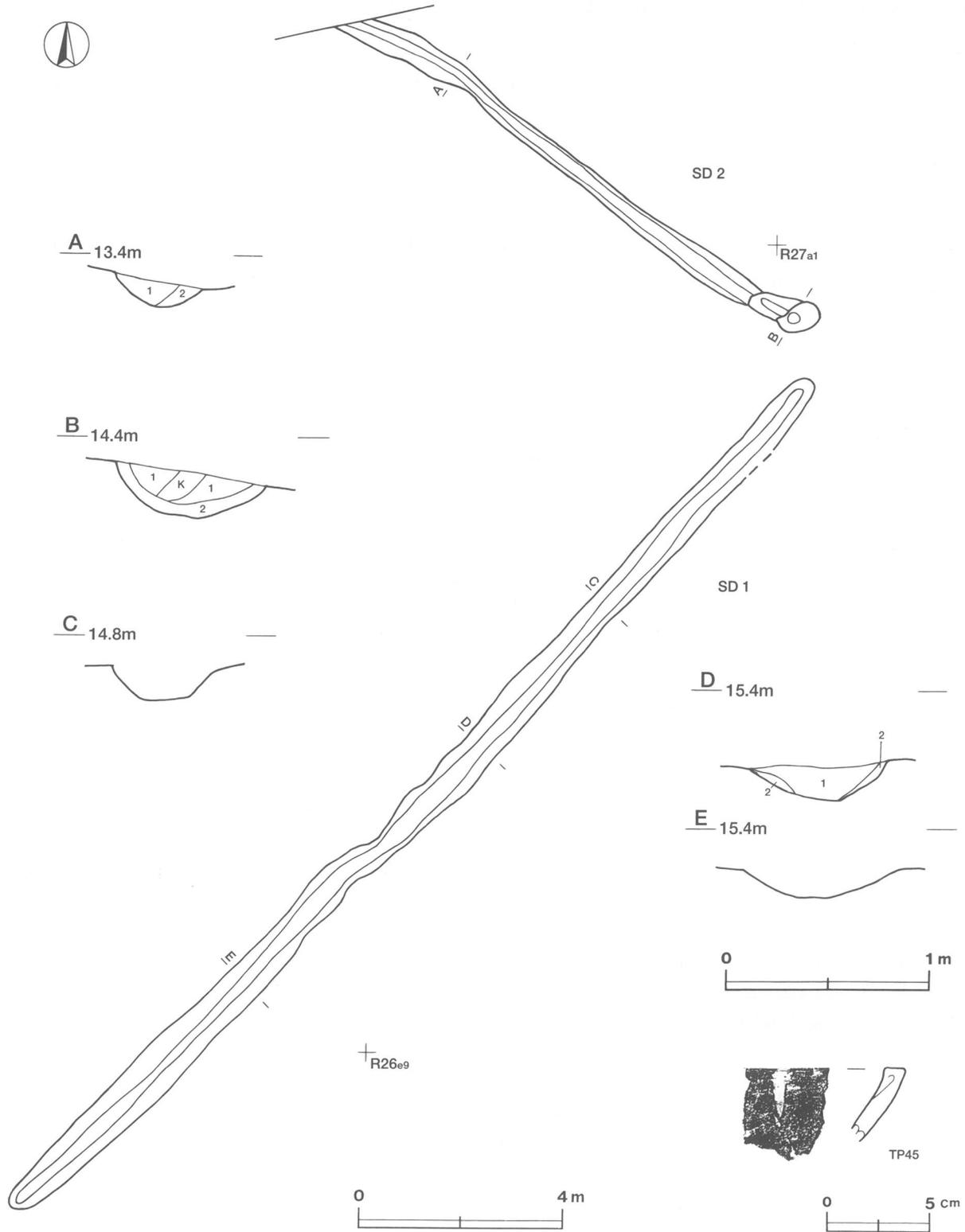
規模と形状 確認できた長さ11.3m，上幅34～60cm，下幅15～28cm，深さ15～25cmである。走行方向はN-54°-Wで，ほぼ直線的に延びる。壁はなだらかに立ち上がり，底面は～状を呈する。また南東部端は楕円形に深く掘り込まれている。

覆土 2層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。全体的に軟弱な土質である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量

所見 出土遺物がないため、時期を決定することができない。性格も不明である。第1号溝と規模及び形態、覆土の様相など、類似する点が多く、本来はL字状に曲がる連続する溝であった可能性が高い。



第62図 第1・2号溝・出土遺物実測図

第1号溝出土遺物観察表 (第62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP45	土師質土器	内耳鍋	-	(38)	-	石英・雲母・赤色粒子	赤褐	普通	内・外面ナデ。	中層	5%

第3号溝 (第63図)

位置 調査区の北部，R27b2～R27c3区。標高14.2～15.2mの緩斜面部に位置する。

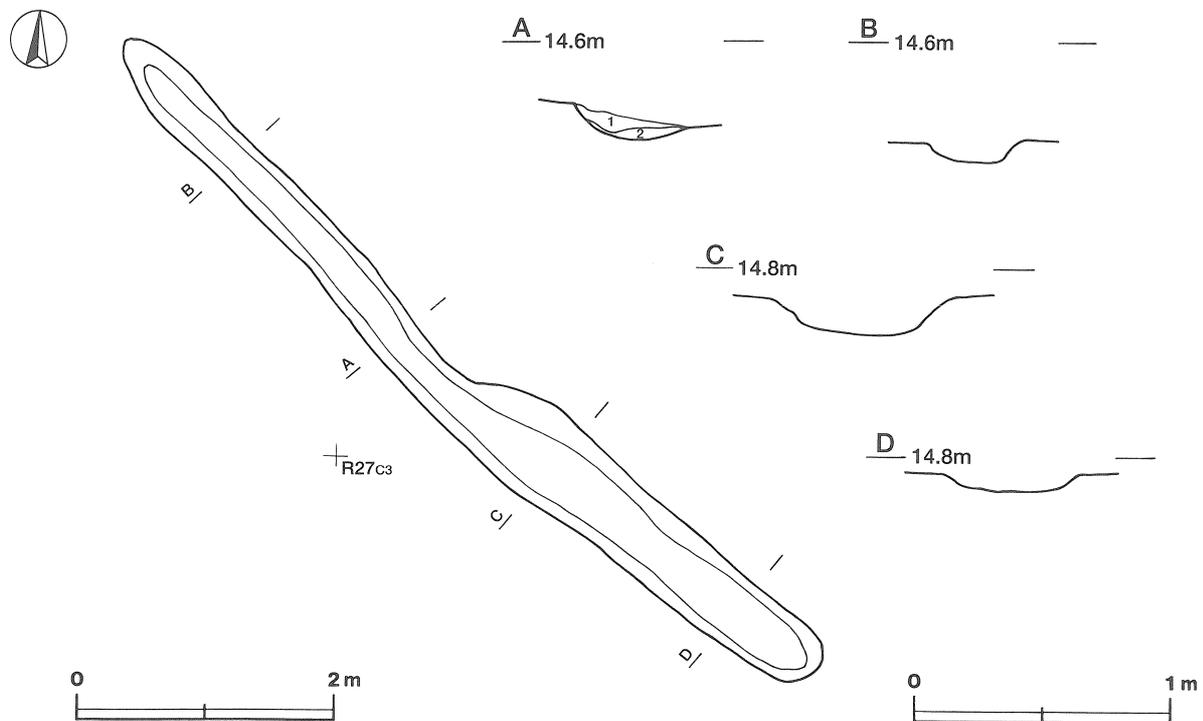
規模と形状 長さ7.4m，上幅39～74cm，下幅16～41cm，深さ7～15cmである。走行方向はN-48°-Wで，ほぼ直線的に延びる。壁はなだらかに立ち上がり，底面は～状を呈する。

覆土 2層からなる。周囲からの土砂の流入を示す堆積状況のため，自然堆積と考えられる。全体的に軟弱な土質である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量

所見 出土遺物がないため，時期を決定することができない。性格も不明である。第1・2号溝と規模及び形態，覆土の様相など，類似する点が多いが，第2号溝の走行方向とはかなりずれているため，連続する溝であったかどうかは不明である。

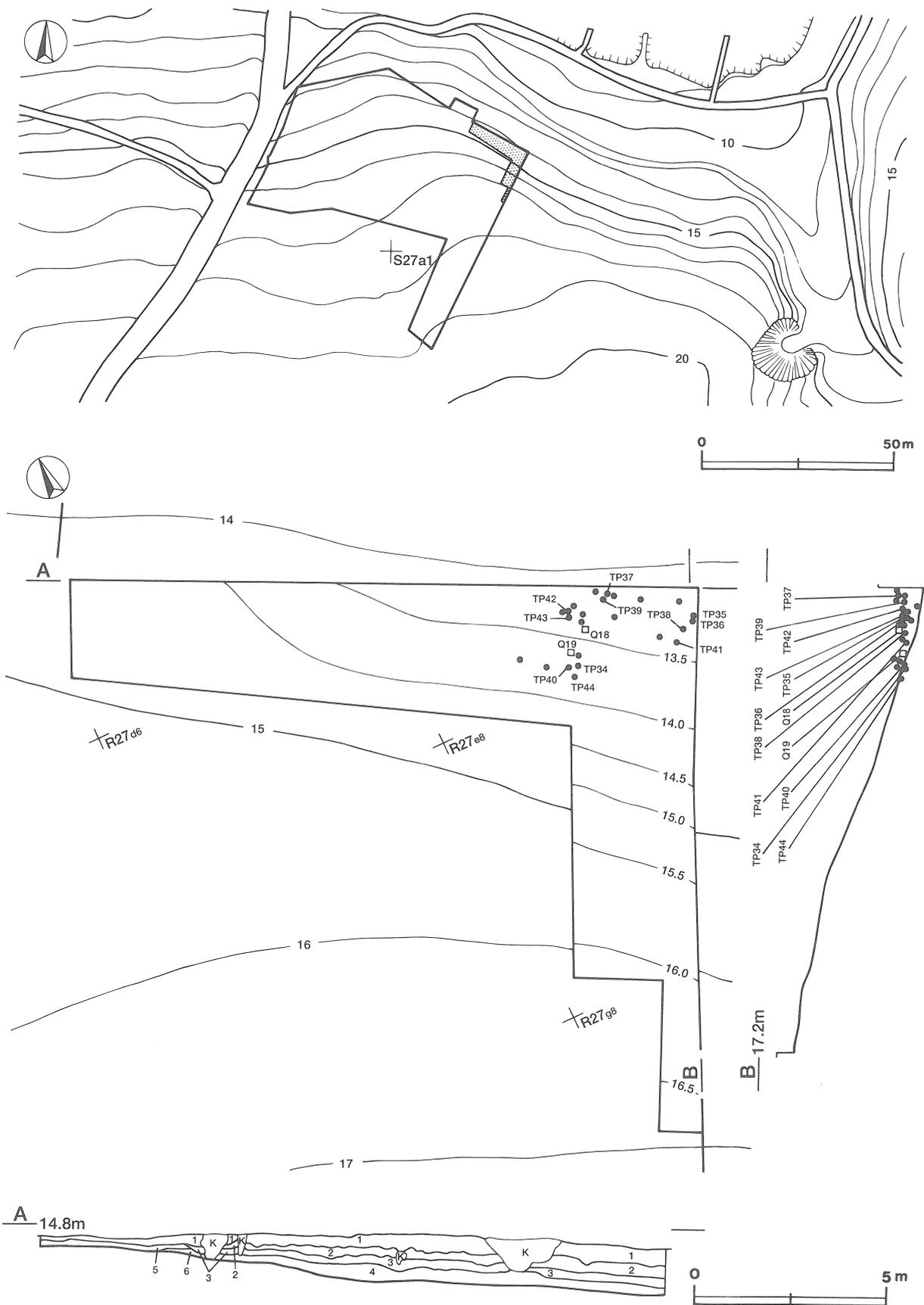


第63図 第3号溝実測図

5 その他の遺構と遺物

調査区東部から北東部の斜面部で，遺物包含層を確認した。以下，その概要と出土遺物について，記述していくことにする。

(1) 遺物包含層 (第64図)



第64図 遺物包含層調査区設定図 (上), 遺物包含層実測図 (下)

位置と範囲 調査区東部から北東部の斜面部で、暗褐色土の堆積を確認したため、幅1mのトレンチを設定し、土層堆積状況や遺物の確認を行った。その結果、上層からは古墳時代前期の土師器片などが出土し、下層からは縄文時代後期を中心とした縄文土器片や石器が出土した。そこで暗褐色土の範囲にあわせて、調査区に沿ってL字状に調査区を設定し、土層の堆積状況や出土遺物を記録することにした。遺物包含層は、調査区域外にさらに延びるため、正確な範囲は不明である。

土層 斜面部の土層は6層からなるが、遺物包含層は第1～4層である。いずれの層も周囲からの流入を示す堆積状況のため、自然堆積と考えられる。第4層の下層は暗褐色のローム層である。

土層解説

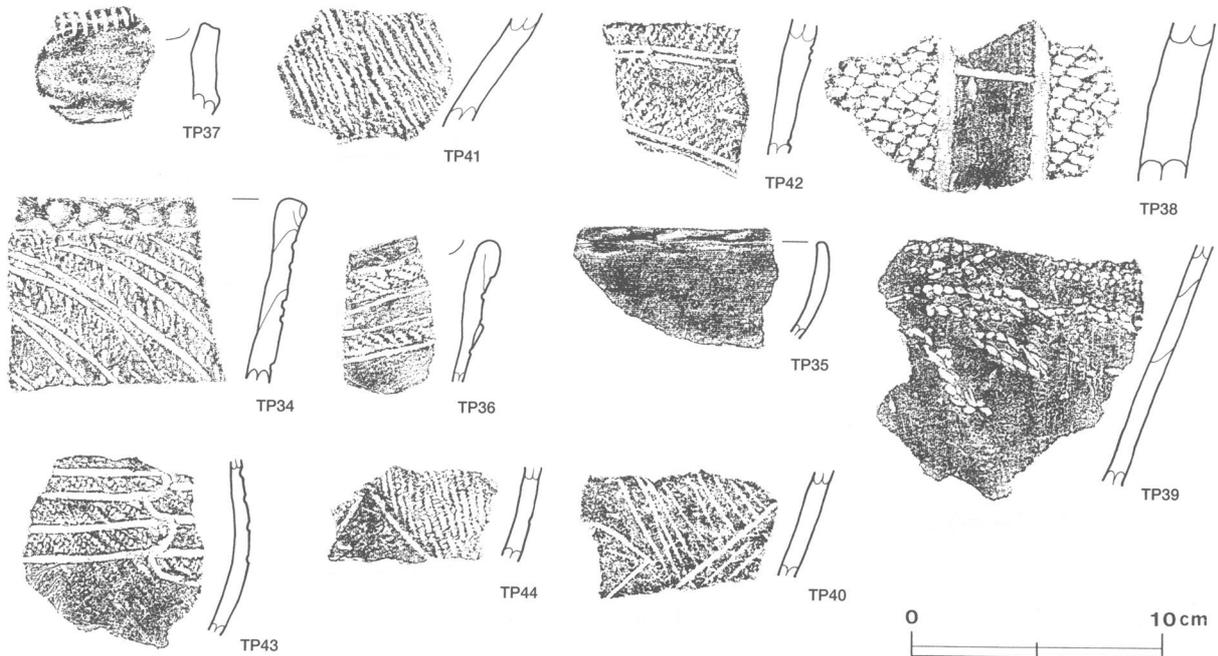
- | | | | |
|--------|-----------------------|-------|------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック中量、炭化物少量 | 4 黒色 | ローム中ブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化物少量 | 5 暗褐色 | ローム中ブロック中量 |
| 3 極暗褐色 | ローム中ブロック中量、炭化物少量 | 6 暗褐色 | ローム小ブロック少量 |

遺物出土状況 第1層からは土師質土器片（内耳鍋）及び古墳時代前期の土師器片、第2層からは古墳時代前期の土師器片が比較的散漫に出土している。いずれも小破片であり、台地上部や斜面部からの流れ込みと考えられる。第3・4層からは、縄文時代後期中葉を中心とする縄文土器片や石器が、径4m程度の狭い範囲にまとまって出土している。

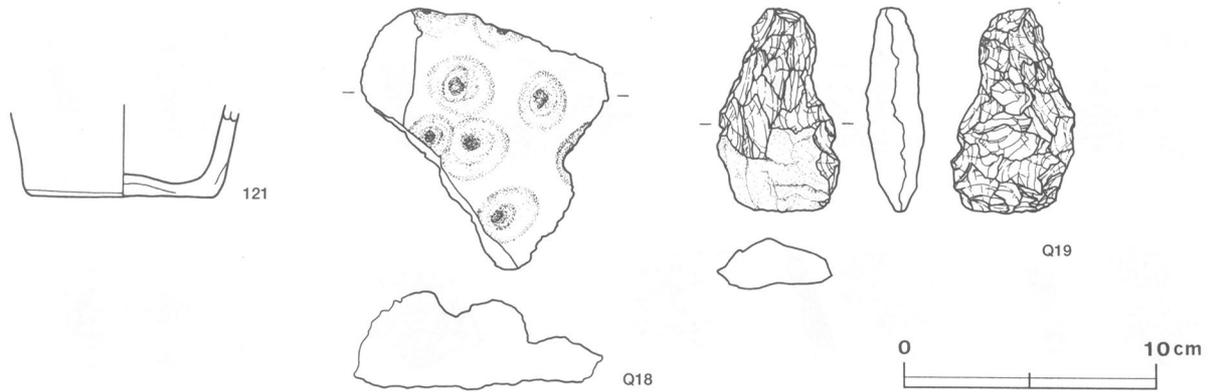
所見 第1・2層から出土した古墳時代前期の土師器片を主体とする遺物は、ほとんどが台地上部や斜面部からの流れ込みと考えられる。一方、第3・4層から出土した縄文時代後期中葉を中心とした縄文土器片や石器は、径4m程度の比較的狭い範囲にまとまって出土していることから、廃棄されたものと考えられる。また当遺跡が立地する台地の標高12～14m付近にテラス状の平坦部が存在するため、縄文時代後期を中心とした遺物包含層は、さらに台地の北側及び東側に広がることを予想される。

(2) 出土遺物（第65・66図）

出土遺物は、土師質土器片1点、土師器片31点、縄文土器片26点、頁岩製打製石斧1点、安山岩製凹石1点である。ここでは、主な遺物について、拓影図、実測図及び観察表で記載する。



第65図 遺物包含層出土遺物実測図（1）



第66図 遺物包含層出土遺物実測図（2）

遺物包含層出土遺物観察表（第65・66図）

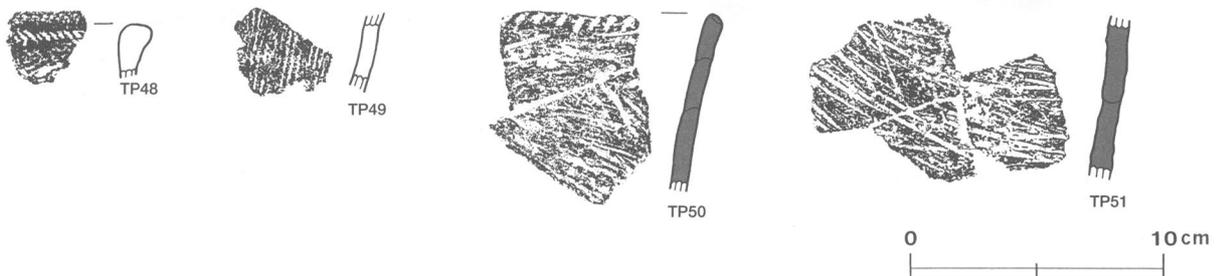
番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
121	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	7.2	石英・雲母	橙	普通	内・外面，底部ナデ。	第4層	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP34	縄文土器	深鉢	-	(7.1)	-	長石	橙	普通	口縁端部に押捺を加えた紐線を貼付，斜位に条線を施す。	第4層	5% P L 27
TP35	縄文土器	浅鉢	-	(4.9)	-	長石	黒褐	普通	口唇部に長い刻み目，内外面に細かい磨きを施す。	第4層	5%
TP36	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・雲母	灰褐	普通	波状口縁部，沈線を有する2段の隆起帯にRL単節縄文を施す。	第4層	5% P L 27
TP37	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部に刻み目を施す。	第4層	5%
TP38	縄文土器	深鉢	-	(6.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	地文はLR単節縄文，沈線で縦に区画し，磨り消す。	第4層	5% P L 27
TP39	縄文土器	深鉢	-	(9.6)	-	石英・長石・雲母	赤褐	普通	地文にLR・LR単節縄文を施す。	第4層	5% P L 27
TP40	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	斜位に沈線を施す。	第4層	5%
TP41	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	石英・長石・雲母	赤褐	普通	地文に附加条縄文を施す。	第4層	5%
TP42	縄文土器	深鉢	-	(4.8)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	地文はLR単節縄文，沈線を施す。	第4層	5% P L 27
TP43	縄文土器	深鉢	-	(7.1)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	RL単節縄文を沈線区画した帯状縄文，蛇行沈線で区切る。	第4層	5% P L 27
TP44	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	石英・長石・雲母	黒褐	普通	地文のRL単節縄文を弧状沈線で区画し，外を磨り消す。	第4層	5% P L 27

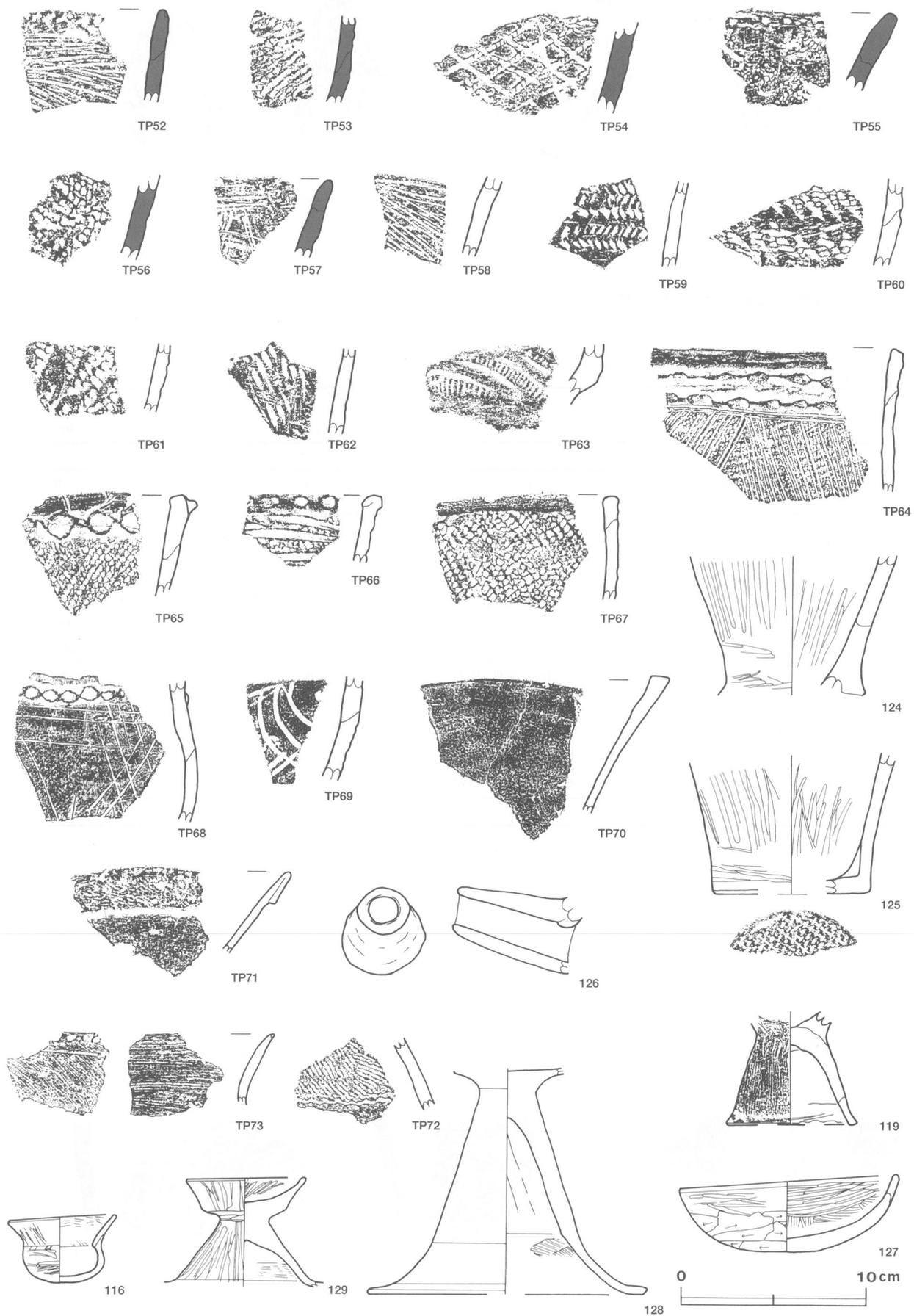
番号	種別	計測値				石質	特徴	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q18	凹石	(10.2)	(9.7)	(3.8)	(2134)	安山岩	断面V字状のくぼみが8か所，欠損あり。	第4層	P L 31
Q19	打製石斧	8.1	4.6	2.3	73	変成岩	ホルンフェルス製，両面調整，背面刃部側に自然面あり。	第4層	P L 31

6 遺構外出土遺物

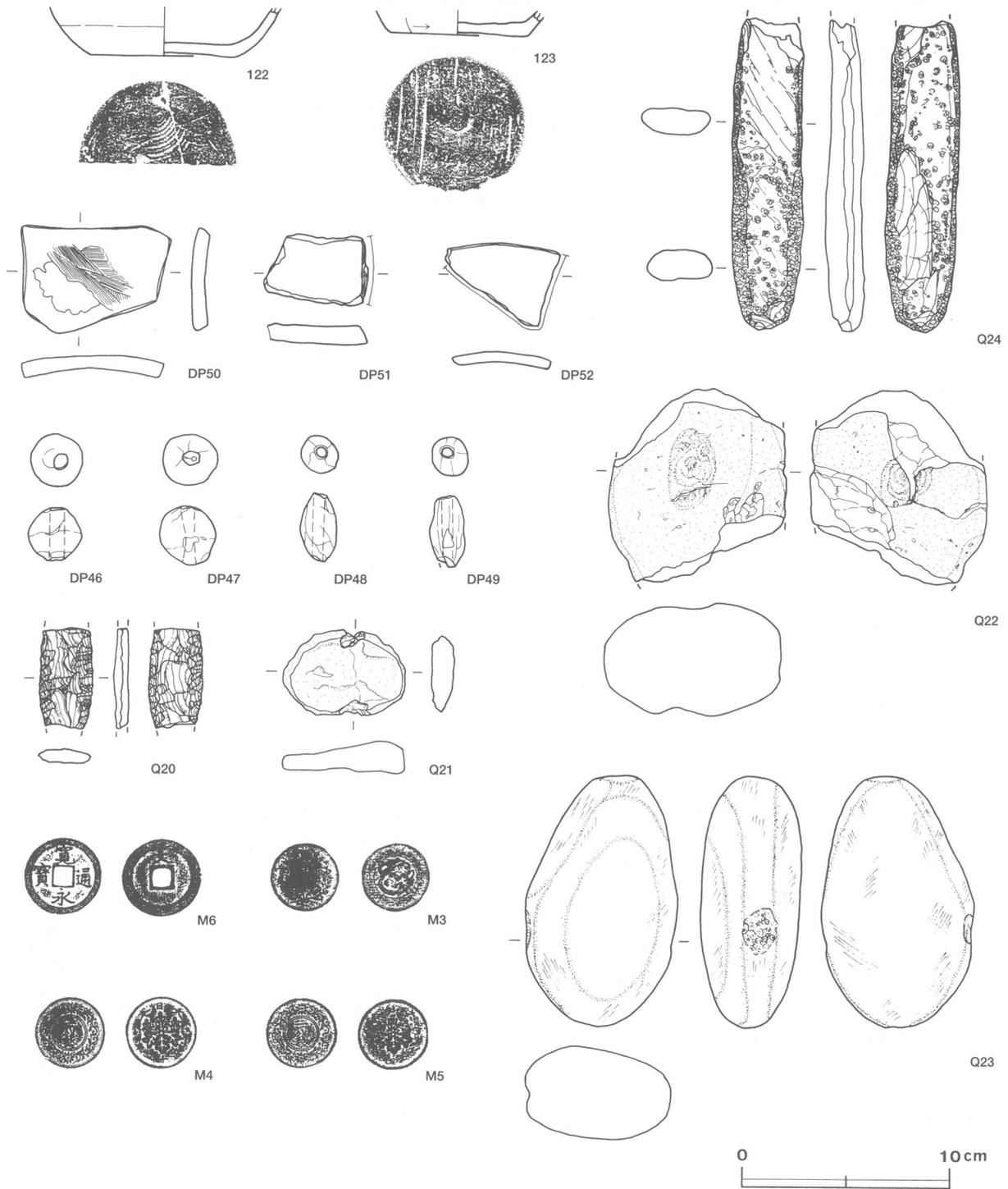
今回の調査で出土した，遺構に伴わない遺物の中から，特色のあるものを抽出し，拓影図，実測図及び観察表で記載する。



第67図 遺構外出土遺物実測図（1）



第68图 遺構外出土遺物実測図(2)



第69図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表(第67~69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP48	縄文土器	深鉢	-	(2.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇上, 端部, 胴部にLR単節縄文を施す。	表土中	5% P L 28
TP49	縄文土器	深鉢	-	(3.1)	-	石英・長石	にぶい赤褐	普通	撚糸文を施す。	表土中	5% P L 28
TP50	縄文土器	深鉢	-	(5)	-	石英・雲母・繊維	にぶい黄橙	普通	口唇部刻み目, 表面横・斜め方向, 裏面多方向の条痕を施す。	表土中	5% P L 28
TP51	縄文土器	深鉢	-	(6.5)	-	石英・雲母・繊維	黄橙	普通	表面横・斜め方向, 裏面多方向の条痕を施す。	表土中	5%
TP52	縄文土器	深鉢	-	(8)	-	石英・雲母・繊維	にぶい黄橙	普通	表面横・斜め方向, 裏面多方向の条痕を施す。	表土中	5% P L 28
TP53	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	石英・雲母・繊維	にぶい褐	普通	R無節縄文を施す。	表土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
TP54	縄文土器	深鉢	-	(5)	-	石英・雲母・繊維	黄橙	普通	網目状燃糸文を施す。	表土中	5% P L 28
TP55	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	長石・雲母・繊維	赤褐	普通	口唇部押捺, RL・LR単節縄文を羽状に施す。	表土中	5%
TP56	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	石英・雲母・繊維	赤褐	普通	RL・LR単節縄文を羽状に施す。	表土中	5% P L 28
TP57	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	石英・雲母・繊維	にぶい赤褐	普通	半裁竹管状工具による平行沈線文を縦横に施す。	表土中	5% P L 28
TP58	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	半裁竹管状工具による平行沈線文を斜めに施す。	表土中	5% P L 28
TP59	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	半裁竹管状工具による変形爪形文を施す。	表土中	5% P L 28
TP60	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	貝殻波状文を施す。	表土中	5% P L 28
TP61	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	貝殻波状文を施す。	表土中	5% P L 28
TP62	縄文土器	深鉢	-	(4.5)	-	石英・長石・雲母	赤褐	普通	肋のある貝殻を断続的に斜めに引きずる。	表土中	5% P L 28
TP63	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	隆起線文上に細かい刻み, 上下に沈線が引かれる。	表土中	5%
TP64	縄文土器	深鉢	-	(7.7)	-	長石・雲母	明赤褐	普通	押捺を加えた2条の粗線, 地文はRL単節縄文, 粗線下に沈線。	表土中	5% P L 28
TP65	縄文土器	深鉢	-	(5)	-	長石・雲母	橙	普通	押捺を加えた1条の粗線, 地文はRL単節縄文を施す。	表土中	5% P L 28
TP66	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	押捺を加えた粗線, 地文はRL単節縄文, 粗線下に沈線を施す。	表土中	5% P L 28
TP67	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	地文はRL単節縄文を施す。	表土中	5%
TP68	縄文土器	深鉢	-	(7.7)	-	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	押捺を加えた粗線, 粗線下に横・斜めに沈線を施す。	表土中	5%
TP69	縄文土器	深鉢	-	(5.3)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	直・曲線の沈線文を施す。	表土中	5% P L 28
TP70	縄文土器	深鉢	-	(7.2)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	内・外面磨きを施す。	表土中	5%
TP71	土師器	壺	-	(4.3)	-	石英	橙	普通	折り返し口縁部外面R無節縄文, ナデ, 内面ナデ。	表土中	5% P L 28
TP72	土師器	壺	-	(3.8)	-	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	R無節縄文をS字状結節文で区画。	表土中	5% P L 28
TP73	土師器	甕	-	(4)	-	石英・雲母	黒褐	普通	内・外面ハケ目, 口唇部に刻み目。	SK1覆土	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底・脚径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
116	縄文土器	深鉢	-	(7.5)	-	雲母	橙	普通	内外面磨き。	SI53覆土	10%
119	縄文土器	深鉢	-	(7.6)	[8.2]	長石・雲母	橙	普通	内外面磨き。	SI53覆土	5%
122	縄文土器	注口土器	-	-	-	長石・赤色粒子	暗褐	普通	基部外径39cm, 先端部外径25cm, 内径15cm, 外面磨き。	SI53覆土	10%
123	土師器	ミニチュア土器	5.9	3.7	-	石英・雲母	橙	普通	口縁～体部外面磨き, 口縁部内面ハケ目, ナデ。	表土中	完形 P L 23
124	土師器	器台	6.4	(5.9)	-	石英・雲母	にぶい赤褐	普通	外面磨き, 脚部内面ハケ目, ナデ。	SI53覆土	85% P L 22
125	土師器	高坏	-	(12.2)	[15]	石英・雲母	橙	普通	脚部ナデ, 下端ハケ目。	表土中	35%
126	土師器	台付甕	-	(6.1)	[6.8]	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	脚部外面ハケ目, 内面ナデ, 下端ハケ目。	SK1覆土	5%
127	土師器	坏	11.5	4.2	-	長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部磨き, 体部外面ヘラ削り。	SI53覆土	完形 P L 23
128	土師器	坏	-	(2.4)	7	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	ロクロ成形, 底部回転糸切り痕, ヘラ削り, 内面磨き。	表土中	15%
129	須恵器	坏	-	(1.2)	6.6	石英・長石	灰黄褐	普通	体部下端ヘラ削り, 底部ヘラ削り。	表土中	15%

番号	種別	計測値						特徴	出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (g)	孔径 (g)	重量 (g)			
DP46	球状土錘	2.5	2.6	-	-	0.7	15.4	球体, 外面ナデ。	表土中	P L 30
DP47	球状土錘	2.6	2.9	-	-	0.7	17.2	球体, 外面ナデ。	表土中	P L 30
DP48	管状土錘	1.8	3.3	-	-	0.6	9.5	管状, 外面ナデ。	表土中	P L 30
DP49	管状土錘	1.8	3.4	-	-	0.5	9.5	管状, 外面ナデ。	表土中	P L 30
DP50	転用砥	-	5.2	7.2	0.8	-	36.1	4側縁使用, 片面中央部に溝状の擦痕あり。	表土中	P L 29 壺
DP51	転用砥	-	3.4	5	0.9	-	17.9	1側縁使用。	表土中	P L 29 壺
DP52	転用砥	-	3.9	5.5	0.5	-	9.1	2側縁使用。	表土中	P L 29 高坏

番号	種別	計測値				石質	特徴	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
Q20	尖頭器	(4.9)	2.5	0.6	12.1	硬質頁岩	両端折損, 両面調整, 側縁に丁寧な押圧剥離調整を施す。	表土中	P L 32
Q21	石錘	4.1	5.9	1.6	35.2	安山岩	素材は扁平な楕円形の礫, 短軸側の両端部を打ち欠く。	表土中	P L 32
Q22	凹石	(9.3)	(8.6)	5.4	546.5	チャート	素材は拳大の円礫, 両面中央部にくぼみを有する。	SI44覆土	

番号	種別	計測値				石質	特徴	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q23	磨石	12	7.2	4.6	579.8	安山岩	全面に細かい擦痕、両側縁に敲打痕あり。	SI50覆土	
Q24	石剣	(20)	3.4	1.5	145	緑泥片岩	側縁を中心に敲打による調整加工を施す。先端部折損。	SI43覆土	P L 31

番号	銭名	計測値				鑄造年代(西暦)	出土地点	備考
		径 (cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
M3	半銭	2.2	-	0.1	3.4	明治16 (1883) 年	表土中	P L 32
M4	一銭	2.25	-	0.1	3.6	大正12 (1923) 年	表土中	P L 32
M5	一銭	2.25	-	0.1	3.5	摩滅により不明	表土中	
M6	寛永通寶	2.5	0.6	0.1	3.5	文銭, 寛文8 (1668) 年~天和3 (1683) 年	表土中	P L 32

表2 炉穴一覧表

炉穴番号	位置	長軸方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	R26h5	N-25°-W	不整楕円形	1.34×0.98	31	自然	皿状	外傾	縄文土器(早期)	本跡→SI23
2	R26g9	N-79°-W	不定形	1.58×1.02	28	自然	皿状	直立	縄文土器(早期), 礫	本跡→SI43・SK20

表3 陥し穴一覧表

陥し穴番号	位置	長軸方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
3	R27f4	N-58°-E	長楕円形	2.96×0.91	149	自然	平坦	外傾	縄文土器(前期), 礫	本跡→SI41

表4 住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向 長軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係 (古→新)	
								ピット								
								主柱穴	出入口	貯蔵穴	その他					
23	R26i6	N-27°-W	方形	4.34×4.3	50~52	平坦	-	-	-	-	2	炉1	自然	土師器, 砥石	古墳前期	1号炉穴→本跡
31	S27a5	N-66°-W	方形	4.16×4.04	22~32	平坦	全周	-	1	1	3	炉1	人為・自然	土師器	古墳前期	
32	R27i5	N-25°-W	方形	[6.54]×6.4	16~20	平坦	-	4	-	1	-	炉1	不明	土師器, 土錘, 砥石	古墳前期	
33	R27g2	N-18°-W	[隅丸長方形]	[3.1]×[2.4]	14	平坦	-	-	-	-	3	炉1	不明	縄文土器, 礫	縄文前期	本跡→SI36
34	R27i6	N-60°-W	長方形	4.82×3.68	22~46	平坦	-	-	1	1	5	炉1	人為・自然	土師器	古墳前期	
35	R27F9	-	[円形]	(3.5)×(1.95)	74	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	縄文土器, 石鏃, 剥片	縄文後期	
36	R27h2	N-6°-W	長方形	3.25×[2.95]	6	平坦	-	-	-	1	4	炉1	不明	土師器, 土錘	古墳前期	SI33→本跡
37	R27b5	N-47°-W	長方形	5.5×4.4	42~105	平坦	-	-	-	1	1	炉1	自然	土師器, 土製品, 双孔円板, 銅鏡	古墳前期	
38	R27c2	N-62°-W	[長方形]	3.2×[2.9]	20~40	平坦	-	-	-	-	-	炉2	自然	土師器, 管玉未製品	古墳前期	SI40・54→本跡
39	R27c1	N-36°-W	方形	4.14×3.86	4~46	平坦	-	-	-	1	2	炉3	自然	土師器, 土錘	古墳前期	
40	R27c2	-	[長方形]	2.5×(1.66)	10~18	平坦	-	-	-	-	1	-	自然	土師器	古墳前期	SI54→本跡→SI38
41	R27g4	N-25°-W	方形	7.14×6.58	6~50	平坦	-	4	1	1	-	炉1	自然	土師器, 土錘, 土製品	古墳前期	
42	R27g1	N-34°-W	[方形]	4.04×[3.8]	6~14	平坦	-	-	-	1	-	炉1	不明	土師器, 土錘	古墳前期	
43	R26g0	N-1°-W	方形	5.45×5.14	4~20	平坦	-	-	-	1	1	炉1	自然	土師器, 土錘, 鉄鏃	古墳前期	
44	R26e0	N-7°-W	[方形]	[3.82]×3.26	11~29	平坦	-	-	-	1	2	炉1	自然	土師器	古墳前期	
45	R26d8	N-28°-W	[方形]	3.5×[3.5]	10~19	平坦	-	-	-	1	2	炉1	不明	土師器	古墳前期	本跡→SD1
46	R26c7	N-34°-W	方形	5.42×5	16~42	凹凸	-	-	-	1	2	炉1	自然	土師器, 土錘, 転用砥, 土製品	古墳前期	
47	R26e5	N-15°-W	[方形]	5.42×[5.35]	18~40	平坦	-	-	-	1	2	炉1	自然	土師器, 土錘, 砥石	古墳前期	
48	Q26j8	N-73°-W	[方形]	[4]×[4]	14~18	平坦	-	-	-	1	4	炉2	自然	土師器	古墳前期	本跡→SD2
49	Q26j6	N-44°-W	[方形]	(5.1)×[5]	12	-	-	-	-	-	-	炉1	不明	土師器	古墳前期	本跡→SI50

住居跡 番号	位置	主軸方向 長軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係 (古→新)
								ピット				炉				
								主柱穴	出入口	貯蔵穴	その他					
50	Q26j6	N-14°-E	長方形	4.1×3.2	4~20	凹凸	-	-	-	-	7	炉1	自然	土師器, 転用砥, 土製品, 砥石	古墳前期	SI49→本跡
51	R26a5	-	[方形]	(3.15)×[3]	8~10	平坦	-	-	1	-	1	-	自然	土師器, 土錘	古墳前期	
52	R26b4	-	-	(4.55)×(2.45)	36~70	平坦	-	-	-	-	-	-	人為・自然	土師器, 土錘, 土製品	古墳前期	
53	R26f6	N-9°-W	[方形]	(2.84)×(2.6)	42~74	平坦	-	-	-	2	2	-	自然	土師器	平安中期	
54	R27c2	-	[方形]	4.5×[4.5]	16~28	-	一部	-	-	1	-	-	不明	土師器, 転用砥, 玉砥石	古墳前期	本跡→SI38・40
55	R26f6	N-13°-W	[方形]	[3.4]×3.32	9~18	平坦	-	-	-	-	4	炉1	不明	土師器, 土錘	古墳前期	
56	R26e8	-	[方形]	(4.14)×[4]	6~14	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器, 土錘	古墳前期	本跡→SD1
57	R26f9	N-13°-W	[長方形]	[3.7]×[3.3]	-	平坦	-	-	-	1	-	炉1	不明	土師器, 土錘	古墳前期	
58	R27e7	-	[長方形]	[3.4]×[2.95]	10~15	平坦	-	-	-	-	1	-	不明	土師器, 軽石	古墳前期	

表5 竪穴跡一覧表

竪穴跡 番号	位置	長軸方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
4	R26b8	N-75°-W	楕円形	5.3×4.65	8~20	自然	凹凸	外傾	土師器, 礫	

表6 溝一覧表

溝 番号	位置	長軸方向	規模				断面	覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
			長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
1	R26e7~R27a1	N-39°-W	22.8	40~45	13~40	15~18	~状	自然	平坦	緩斜	土師質土器	SI45・56→本跡
2	Q26i9~R27a1	N-78°-W	11.3	34~60	15~28	15~25	~状	自然	平坦	緩斜		SI48→本跡
3	R27b2~R27c3	N-81°-E	7.4	39~74	16~41	7~15	~状	自然	平坦	緩斜		

表7 土坑一覧表

土坑 番号	位置	長軸方向	平面形	規模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	R27a2	N-29°-W	不整楕円形	3.84×3.50	101	自然	平坦	外傾	土師器, 縄文土器	
2	R27f7	N-23°-W	不定形	1.32×1.12	42	人為	皿状	緩斜	土師器, 縄文土器, 礫	
3	R27g6	N-45°-W	楕円形	1.15×0.94	44	自然	平坦	外傾	土師器, 縄文土器	
4	R26f7	N-14°-W	楕円形	0.90×0.59	18	自然	皿状	緩斜	土師器, 礫	
5	R26g6	N-2°-W	楕円形	0.83×0.71	28	自然	皿状	緩斜	土師器	
6	R26g9	N-9°-E	楕円形	1.50×1.10	26	人為	皿状	緩斜	寛永通寶, 土師器, 縄文土器	
7	R26f7	-	円形	0.50×0.50	20	自然	皿状	緩斜		
8	R27f8	N-29°-E	楕円形	1.24×0.81	30	人為	皿状	緩斜	土師器, 縄文土器	
9	R26h3	N-9°-W	楕円形	1.58×1.24	24	自然	平坦	外傾		
10	R27c6	-	円形	1.08×1.08	31	自然	皿状	緩斜		
11	R26e4	N-42°-E	不整楕円形	1.59×1.10	22	自然	平坦	外傾	土師器	
12	R27e3	N-60°-W	楕円形	0.77×0.60	14	自然	皿状	緩斜		
13	R27e3	N-84°-E	楕円形	0.56×0.44	22	自然	皿状	緩斜		
14	R27e3	N-30°-E	楕円形	0.73×0.58	16	自然	皿状	緩斜		
15	R26g9	N-75°-E	楕円形	1.46×0.98	25	人為	平坦	外傾	土師器, 礫	SI43・第2号炉穴→本跡
16	R26g3	N-60°-E	楕円形	1.19×1.08	42	自然	平坦	外傾	土師器	
17	R26f4	N-76°-W	楕円形	1.04×0.89	34	自然	皿状	外傾	土師器, 縄文土器	
18	R27j1	N-65°-W	[楕円形]	1.62×0.94	66	自然	凹凸	外傾	土師器	
19	R27j2	N-57°-W	[不整楕円形]	3.56×1.32	44	自然	凹凸	直立	土師器	

第4節 ま と め

今回の調査で確認した遺構は、竪穴住居跡29軒、竪穴跡1基、炉穴2基、陥し穴1基、土坑19基、溝3条、遺物包含層1か所である。ここでは、各時代の主な遺構と遺物についての概要を述べ、まとめとする。

1 旧石器時代～縄文時代

今回の調査で出土した旧石器時代の遺物は、硬質頁岩製の槍先形尖頭器1点である。斜面部の表土中から出土している。共伴する石器群を確認するため、出土地点周辺の精査を行ったが、何ら発見することができなかった。このため出土した槍先形尖頭器は単独で遺存していた可能性が高く、それは猟場での回収放棄に起因すると考えられる。時期は旧石器時代終末期～縄文時代草創期に位置づけられる。なお平成8年度の調査でも、安山岩製の有茎尖頭器が表土中から出土している。

また当遺跡では旧石器時代の石器群をローム中で確認することはできなかったが、基本土層の観察で明瞭に黒色帯及び始良Tn火山灰(AT)を含む層を確認することができた。第6図に示した当遺跡と柏原遺跡との基本土層の対応関係のように、今後も県南地域におけるローム層の対比が可能となる層序資料の蓄積が必要であろう。

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、炉穴2基、陥し穴1基である。その他、遺物包含層1か所が確認されている。竪穴住居跡は第33号住居跡が台地縁辺部、第35号住居跡が斜面部に位置している。時期は出土遺物などから、第33号住居跡が前期後半の浮島式期、第35号住居跡が後期後半の安行Ⅰ・Ⅱ式期と考えられる。炉穴はいずれも、台地縁辺部に位置し、時期は出土遺物などから早期後半の茅山上層式期と考えられる。平成8年度に調査の対象となった台地平坦部から縄文時代の遺構は確認されていないことから、縄文時代の竪穴住居や炉穴は台地縁辺部から斜面部にかけて構築されたと考えられる。また陥し穴は標高16mの斜面部に位置し、長径方向が等高線に平行している。その位置及び配置から、小支谷の水辺に集まる動物の捕殺・捕獲を目的に構築されたものと考えられる。時期の上限は、自然堆積と考えられる覆土中層から浮島式土器片が出土しているため前期後半と考えられる。しかし、当遺跡から出土した縄文土器の様相を考慮すると、撚糸文系土器群～条痕文系土器群の時期に構築され、前期後半にはすでに埋没状態にあったと考えられる。

以上のとおり、当遺跡は旧石器時代終末期～縄文時代草創期及び早期には猟場として利用され、早期後半・前期後半・後期後半の各時期に、数軒程度の小規模な集落が営まれたと考えられる。こうした当遺跡における縄文時代の遺構・遺物のあり方は、すでに第2章第2節で述べたように、取手市内における縄文時代遺跡の動態と一致を見せている。

2 古墳時代

今回の調査で確認した古墳時代の遺構は、竪穴住居跡26軒、竪穴跡1基である。平成8年度調査の成果を踏まえると、竪穴住居跡は52軒、竪穴跡は4基となる。それらの分布を見てみると、台地平坦部よりも台地縁辺部や北側斜面部に集中している傾向がうかがえる。台地平坦部は後世の削平をかなり受けていることが予想されるが、それにしても台地縁辺部や北側斜面部における竪穴住居跡の集中は著しいと言える。集落変遷の最終的な結果と考えても、生活に好適地とは言えない北側斜面部に竪穴住居を構築している点は、興味深い事実である。さらに、その斜面部の最北東部で確認された第37号住居跡から出土した重圏文鏡は、県内3例目の発見

となり、竪穴住居跡から出土した例としては県内初である。

以下では、平成8年度の調査成果を踏まえながら、竪穴住居跡の形態的な検討と遺物の種別毎の検討を加える。また重圏文鏡については、簡単な出土事例の分析を通じて当遺跡でのあり方に触れてみたい。

(1) 竪穴住居跡について（平成8・12年度の調査成果）

当遺跡における竪穴住居跡は52軒で、台地平坦部にはまばらに分布し、台地縁辺部から斜面部にかけては集中して分布している。

平面形状は、長方形よりも方形のものがやや多い。長軸と短軸の差は、第1・3号住居跡の110cmが最大である。

平面規模からは、長軸が7mを超える大形住居、長軸が4～7mの中形住居、長軸が4m未満の小形住居に大別できる。大形住居に分類されるのは、第5・32・41号住居跡の3軒である。中形住居に分類されるのは、第1～4・6・7・10・12～14・17・18・20・21・23～27・29～31・34・36・37・39・42・43・46～50・52・54・56号住居跡の36軒である。小形住居に分類されるのは、第15・16・19・22・28・38・40・44・45・51・55・57・58号住居跡の13軒である。最大規模は第5号住居跡の長軸8.48mで、最小規模は第40号住居跡の長軸2.5mである。

平面規模から見た竪穴住居跡の分布は、大形住居に分類される第5号住居跡が台地中央部の平坦部に、第41号住居跡が台地縁辺部に位置し、直線距離で74mと大きく離れている。中形住居に分類される竪穴住居跡は、台地平坦部から斜面部全域にそれぞれ一定の距離を保つように分布している。小形住居に分類される竪穴住居跡は、台地縁辺部から斜面部に集中して位置し、中形住居に隣接するように分布している。以上は、あくまでも集落変遷の最終的な見かけ上の分布であるが、竪穴住居の配置に関して何らかの規制が働いていた可能性は十分に考えられる。

支柱穴や内部施設の側面からは、次の3つに大別できる。

・A類 支柱穴、炉、貯蔵穴を有するもの。

（第5・6・18・24・32・41号住居跡）

・B類 支柱穴と炉を有するもの。

（第2・13・22・26号住居跡）

・C類 支柱穴を有せず、炉、貯蔵穴などを有するもの。

（第1・3・4・7・10・12・14～17・19～21・25・27～30・31・34・36～39・42～50・54・55・57・58号住居跡）

A類は6軒で、全体の13%である。B類は4軒で、全体の9%である。C類は37軒で、全体の78%である。また、A類は大形住居と中形住居の一部に限られている。B類は主に中形住居の一部に見られ、C類は中形住居と小形住居に広く認められる。これらの傾向から、大形住居は定形的な内部施設と整った上屋構造を指向しているものが多く、中形住居は最低限度の内部施設と整った上屋構造を、小形住居は基本的な内部施設と簡易な上屋構造を指向しているものが多いと考えられる。

炉はすべて床面を掘りくぼめた地床炉で、基本的には1か所である。2か所に設けられているものは、第1・21・28・31・38・48・57号住居跡でもある。唯一、第39号住居跡は3か所に設けられている。炉の位置は、中央部よりやや北・北東・北西寄りにあるものが大半を占めている。例外的に壁際に偏るものもある。

貯蔵穴は、第1・5・6・12・18・20・21・24・27～34・37・39・41～44・46～54・55・57・58号住居跡で

確認されている。貯蔵穴の位置は、大半は南東・南・南西コーナ一部に設けられているが、例外的に東コーナ一部や東壁際に設けられているものもある（第5・24・28・37号住居跡）。平面形は楕円形ないし隅丸長方形を基本としている。深さや覆土の様相はまちまちである。

壁溝は、第29～31・39・43・52・54号住居跡で確認されている。全周するのは第31号住居跡のみである。

主軸方向は、多い順に北北西、北西、北北東、北、北東である。

なお、焼失したと考えられる住居跡は、第1・3・4・6・7・10・17・21・24・31・34号住居跡で、全体の21%である。

(2) 出土遺物について（平成12年度の調査成果）

竪穴住居跡からは多量の土師器片が出土している。他には少量の土製品と石製品、金属製品が出土している。以下、土師器、土製品、石製品、金属製品の種別毎に、その出土状況や特徴などについてまとめてみたい。

出土した土師器は、椀・鉢・高坏・器台・粗製器台・埴・壺・甕・台付甕・甑・ミニチュア土器・手捏土器と多くの器種が認められる。破片を含めた出土点数では、壺・甕が圧倒的に多く、高坏・器台・埴がそれに次いでいる。椀・鉢・粗製器台・甑は少なく、ミニチュア土器・手捏土器はわずかである。器種により出土位置に目立った傾向は見られないが、壺・甕・埴は貯蔵穴と考えられるピットの中やその周辺から出土する例が比較的多く見られる。高坏は脚部がハの字状に開くもの、中実柱状や中空柱状のものが見られる。器台には脚部の高いもの、低いもの、器受部が内彎するもの、直線的に開くものなどがある。高坏と器台は、薄手で丁寧に磨き及び赤彩されているものが大半である。また、粗製器台は厚手で外面にハケ目を強く残している。埴は丸底のものや中央がわずかにくぼむ丸底のものがある。磨き及び赤彩されているものと、ナデやハケ目、削り調整のみで赤彩されていないものが、ほぼ同じ割合で出土している。壺は口縁部の形態が単口縁のもの、折り返し口縁のもの、有段口縁のものなどが見られる。口縁部外面に棒状浮文を貼り付けているものもわずかにあるが、大半がナデやハケ目、削り調整のみである。また、地文などを有するものはなく、赤彩されているものは少ない。甕は圧倒的にハケ目調整で、口縁部の形態が単口縁のもの、折り返し口縁のもの、輪積み痕を明瞭に残すものなどが見られる。わずかではあるが、口唇部に刻みや指頭による押圧などを加えているものもある。なお、S字状口縁を呈するものは確認されていない。

出土した土製品は、球状土錘が主体である。それらは壁際や壁寄りの床面や覆土下層から出土する傾向が見られる。また第43号住居跡では貯蔵穴の中から、完形の埴と共に出土している。1軒の住居跡からの出土点数の最大は第41号住居跡の8点である。また、わずかに用途不明の土製品も出土している。第37号住居跡から出土した三角柱状の土製品や、第46・50号住居跡から出土した指頭痕の付いた板状ないし塊状の土製品などである。

出土した石製品は、砥石・軽石製品・管玉未製品・双孔円板である。砥石は大半が凝灰岩製で、よく使い込まれている。砥面には細かい線条痕や断面V字状の切り込みが観察され、金属製品の研磨を裏付けている。ただ第54号住居跡から出土した砥石は、石英片岩製の玉砥石があり、その中でも勾玉などの内磨きなどに使用される板砥石に分類されるものである。これらの砥石は、球状土錘と同様に壁際や壁寄りの床面や覆土下層から出土する傾向が見られる。軽石製品は2点のみで、いずれも用途不明であるが砥石あるいは磨石として利用されたと考えられる。玉類は、第38号住居跡から出土した緑色凝灰岩製の管玉未製品1点である。先の玉砥石と共に、当遺跡において玉類の製作が行われていた可能性を示す遺物である。石製模造品は、第37号住居跡から出土した滑石製双孔円板1点だけである。

出土した金属製品は、第37号住居跡から出土した銅鏡と、第43号住居跡の壁際の床面から出土した無茎式鉄

鍬の2点である。なお銅鏡については後述する。

以上のように、当遺跡における古墳時代の集落は、その出土した土師器の様相などから、前期の4世紀後半を中心に営まれたと考えられる。そこから出土した遺物は、日常使用する土師器や土錘、砥石をはじめとして、祭器としての石製模造品やミニチュア土器、武器としての鉄鍬や、威信材としての銅鏡など、古墳時代前期という時代をよく反映しているといえる。また第37号住居跡に見られるように、出土した土師器の中には少量ながら前期末～中期初頭に位置づけられるものが含まれている。さらに同住居跡から出土した滑石製双孔円板についても、その類例から土師器と同様に前期末～中期初頭に位置づけられる。その時期を境に、古墳時代の集落は終焉に向かい、完全に廃絶されたと考えられる。

(3) 第37号住居跡出土銅鏡－重圏文鏡－について

茨城県内における古墳時代前期の重圏文鏡の出土例は、玉造町勅使塚古墳¹⁾と新治村下坂田字出シ山²⁾の畑から出土した2例が知られているだけである。

全国的に見ると、重圏文鏡は現在42例が確認されており、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした時期の仿製鏡と考えられている。出土状況のあり方としては、墳墓や墓域からの出土が一般的で、次いで竪穴住居跡や溝跡、包含層などを含めた集落跡からの出土が多いとされている³⁾。

古墳時代前期における竪穴住居跡出土の重圏文鏡に関して、隣接する他県の事例としては、千葉県柏市戸張一番割遺跡⁴⁾、袖ヶ浦市二又堀遺跡⁵⁾の2例が知られている。柏市戸張一番割遺跡は、当遺跡から直線距離で南西約8km、利根川を挟んで位置し、重圏文鏡は竪穴住居跡の炉の火床面から、完形のまま鏡面を下に向けた状態で出土している。二又堀遺跡出土の重圏文鏡は、竪穴住居跡の南西壁際の床面より2・3cm上位から、完形のまま鏡面を下に向けた状態で出土している。また関東地方以西の事例としては、静岡県焼津市小深田遺跡⁶⁾の事例がある。なお千葉県安房郡千倉町駒形遺跡出土の重圏文鏡は、竪穴住居跡を掘り込んでいた土坑の覆土中から出土している。本来、竪穴住居跡の覆土中に存在した重圏文鏡が、後世の土坑に混入した可能性が考えられる⁷⁾。このように、古墳時代前期における竪穴住居跡出土の重圏文鏡は、当遺跡例、戸張一番割遺跡例、二又堀遺跡例、小深田遺跡例、あえて駒形遺跡例を含め、現在のところ、5例のみである。当遺跡例は埋納や遺棄を思わせるような出土状況ではなく、無造作に廃棄されたような状態であり、他の事例と共通している。また重圏文鏡を出土した竪穴住居跡自体も、集落内で特殊な性格であった可能性は低いと考えられている⁸⁾。

3 平安時代以降

平安時代の遺構は、竪穴住居跡1軒である。平成8年度の調査では該期の遺構・遺物は確認されていない。また今回の調査で出土した該期の遺物は、わずかに土師器坏2点と須恵器坏1点である。従って、該期の集落跡は、台地のより西方に存在している可能性が考えられるが、その集落規模は数軒程度の小規模なものと推定される。

今回の調査では、当遺跡の東側の台地東端に築かれていた大山城（築城年代及び城主不明、すでに宅地造成により消滅）に関連する中世の遺構・遺物がまったく発見されなかった。一方、確認した時期不明の19基の土坑と、3条の溝跡の中には、中世に位置づけられるものも含まれている可能性はある。しかし、いずれも性格不明で、出土遺物はわずかな縄文土器や土師器の小破片のため、時期を決定することは困難である。覆土の様相からは、近世を遡ることはないかと推定されるものが多い。このように遺構・遺物両側面から、中世以降における人々の生活の痕跡は極めて希薄であったと考えられる。

4 小 結

今回の調査の結果、当遺跡は古墳時代前期を中心とした近世に至るまでの複合遺跡であることが判明した。旧石器時代終末期～縄文時代草創期及び早期は猟場として利用され、早期後半以降、断続的に小規模な集落が営まれていたが、弥生時代になると、人々の生活は完全に途絶えてしまう。しかし、古墳時代前期になると、突如として集落が形成される。その最終的な集落規模は、これまでに知られている取手市内の古墳時代前期の代表的な遺跡のそれをはるかに凌駕している。当遺跡で確認された竪穴住居跡が52軒であるのに対し、大渡遺跡は16軒⁹⁾、北中原遺跡は3軒¹⁰⁾であり、いかに当遺跡の集落規模が大きいかがうかがわれる。第37号住居跡から出土した重圏文鏡は、まさにその象徴といえよう。だが、古墳時代前期に形成された集落は、中期に継続することなく、忽然と消滅してしまう。このことから計画的な移住や集落の再編成などが想起される。再び人々の生活が開始されるのは、平安時代になってからのことである。それ以降、人々の生活の痕跡は次第に希薄となり、近世に至るまで小規模な土地利用がなされたことが明らかになった。

註

- 1) 大塚初重ほか「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』第2巻第3号 1964年
大塚初重「茨城県行方郡勅使塚古墳」『日本考古学年報』第14号 1966年
- 2) 新治村史編纂委員会『図説新治村史』新治村教育委員会 1986年
増田精一ほか『武者塚古墳－武者塚古墳・同2号墳・武具八幡古墳の調査－』茨城県新治村教育委員会 1986年
- 3) 小林三郎「古墳時代初期倣製鏡の一側面－重圏文鏡と珠文鏡－」『駿台史学』第46号 1979年
「古墳時代初期倣製鏡の鏡式について」『明治大学人文科学研究紀要』第21冊 1983年
林原利明「弥生時代終末～古墳時代前期の小形倣製鏡について－小形重圏紋倣製鏡の様相－」『東国史論』第5号 1990年
「東日本の初期銅鏡」『季刊考古学』第43号 1993年
藤岡孝司「重圏文(倣製)鏡小考」『君津郡市文化財センター研究紀要V』1991年
- 4) 平岡和夫ほか『戸張一番割遺跡』山武考古学研究所 1985年
- 5) 稲葉昭智ほか『千葉県袖ヶ浦市大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅱ－二又堀遺跡・大竹古墳群－藤田観光ゴルフ場建設
工事に伴う埋蔵文化財調査』君津郡市文化財センター 1993年
- 6) 山口和夫『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』焼津市教育委員会 1982年
山口和夫ほか『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』焼津市教育委員会 1984年
- 7) 玉口時雄ほか『千葉県安房郡千倉町埋蔵文化財調査報告書－健田遺跡関連第6次調査－』朝夷地区教育委員会
1982年
- 8) 註3), 藤岡孝司・1991年に同じ
- 9) 大渡遺跡調査会『茨城県取手市大渡遺跡発掘調査報告書』取手市教育委員会 1998年
- 10) 北中原遺跡調査会『茨城県取手市北中原遺跡発掘調査報告書』取手市教育委員会 1990年

参考文献

- ・取手市史編さん委員会『取手市史原始古代(考古)資料編』取手市教育委員会 1989年
- ・赤塚次郎『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1990年

- ・茨城県教育財団 「取手都市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大山Ⅰ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第123集 1997年
- ・古墳時代研究班(集落グループ) 「茨城のS字状口縁台付甕について(3)」『研究ノート』 第7号 1998年
- ・菱沼良幸 「北相馬台地における古墳時代前期の土器様相－取手市大山Ⅰ遺跡調査の成果から－」『研究ノート』 第8号 1999年

写真図版



大山Ⅰ遺跡近景（西から）

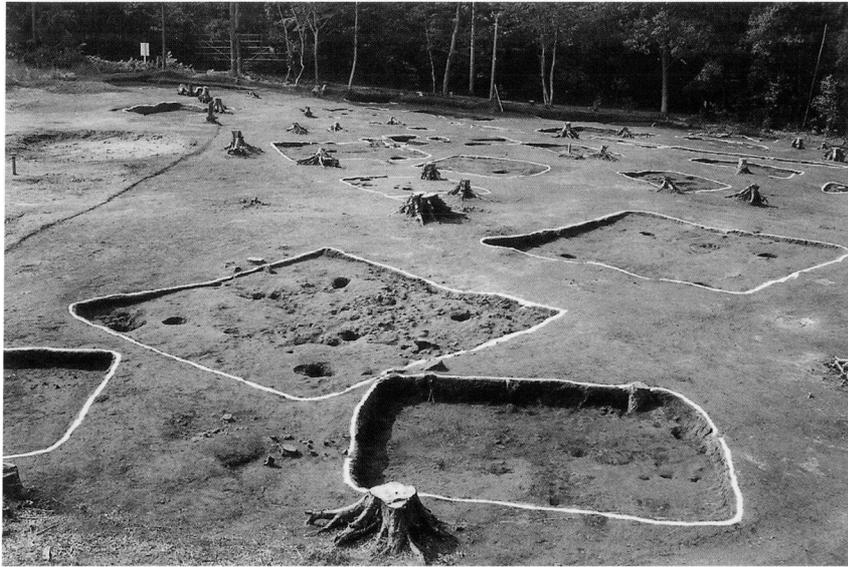


大山Ⅰ遺跡全景

PL 2



遺構確認状況



遺構完掘状況



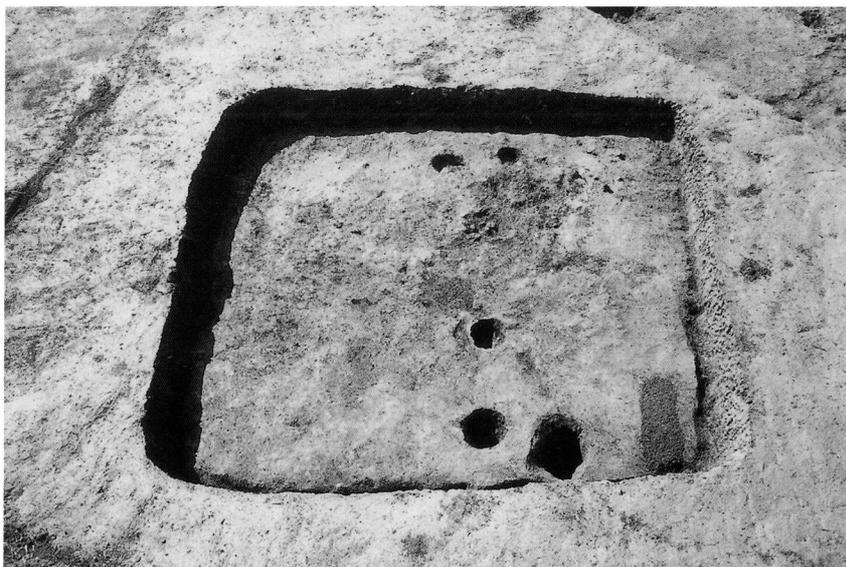
遺構完掘状況



基本土層断面



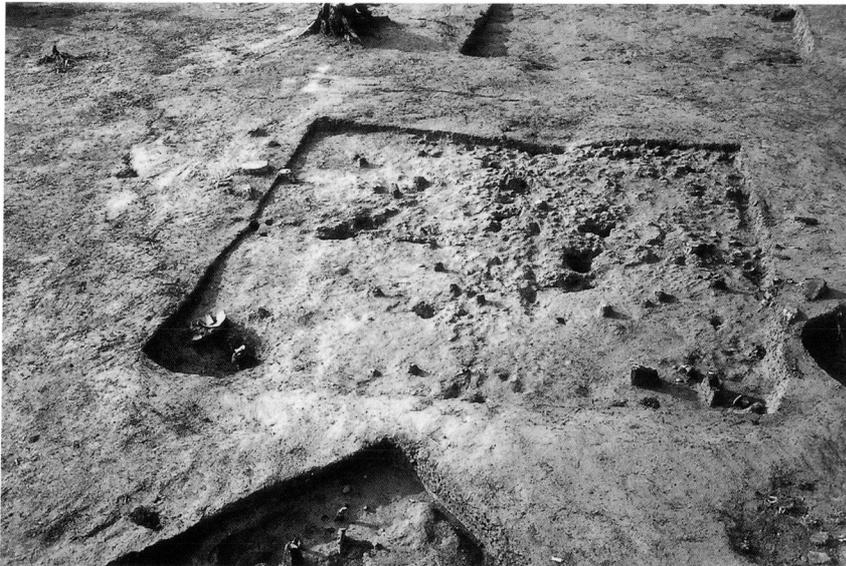
第23号住居跡
遺物出土狀況



第31号住居跡
完掘狀況



第31号住居跡
遺物出土状況



第32号住居跡
遺物出土状況



第32号住居跡
遺物出土状況



第32号住居跡
遺物出土状況



第33号住居跡
完掘状況



第34号住居跡
完掘状況



第34号住居跡
遺物出土状況



第36号住居跡
完掘状況



第37号住居跡
完掘状況



第37号住居跡
遺物出土状況



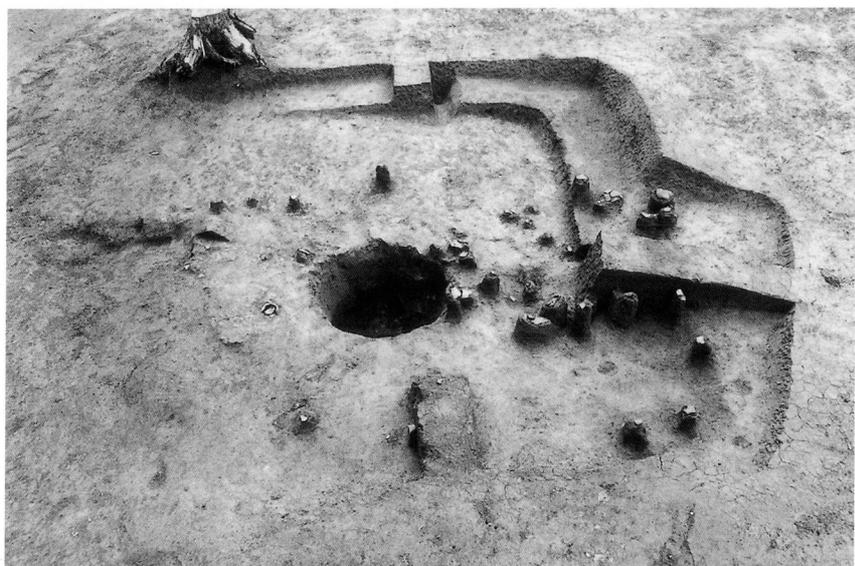
第37号住居跡
遺物出土状況



第37号住居跡
貯蔵穴遺物出土状況



第38号住居跡
完掘状況

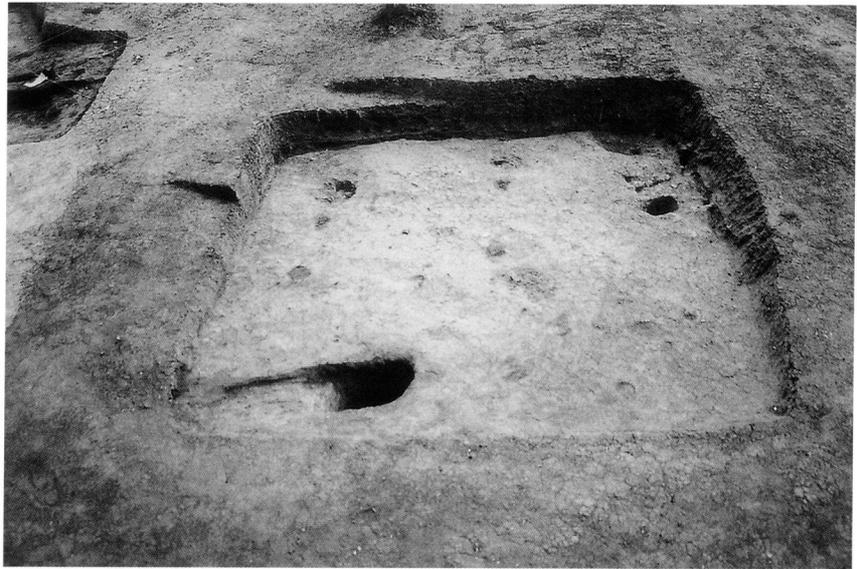


第38・40号住居跡
遺物出土状況



第38号住居跡
遺物出土状況

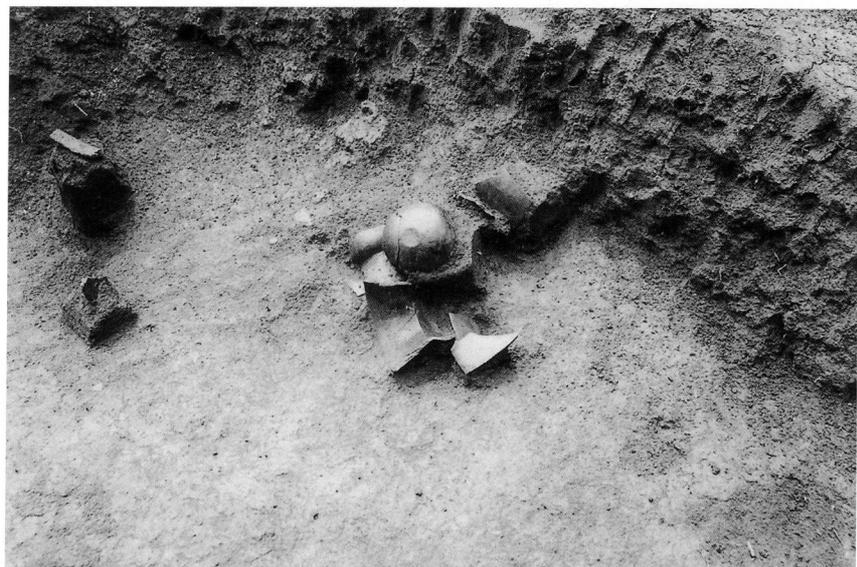
第39号住居跡
完掘狀況

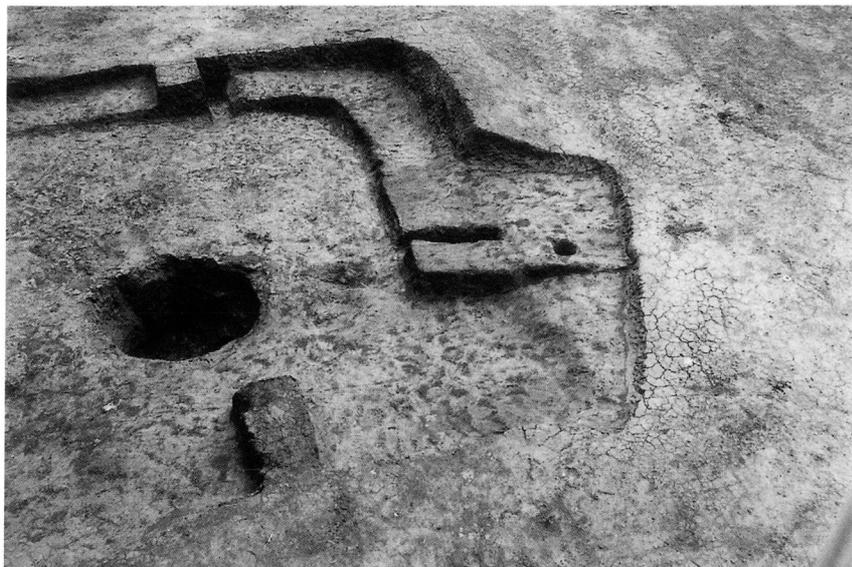


第39号住居跡
遺物出土狀況



第39号住居跡
遺物出土狀況





第40号住居跡
完掘状況



第41号住居跡
完掘状況

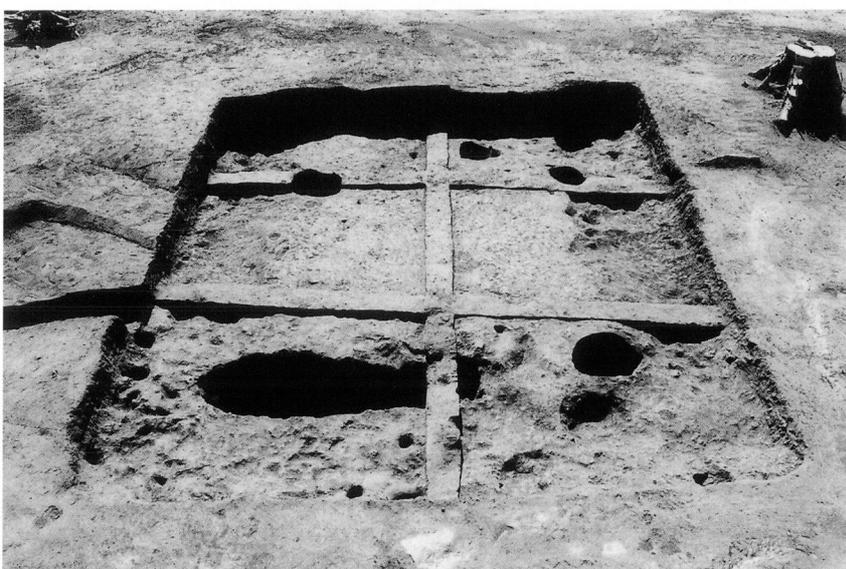


第41号住居跡
遺物出土状況

第41号住居跡
炉完掘状況



第41号住居跡
掘り方状況



第42号住居跡
完掘状況





第43号住居跡
完掘状況



第43号住居跡
遺物出土状況



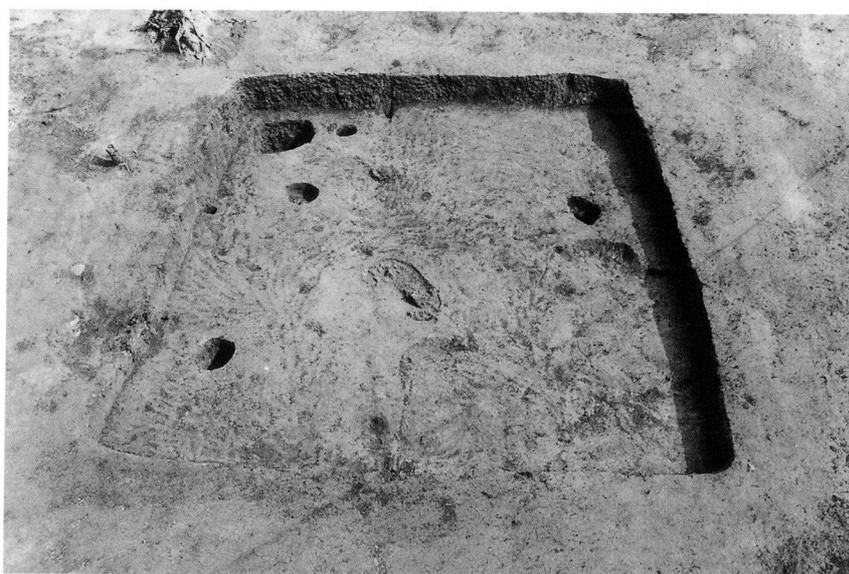
第43号住居跡
遺物出土状況



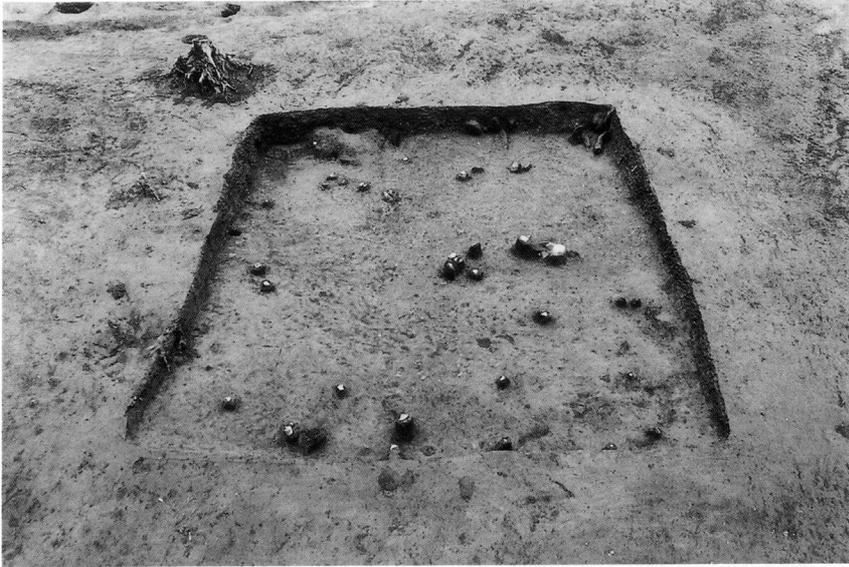
第44号住居跡
完掘状況



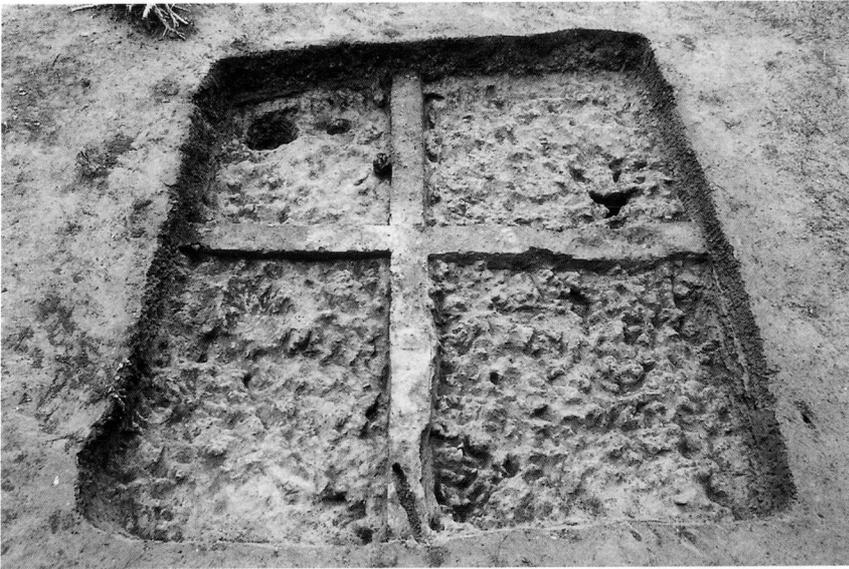
第45号住居跡
完掘状況



第46号住居跡
完掘状況



第46号住居跡
遺物出土状況



第46号住居跡
掘り方状況



第47号住居跡
完掘状況



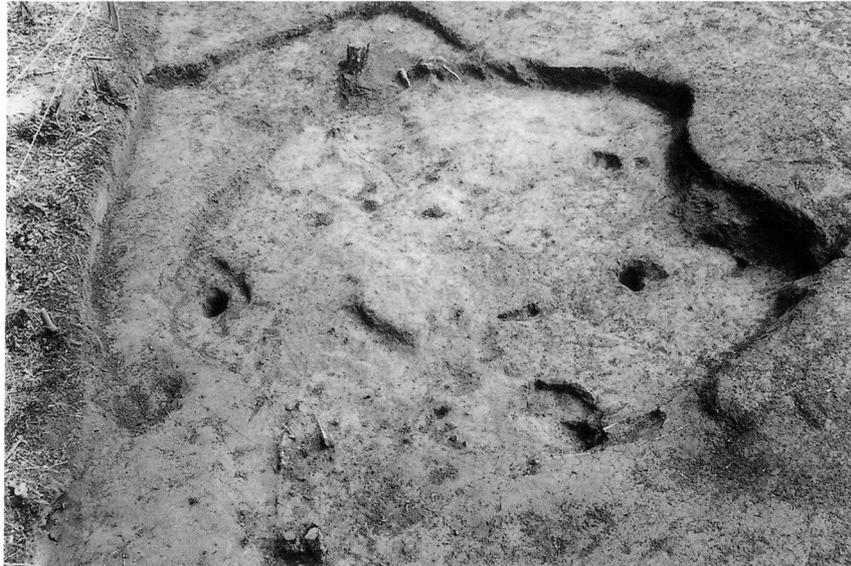
第47号住居跡
遺物出土状況



第47号住居跡
遺物出土状況



第48号住居跡
完掘状況



第49・50号住居跡
完掘状況



第49・50号住居跡
遺物出土状況



第52号住居跡
完掘状況

第53号住居跡
完掘状況



第54号住居跡
完掘状況



第54号住居跡
遺物出土状況





第55号住居跡
完掘状況

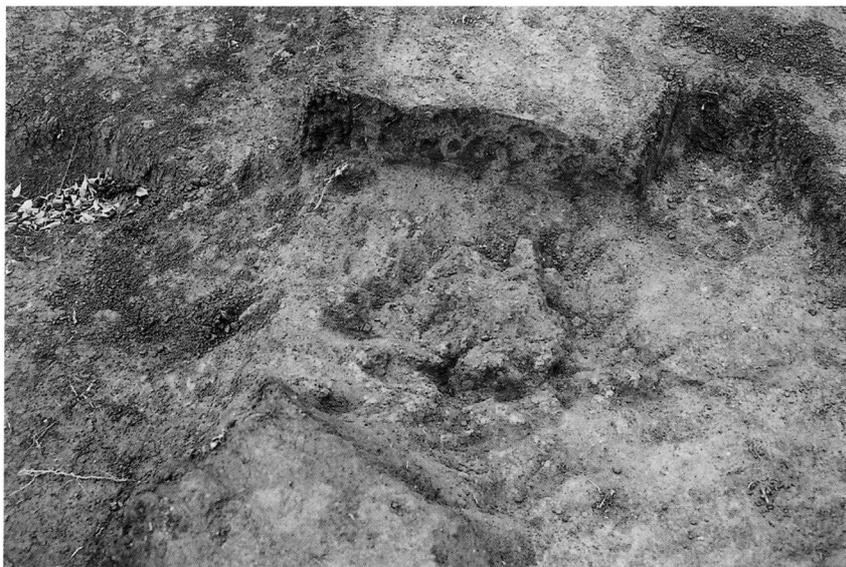


第56号住居跡
完掘状況



第58号住居跡
完掘状況

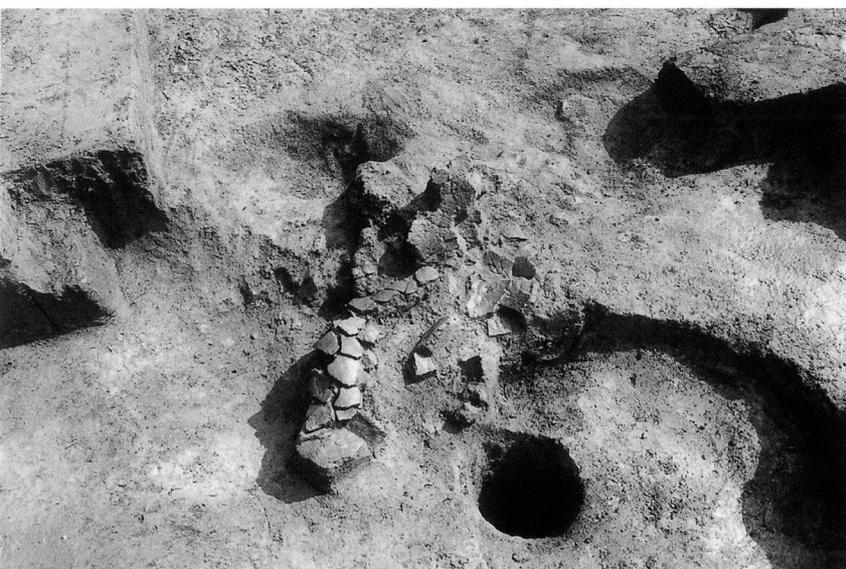
第 1 号炉穴
完 掘 状 况



第 2 号炉穴
完 掘 状 况

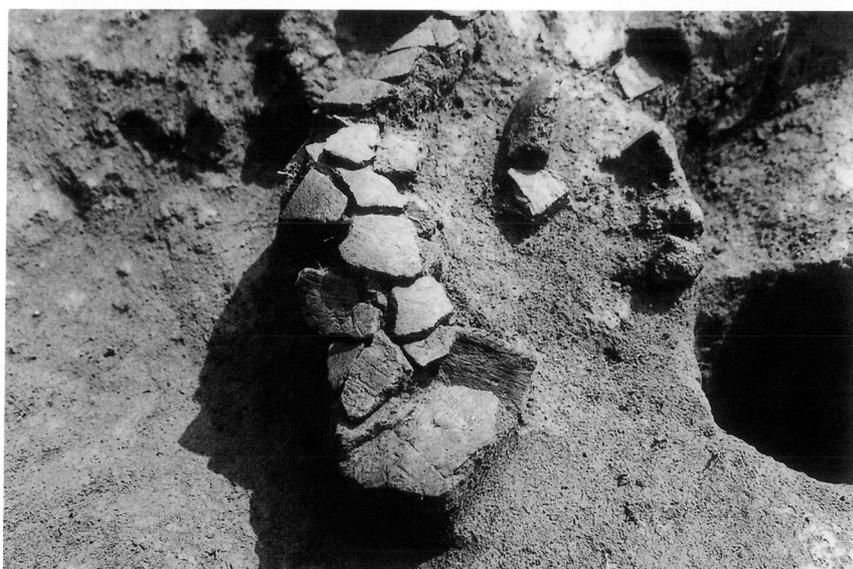


第 2 号炉穴
遺物出土狀況





第 2 号炉穴
遺物出土狀況



第 2 号炉穴
遺物出土狀況

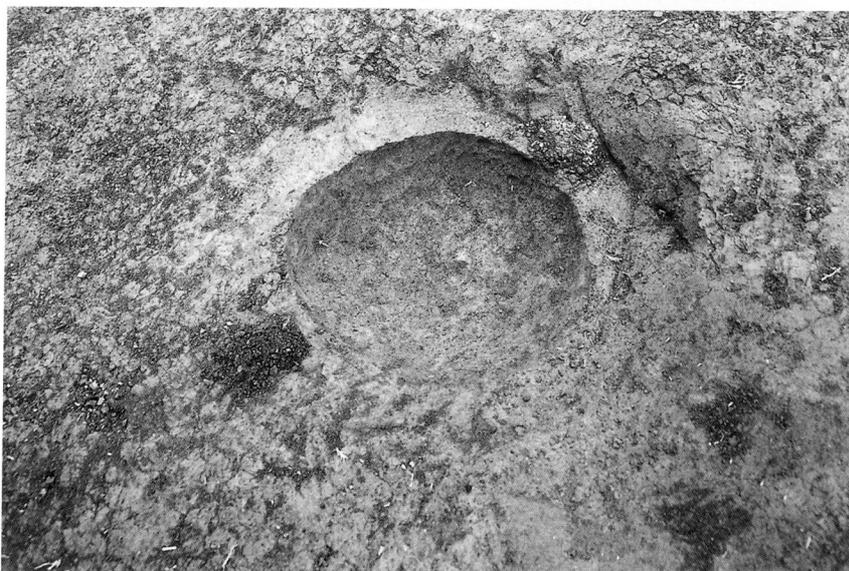


第 4 号土坑
完掘狀況

第 5 号土坑
完 掘 状 况

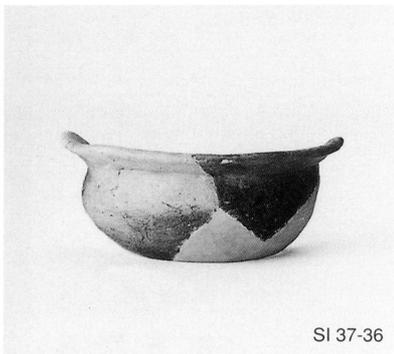
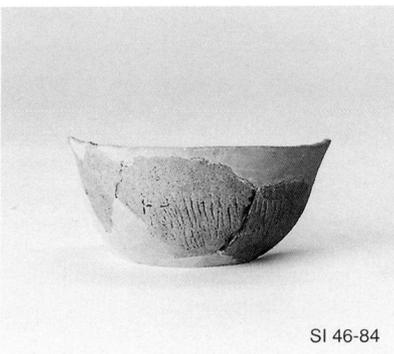


第 6 号土坑
完 掘 状 况

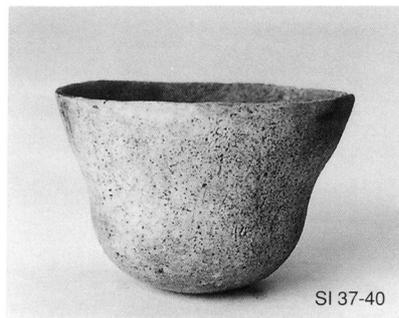


第 8 号土坑
完 掘 状 况





第23・31・32・34・35・37・46号住居跡，第2号炉穴，遺構外出土土器



SI 37-40



SI 39-61



SI 39-62



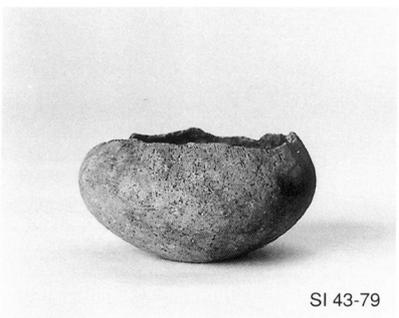
SI 43-78



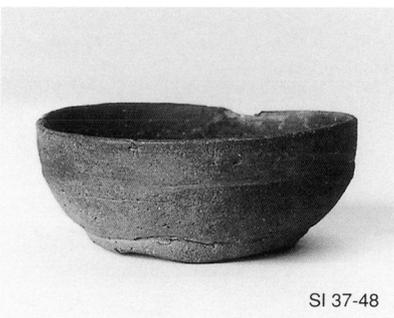
SI 50-99



SI 52-103



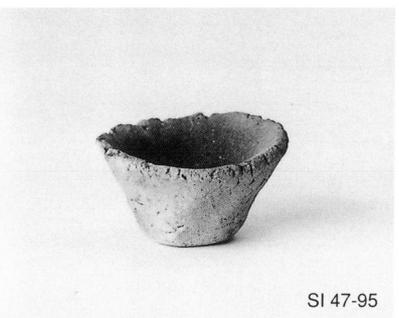
SI 43-79



SI 37-48



SI 44-82



SI 47-95



遺構外-116



遺構外-127

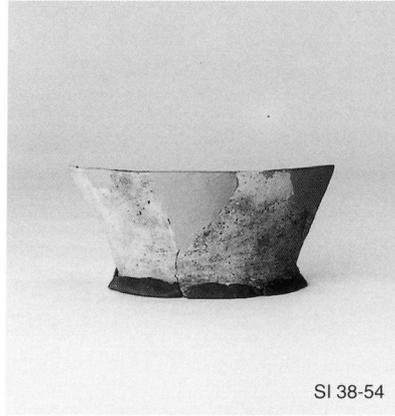


SI 53-104



SI 53-104

第37・39・43・44・47・50・52・53号住居跡，遺構外出土土器



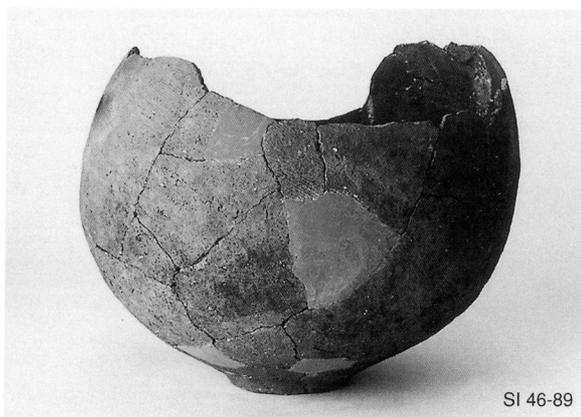
第31・32・37・38号住居跡出土土器



第31・34・37・38号住居跡出土土器



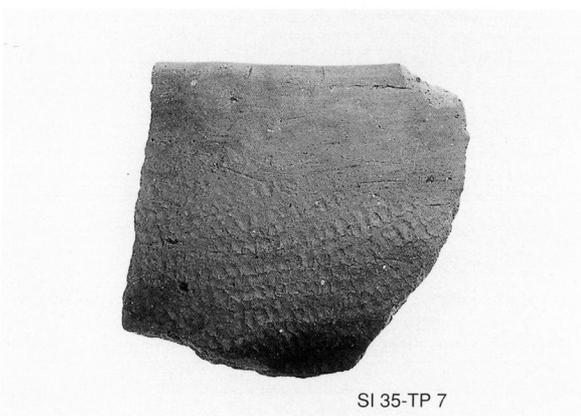
SI 42-73



SI 46-89



SI 54-106



SI 35-TP 7



SI 35-TP 8

SI 35-TP 9

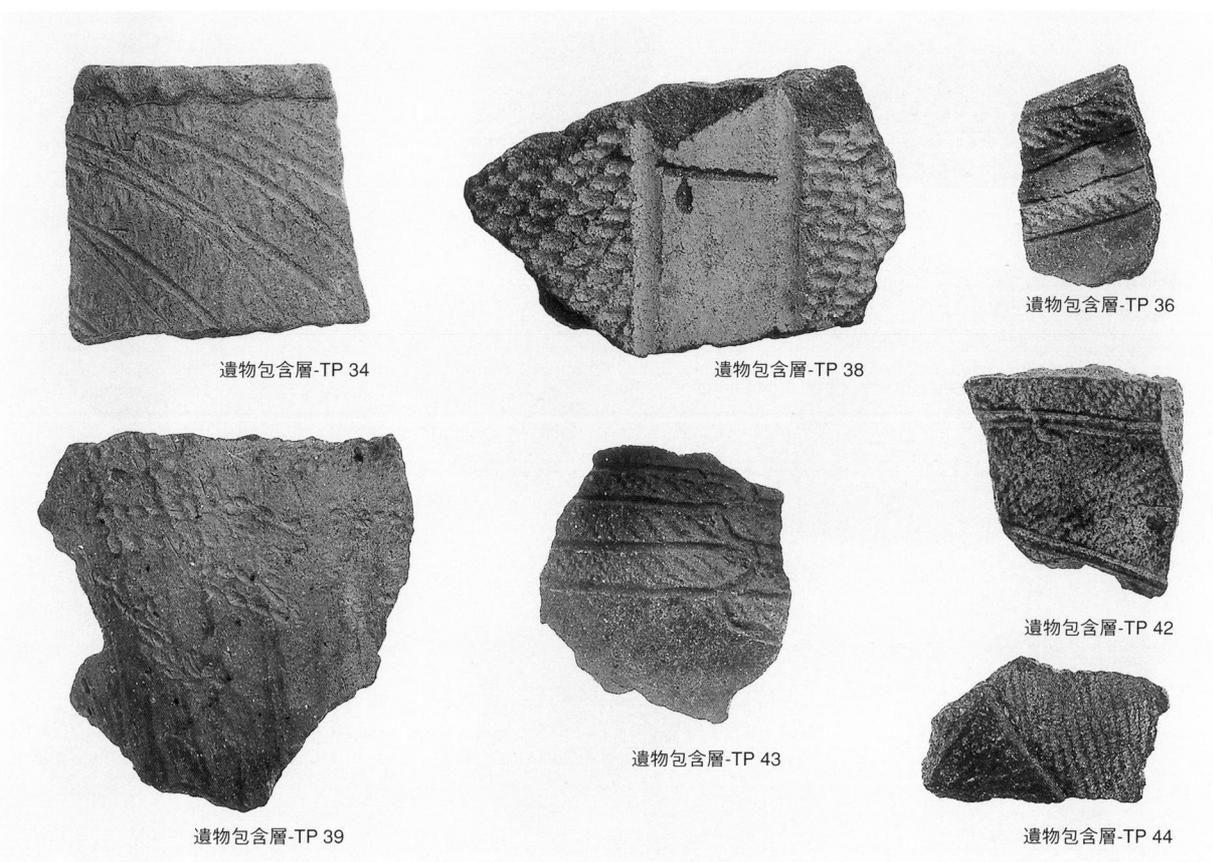
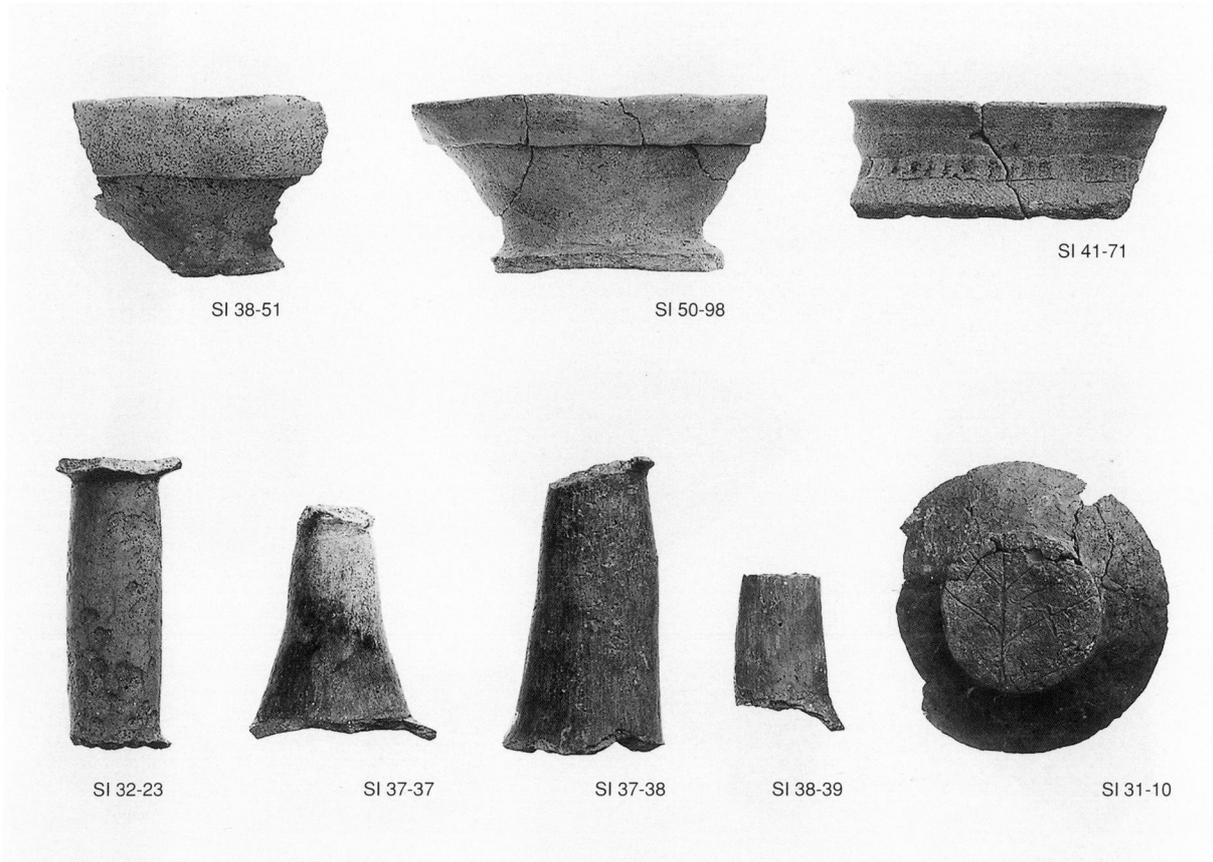
SI 35-TP 10



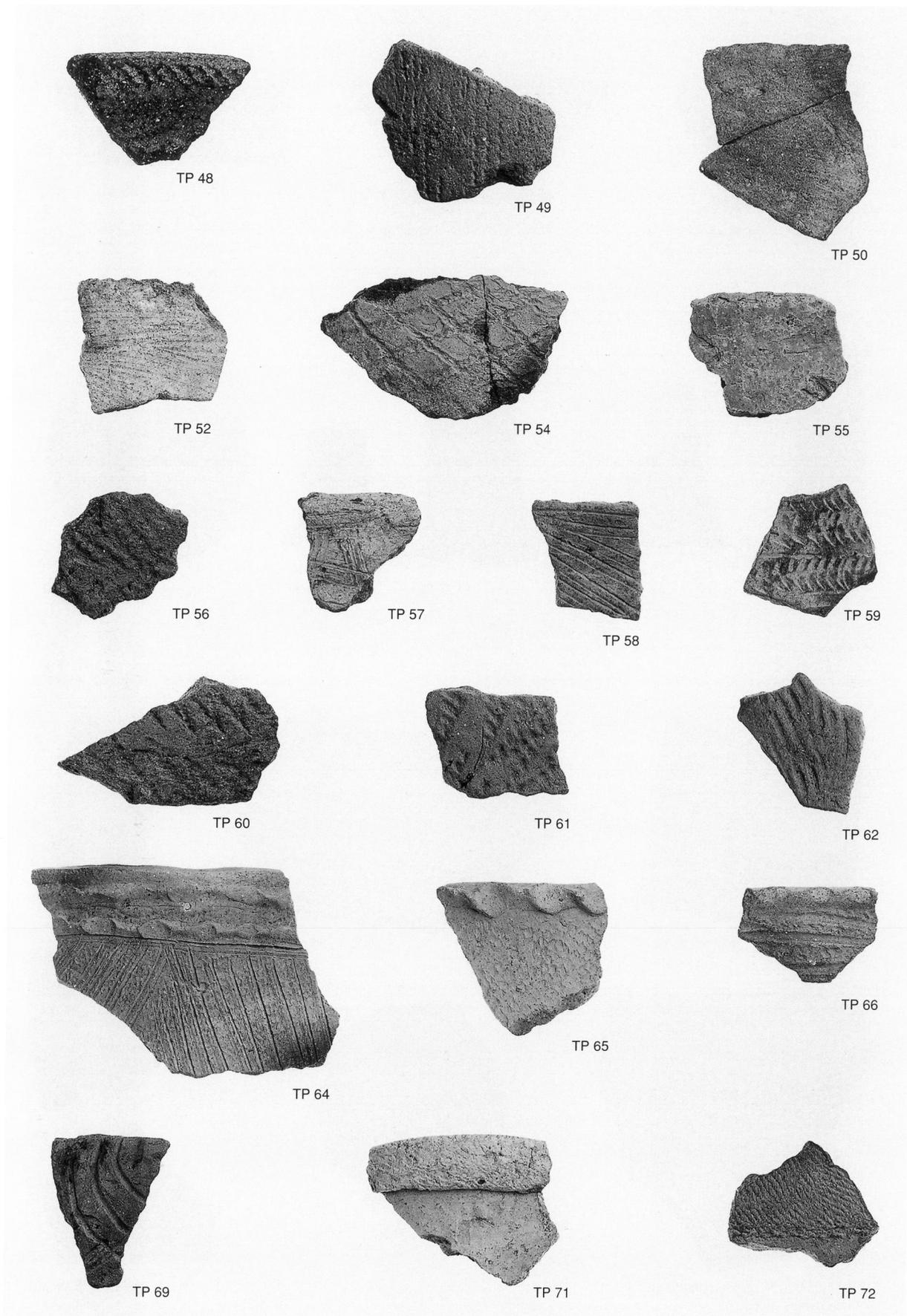
第1号炉穴-TP 30

第1号炉穴-TP 31

第1号陷し穴-TP 74



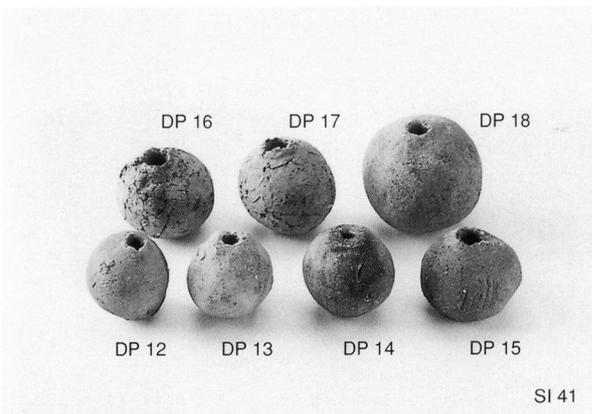
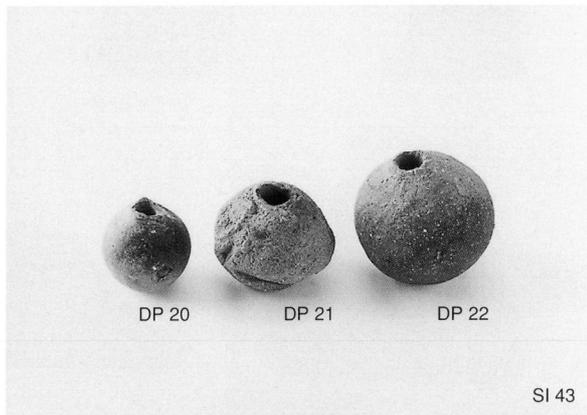
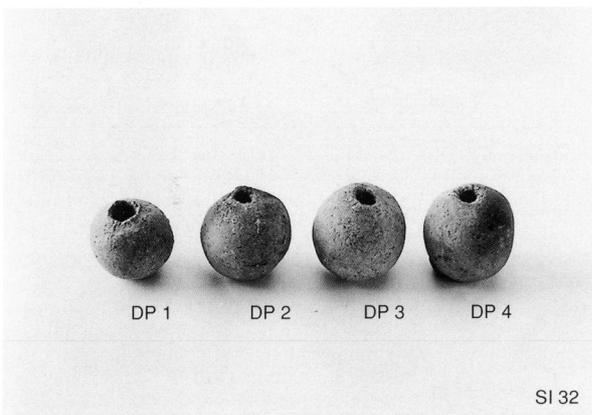
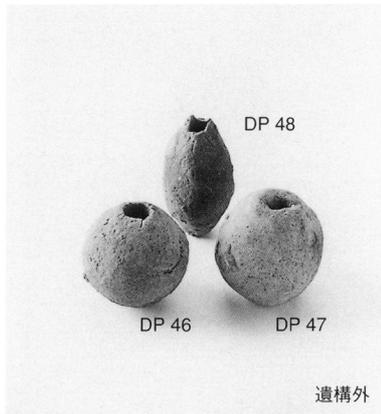
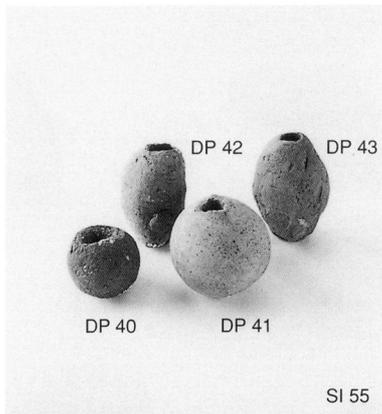
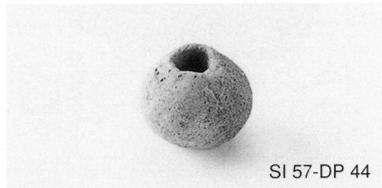
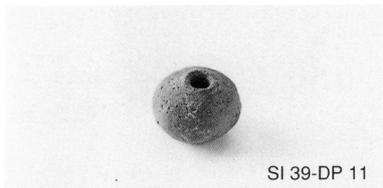
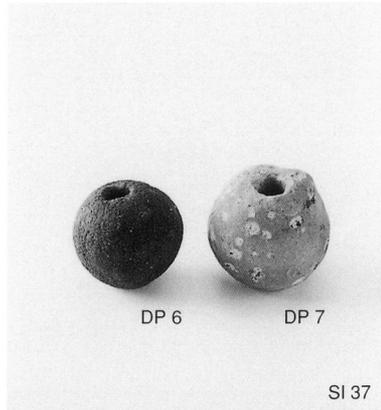
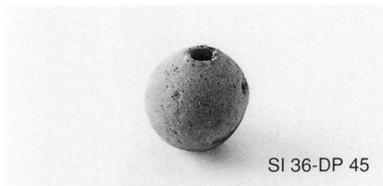
第31・32・37・38・41・50号住居跡，遺物包含層出土土器



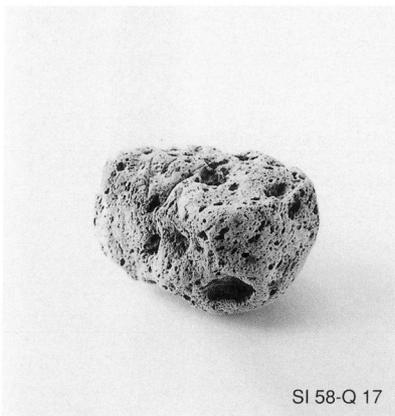
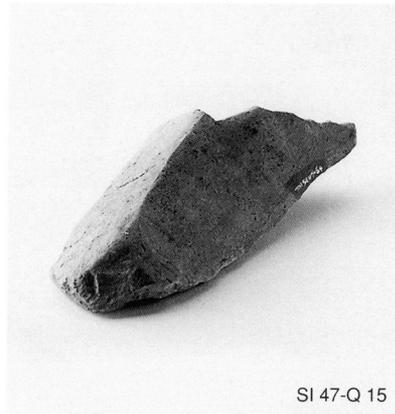
遺構外出土土器

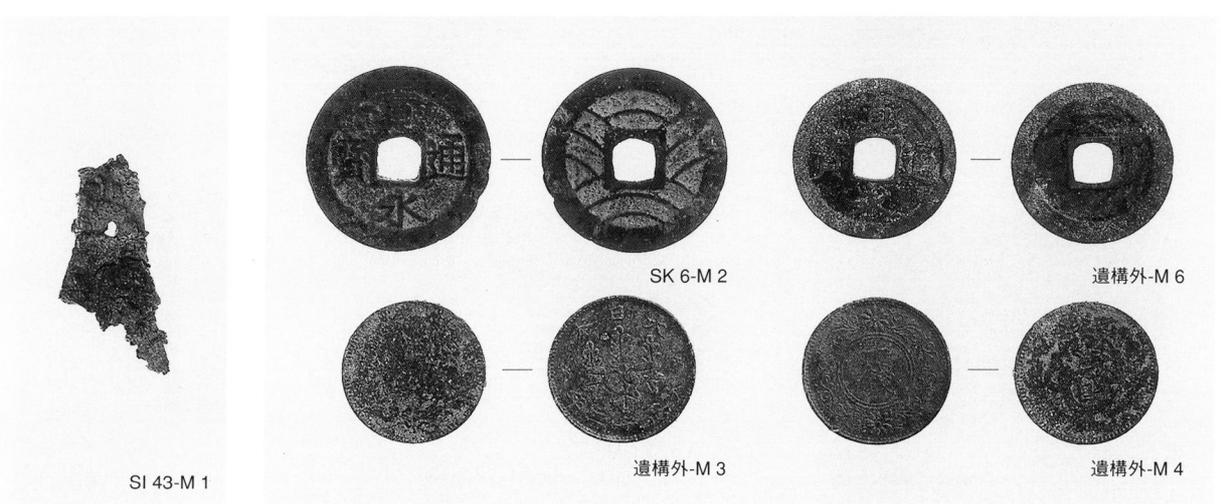
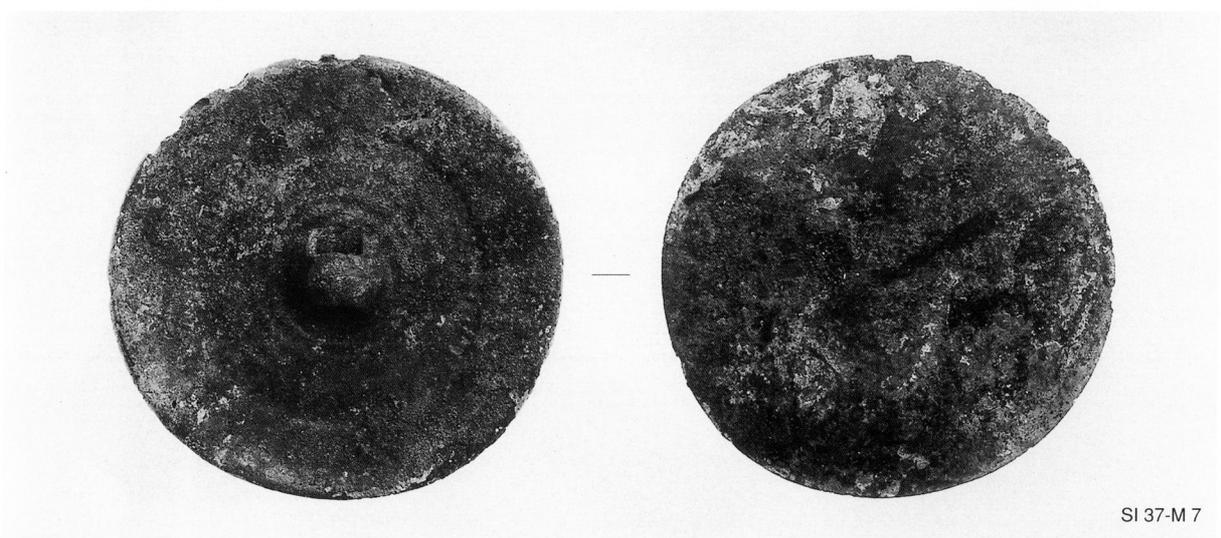
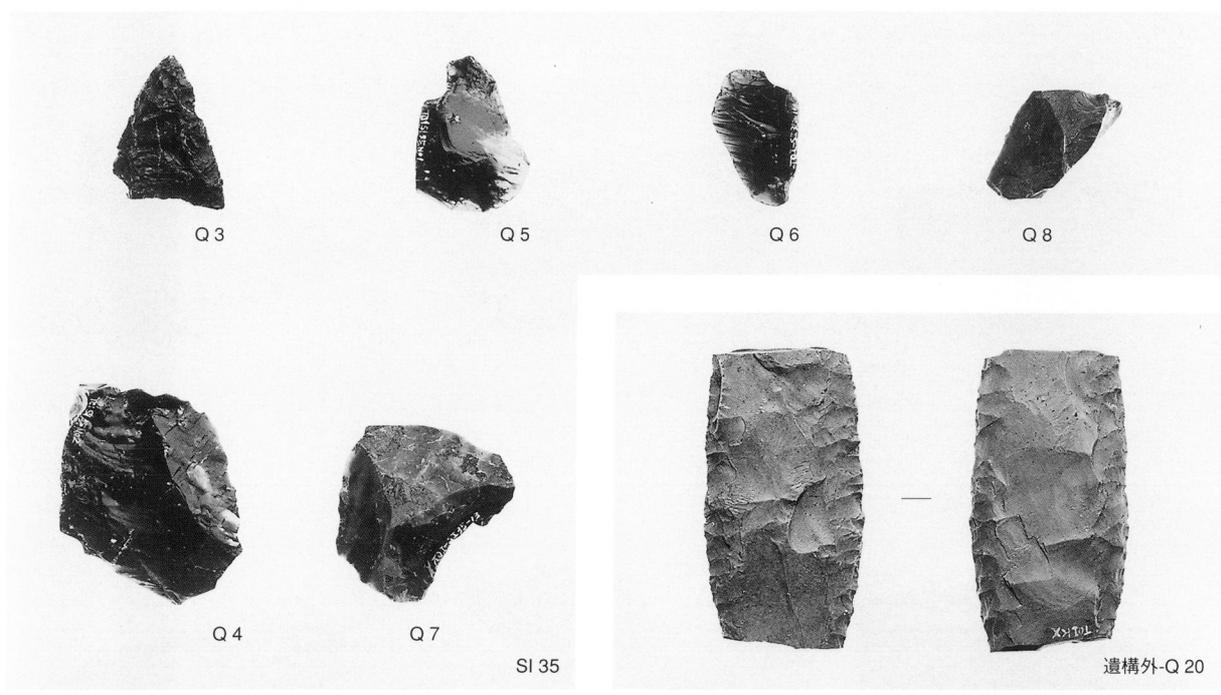


第37・46・50・54号住居跡，遺構外出土土製品



第32・36・37・39・41～43・51・52・55・57号住居跡，遺構外出土土製品





第35号住居跡・遺構外出土石器，第37・43号住居跡，第6号土坑，遺構外出土金属製品

茨城県教育財団文化財調査報告第185集

大山 I 遺跡 2

平成14（2002）年3月20日 印刷

平成14（2002）年3月25日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2号

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

印刷 (有)平電子印刷所

〒970-8024 いわき市平北白土字西ノ内13

TEL 0246-23-9051